

法衣と念珠とを献じ之を玉枕上に置きしに、御惱みは立ちどころに癒えた。天皇御感斜ならず、行巡を阿闍梨に補して莊園を寄せ、且勅を蒙りて應ぜず遂に天皇に勝つたので勝王寺と御改號遊ばされたと傳へてをる。

二、開成皇子の墓

開成皇子の墓は勝尾寺山の最高所にある。石塔壹基、高さ凡二米、傍に皇子の座禪石がある。

皇子は光仁天皇の皇子で、幼にして佛に志し、ひそかに宮中を出でて此山に入り名を開成と改め、善仲・善算を師として御修業せられ、薨後こゝに葬り奉つた。

三、箕面からの沿道 凡四軒

札所としての勝尾寺への順路は茨木の總持寺からであるが、今は交通機關の關係で箕面から登る者が多い。箕面の瀧の下手から山へかゝり、川に沿ふて上れば所々に小さな瀧があつて谷川の流れも清く、次第に靜かな谷間にはいつて、木の葉の下をくぐる水源の状態も見られ、左右には杉・檜の植林の有様も見られる。

沿線

一、服部天神社（脚氣の天神） 豊能郡中豊島村大字服部（服部停留所南東百米）

社格、村社——祭神、少彦名命・菅原道真——

寛和元年（凡そ九五〇年前）花山法皇の勸請し給ひしものと傳へてをる。嘗て川邊左大臣藤原魚名公

當社に參詣祈願せられたといはれてをる。何時の頃よりか脚氣病を患ふものゝ參詣頗る多く、祈禱・神水・草履を乞へば靈顯があらたかであるとのこと。今社殿の周圍に多くの草履や草鞋が懸けられてあるのは、病氣全快者の御禮に奉納したものである。

二、天竺川 服部天神の東凡そ百米

服部天神社の東凡そ百米に小溪がある。これを天竺川といふ。兩岸の松林と芝生との配合が美しい。

大阪府の道路公園の候補地に數へられてをる。

三、螢ヶ池 豊能郡麻田村

大阪市立刀根山療養所は螢ヶ池停留場の南東凡そ三百米にある。北に小丘に負ひ南に開けた丘陵一帯數萬坪、松林あり、竹藪あり、眞に病者の樂天地である。

四、石橋 豊能郡北豊島村

阪急寶塚線と箕面線との分岐點で、醫科大學病院分院精神科は停留場の東凡そ三百米待兼山麓にある。又七年制の府立浪速高等學校もこゝにある。

五、近郊隨一、畑の梅林 豊能郡秦野村字西畑 阪急石橋停留場北凡そ一軒

初春の遊覽地としての梅の名所と稱せられる所も少くないが、多くは郊外電鐵の自家廣告で、これといふ程の所はすくない。畑の梅林は近年阪急電鐵の宣傳によつてやゝ知られたところであるが、大阪か

ら最も近くてこれだけまとまった梅の見られる所は金熊寺梅溪をおいては外にはない。
北を見上げた山と村との眺めもよいが、南を見晴らして大阪・尼ヶ崎の遠望も又大きい景色であらう
水がないのは一寸もの足りないが。

六、萱野三平の遺跡 豊能郡萱野村（牧落又は箕面停留場より東凡そ二・五軒）

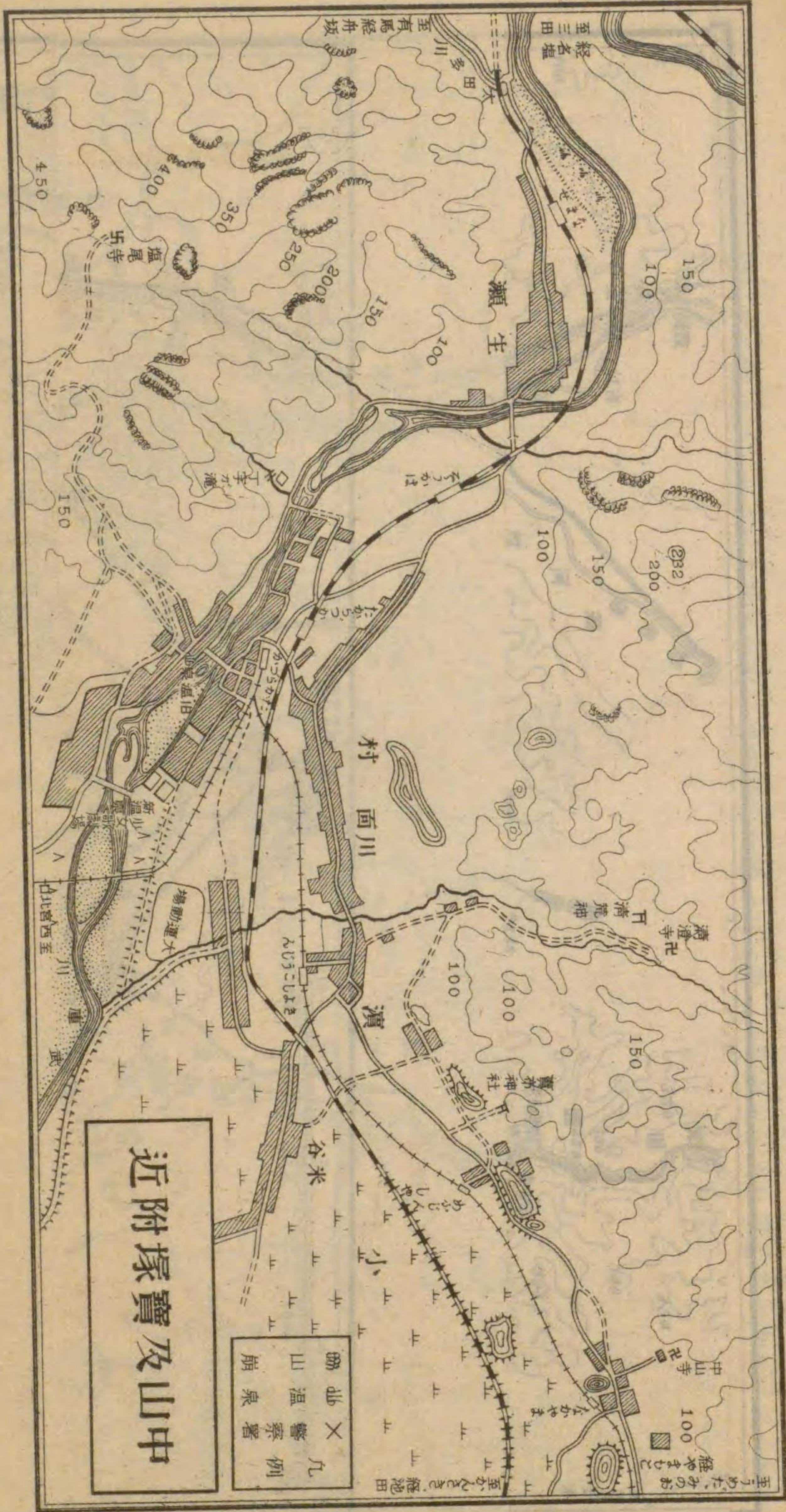
赤穂の義臣

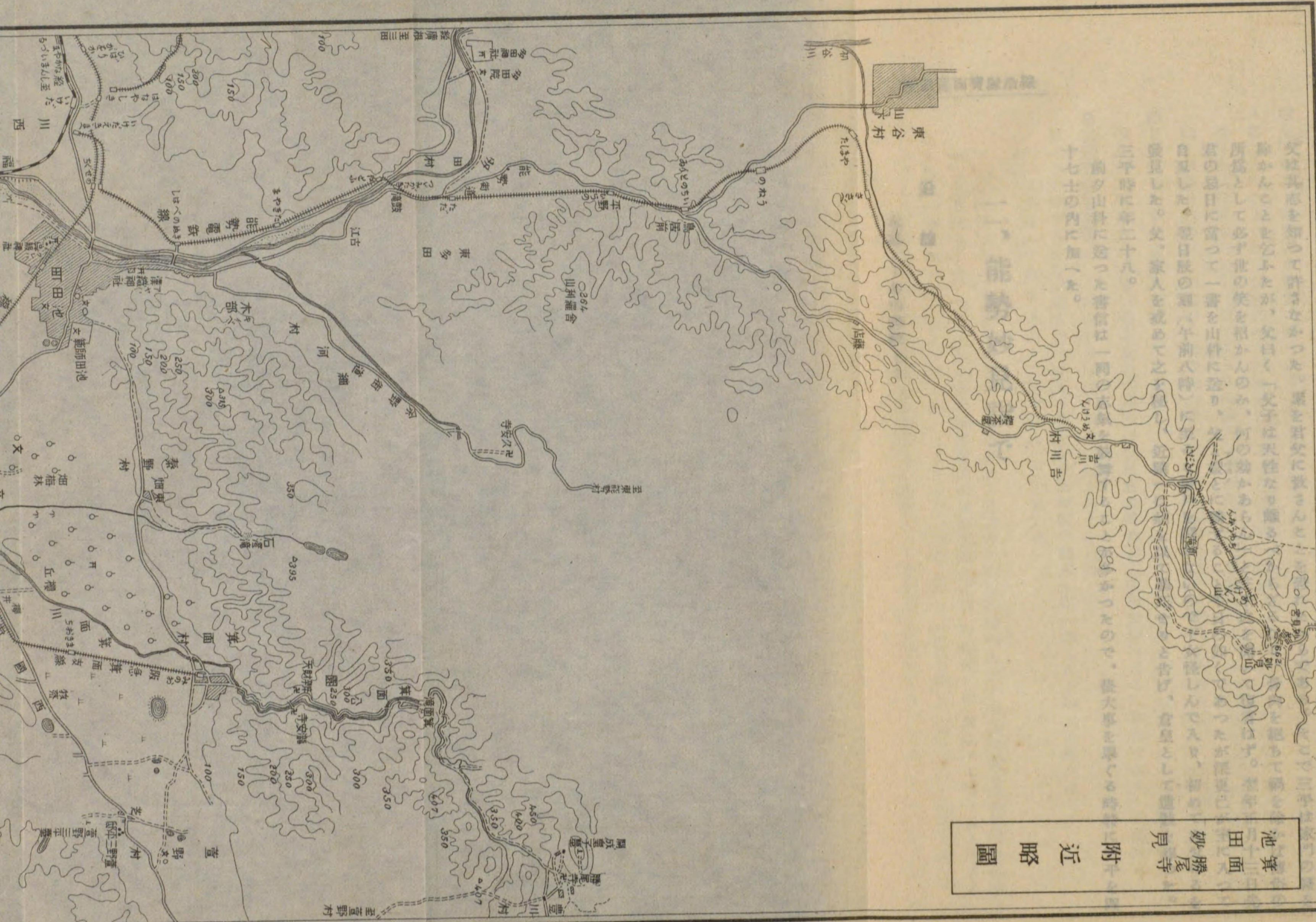
萱野村大字芝は西國街道のほとりにある。赤穂の義士萱野三平が君父の恩義に進退谷り自刃せし舊邸
は今尙荒廢せる一字を止め、墓はこゝから南約三百米、千里山北麓の共同墓地に在つて勇士の面影を誇
り顔に立つてをる。

萱野三平は攝津萱野郷の人で、父重利は大島出羽守に仕へてゐた。三平は其第二子である。年十三大
鳥氏の薦を以て赤穂侯淺野長矩に仕へ中小姓となつて江戸にあつた。

元祿十四年春長矩が吉良義央を幕廷に斬り大不敬に坐し即日死を賜つた折、三平は早水藤左衛門滿堯
と馬に乗じて變を赤穂に告げんとして路に萱野を過ぎた。衆人三平の門に集り將に柩をかつぎ出さうと
してをる。三平怪しみて之を問へば母の柩であつた。三平驚き且悲んだが、私情を以て公事を緩うすべ
からずと、馬を下り柩を拜し復た鞭をあげて西に向ひ赤穂に至つて其使命を果した。

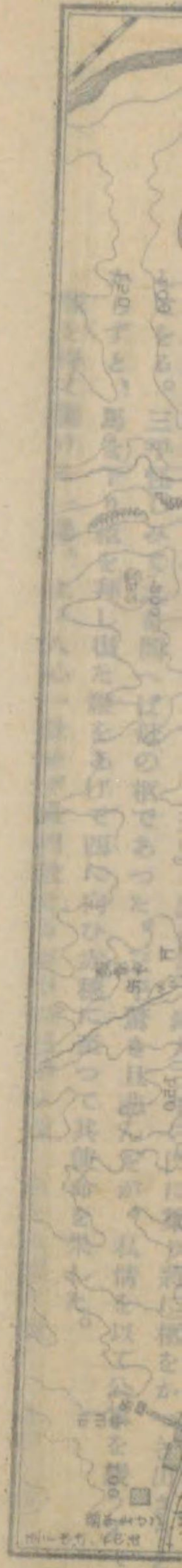
報を得て驚ける一藩、上下人心一致せず衆四散せるが中に三平は深く志を良雄に通じ、郷里に歸つて



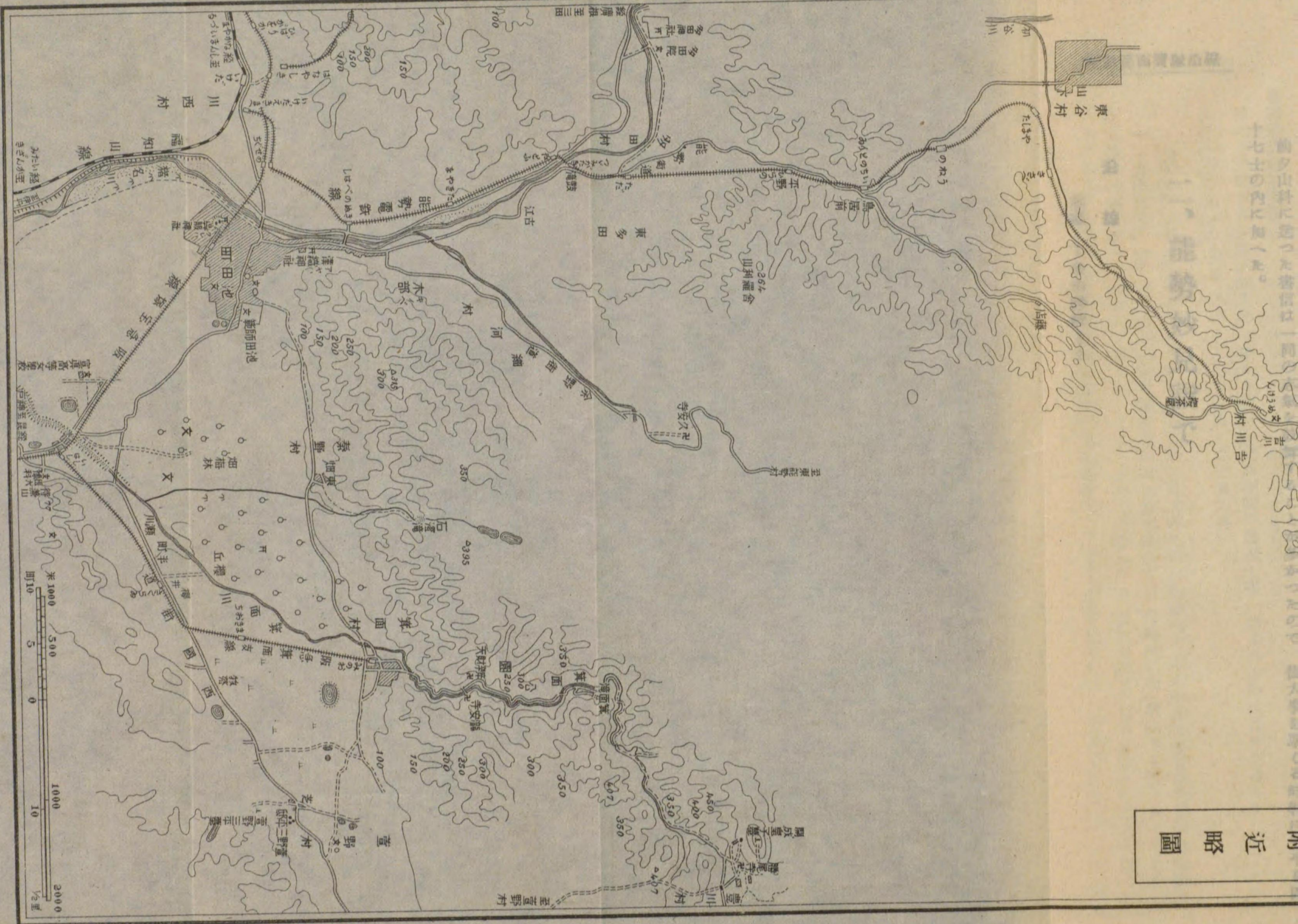


箕面勝尾寺 附近路圖

父は其志を知つて許さなかつた。母を君父に教さんと
 断かんことを乞ふたが、父曰く「父子は天性なり難
 所爲として必ず世の笑を招かんのみ、何の効かある
 君の意日に當つて一書を山科に送り、
 自見した。翌日脱の箱八午前八時、
 發見した。父、家人を戒めて之
 三千時に年二十八。
 崩夕山科に送つた書信は一月
 十七士の内に加へた。



附近略圖



沿線

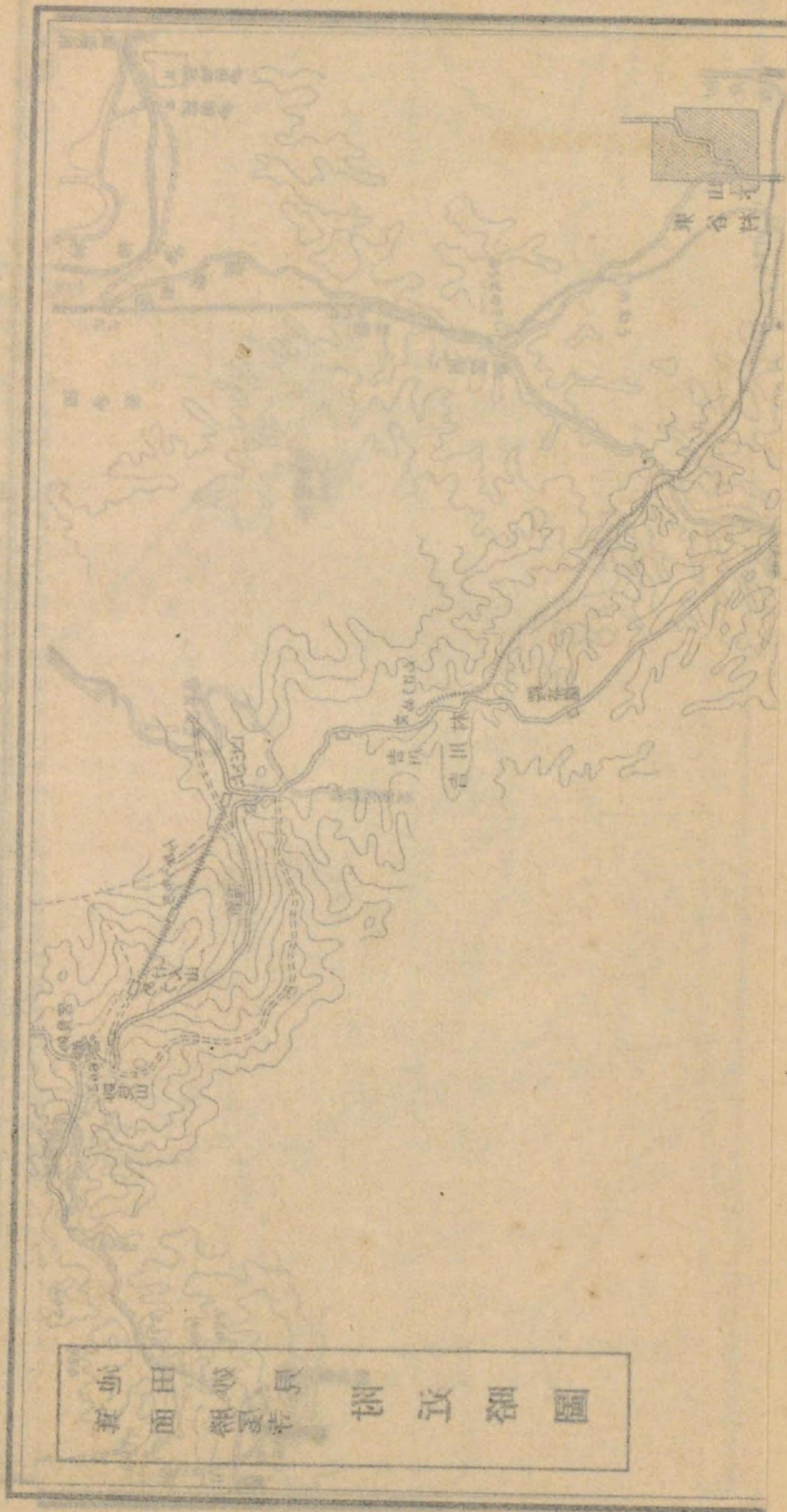
木部——多田神社——

一、能勢妙見詣で

母の喪に服した。それより屢々山科に往き復仇を議した。冬、三平父に乞ふて東行仕を求めんとしたが父は其志を知つて許さなかつた。累を君父に致さんことを恐れたからである。そこで三平は家門の籍を除かんことを乞ふたが、父曰く「父子は天性なり離るべからざるなり。骨肉を絶ちて禍を除かば薄俗の所爲として必ず世の笑を招かんのみ、何の効かあらん」と三平之を聞いて復言はず。翌年正月十三日先君の忌日に當つて一書を山科に送り、父と嫂アノコノとに談ずること平日の如くであつたが深更己が室に入つて自刃した。翌日辰の刻（午前八時）に至るも房戸を開かないので下女怪しんで入り、初めて自刃せるを發見した。父、家人を戒めて之を秘し、近隣へは病を以て暴死せりと告げ、倉皇として遺骸を葬つた。

三平時に年二十八。

前夕山科に送つた書信は一同の志氣を鼓舞することが多かつたので、後大事を擧ぐる時特に三平を四十七士の内に加へた。



能勢妙見 豊能郡東郷村大字野間中

登山路が三條ある

- 一、吉川村から登るもの——能勢電車終點から山上迄凡三軒、内峻阪二軒、此間ケーブルカーがある。
- 二、東能勢村から登るもの——麓から山上まで凡二軒。阪急池田から頂上の鳥居前まで自動車の便がある。
- 三、東郷村から登るもの——麓から山上まで凡二軒。

何れも峻険であるが大阪方面からするものは交通機關の關係上第一によるものが普通である。

多田源氏の守護佛

妙見山、標高六六二米、杉木立におほはれた峻坂を攀れば左右に旅舎がある。茶店がある。新瀧がある。題目の音が水聲に交つて聞える。

山上に登れば西攝の山野は一瞬の内に集り遠く茅渟海をへだて、紀淡の水道を望むことが出来る。

妙見堂（日蓮宗に屬す）は、もと多田源氏の後裔能勢氏の守護佛であつたが、天明（約一四〇年前）の頃から參詣者が多くなり京阪地方から厄難病苦を患ふるものが、陸續として參籠した。明治十七年能勢家卅四代頼満、敷地・諸堂等を寄附し翌十八年信徒共有衆庶參拜所の許可を得た。靈驗あらたか、熊本妙見と共に海内著名の靈場である。

各府縣何れの方面を問はず來賽者があつて、現今結社三百餘、信徒も十萬を下らないとのこと。

沿線

一、木部の植木

豊能郡細河村（能勢電鐵絹延橋停留場の東二百米）

古くから牡丹の栽培が盛んで、又苗木・庭木・盆栽の栽植隆盛を極め、池田植木として本邦各地は勿論遠く海外にも輸出されてをる。

本地に於ける斯業は遠く天文の頃（約三八〇年前）に始まり、大阪府市の勃興に伴つて庭園種苗の需要益々加り、園藝の術が大いに進んだ。同地附近の山中より一種の細砂が出る。此砂で挿木を行へば極めてよく根を生ずる。當地斯業の發達は實に此砂に基くものである。

二、多田神社

川邊郡多田村（能勢電鐵多田停留場西一軒）

社格、縣社——祭神、源滿仲——

多田源氏の祖神

多田院は源滿仲の廟で、源家崇敬の寶刹として鷹尾山法華三昧寺と言つたが、明治維新後多田神社と稱し縣社に列した。猪名川の清流に臨み頗る宏麗である。

初め源滿仲此地を所領し、地を相して居を定め、田地を開き、鑛穴を穿ち、或は水中の砂金を採集して富を作り所謂多田源氏の祖をなし、村上・冷泉・圓融・花山の四朝に歴事して、朝廷の爪牙となり、長徳三

年を以て卒した。在世中此地に寺院を起し、丈六の釋迦像を安置し、死後遺骸を此所に葬った。鎌倉幕府の世となつて、祖先の廟地として、崇敬極めて篤く、延文二年足利義詮が尊氏の遺骨の一分を當寺に寄附し、爾來累代足利氏遺骨の一分を奉納して其菩提を弔はしむる事となつて將軍の信仰も厚かつた。江戸時代となつても、徳川氏亦源家の裔なるを以て尊崇厚く、寛文中將軍の直普請を行ひ今日に至つて居る。社後に滿仲の墓所がある。其東方に頼光及滿仲一族の墓がある。西に並んで足利將軍十三代の遺骨を納めてある。

三、寶塚と中山寺

順路

中山停留場——中山寺——清荒神——寶塚温泉——寶塚停留場——(行程凡五軒)

池田町——花屋敷と雲雀ヶ丘——牡丹の名所山本——

中山寺——兵庫縣川邊郡長尾村、中山停留場北百米

——宗派、眞言宗御室派——本尊、十一面觀音(國寶)——

西國廿四番の靈場

野をも過ぎ里をも行きて中山の寺へ參るは彼の世のため

寺は紫雲山と號し、西國巡禮廿四番の札所で、寺傳によると仲哀天皇妃大中姫をこゝに葬り、又妃の生み給ひし皇子忍熊王は宇治にて敗死せられこゝに歸葬し奉つた。後聖徳太子が其古陵につき寺を建立し、百濟の佛工に命じて十一面觀音の木像を造立せしめ安置されたのが本寺である。

今鐘樓の西方に「石のからと」の石標のある古墳があつて中に大棺が安置されたのが見られる。これは白鳥の忍熊王を葬つたものである。(攝津名所圖會)

昔は七堂伽藍そびえ立ち、僧坊八十院に及び比叡・高野の兩山と併せ稱せられるほどの大寺院で今の奥の院のところにあつたが、天正年間の兵火にかゝつて衰運に向ひ其後今の所に移した。現今の堂宇は慶長八年(約三百三十年前)豊臣秀頼の再建にかゝるものである。

清荒神——兵庫縣川邊郡小濱村の内米谷(中山寺の西凡二軒、清荒神停留場北凡一軒)

——宗派、眞言宗——本尊——大日如來(國寶)——

日本第一清荒神

寺は蓬萊山清澄寺と號し寛平年中（凡千三十年前）宇多天皇の勅建、四面には縁したるばかりの山を繞らし、ものさびた別天地で、殊に名高い方丈の庭園は支那廬山の景を模したものである。
開基益信僧正修法の時、三寶荒神こゝに影向せりとて荒神祠を設けて之を祀り、宇多天皇から日本第一清荒神の尊號を賜はつたとのことである。寺はもと東の山上にあつたが、壽永二年源平合戦の時兵火にかゝつて昔の偉觀を失つたが、此荒神祠だけは其位置を少しも變へたことのない名祠と稱せられ、世の崇敬をあつめてをる。

寶塚 兵庫縣武庫郡良元村の内寶塚

炭酸泉——舊温泉——

寶塚は武庫川の南岸にある。此地はもとさびしい一寒村に過ぎなかつたが、明治廿五年同地湧出の鑛泉を引いて浴場を開いてから、避暑・保養のため來り集るもの多く忽ち一市街を形成した。

鑛泉は溫度攝氏十三度に過ぎないから温浴には加熱を要するが、多量の食鹽を含む炭酸泉で皮膚病・レウマチス等に特効がある。

近郊隨一の歡樂境——新温泉——

近年阪急電鐵會社が川の北岸（川邊郡小濱村）に大浴場新温泉を開設し、遊戯場・劇場・大運動場等を經營するに及んで、京阪神都人士の集り來るもの日と共に加り、殊に少女歌劇の名は全國に轟き、京阪の地を訪づれるものは必ず一度はこゝに遊ぶ有様で、武庫川北岸は急激な發展をなし、今兩岸を總稱して寶塚と稱するに至つた。

沿線

一、池田町 豊能郡池田町

猪名の湊

池田町は昔秦下郷と稱へ、今、町の東につゞく秦野村——古の秦上郷——とよもに歸化人秦人の居つたところである。上古は海水灣入せる入江に臨んで、猪名の湊ともいつた。

大阪を去る凡二十二軒、猪名川の左岸にあり、又、猪名川谷の口にあたるので、北方山間及附近諸村の産物もこゝに集散するものが多い。池田炭・池田植木等は其主なるものである。酒は古來對岸の伊丹とよもに美釀を以て聞へてゐたが、近年非常に衰へて、今は只其名を止めるに過ぎない。

人口一萬五千（昭和五年十月現在）

漢織・吳織——衣服文明の開發——

池田地方は、應神天皇の御代に支那から歸化した機織の技術家が住んで、我國の衣服文明に力をつく

した名高い處である。

初め應神天皇の勅命ではるく支那の江南、吳（今の蘇州地方）から機織の上手な工人四名が日本に渡來して、津の國武庫の浦についたが、折しも天皇崩御のためこの工人を仁德天皇に献じた。朝廷は漢織・吳織兩名に猪名の地を賜つたので、兩名はこゝに居つて盛んに機を織つた。

仁德天皇の七十六年兩名は共に病死した。天皇は即ち翌年漢織を伊居多神社、吳織を吳服神社に祀らせられた。上の社・下の社として今日に至り、今郷社に列せられてをる。特に吳服・機織・養蠶等に關する職業の人は祖神として崇敬頗る厚い。

二、花屋敷と雲雀ヶ丘

兵庫縣川邊郡川西町

花屋敷停留場から見渡す南方加茂の臺地には果樹の栽培が盛んで、陽春四月、見渡す限りの桃花・李花、花屋敷の名にそむかない。

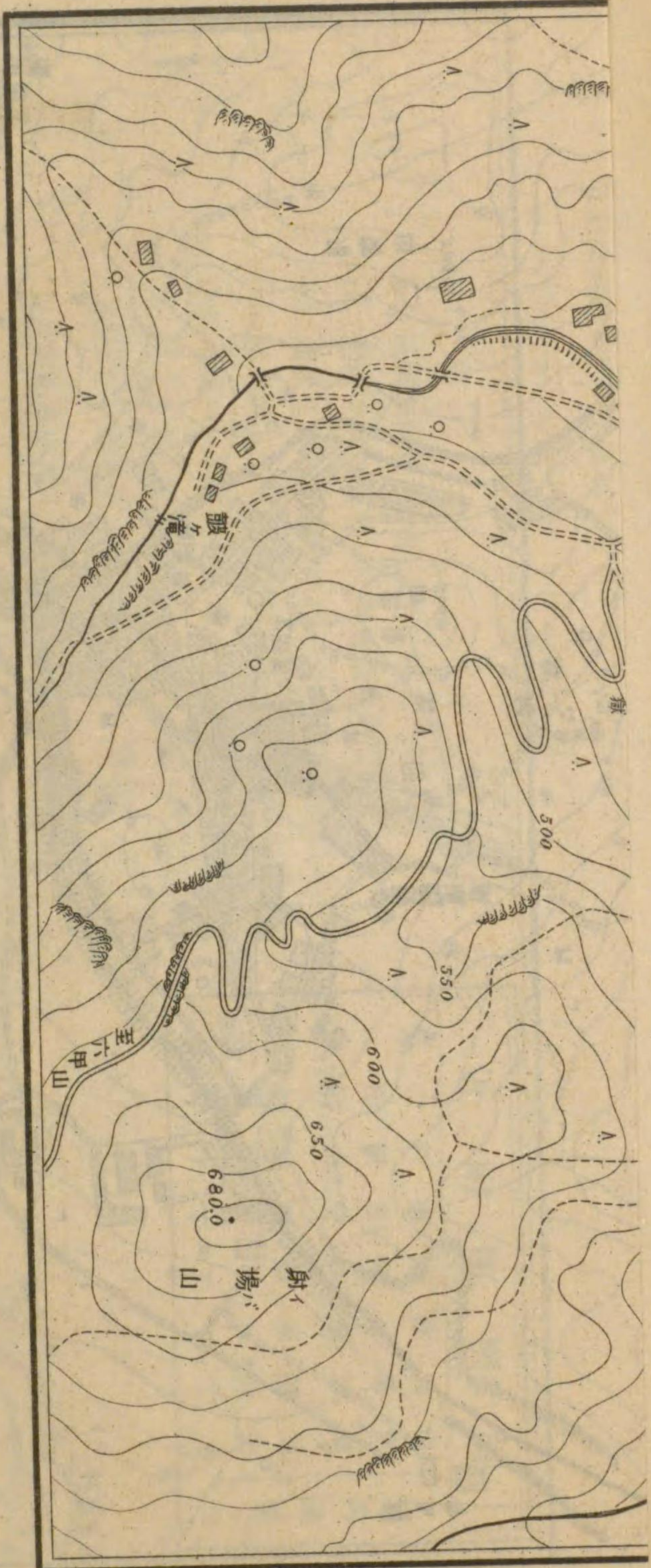
福知山線池田驛は花屋敷停留場を下る百米の所にある。

雲雀ヶ丘は寶塚線の沿線隨一の高級住宅地で、北に山を負ひ、南に大阪平野を見晴し、見るからに氣持がよい。上水道は勿論、絶対に烟を絶つ目的で瓦斯の設備もある。

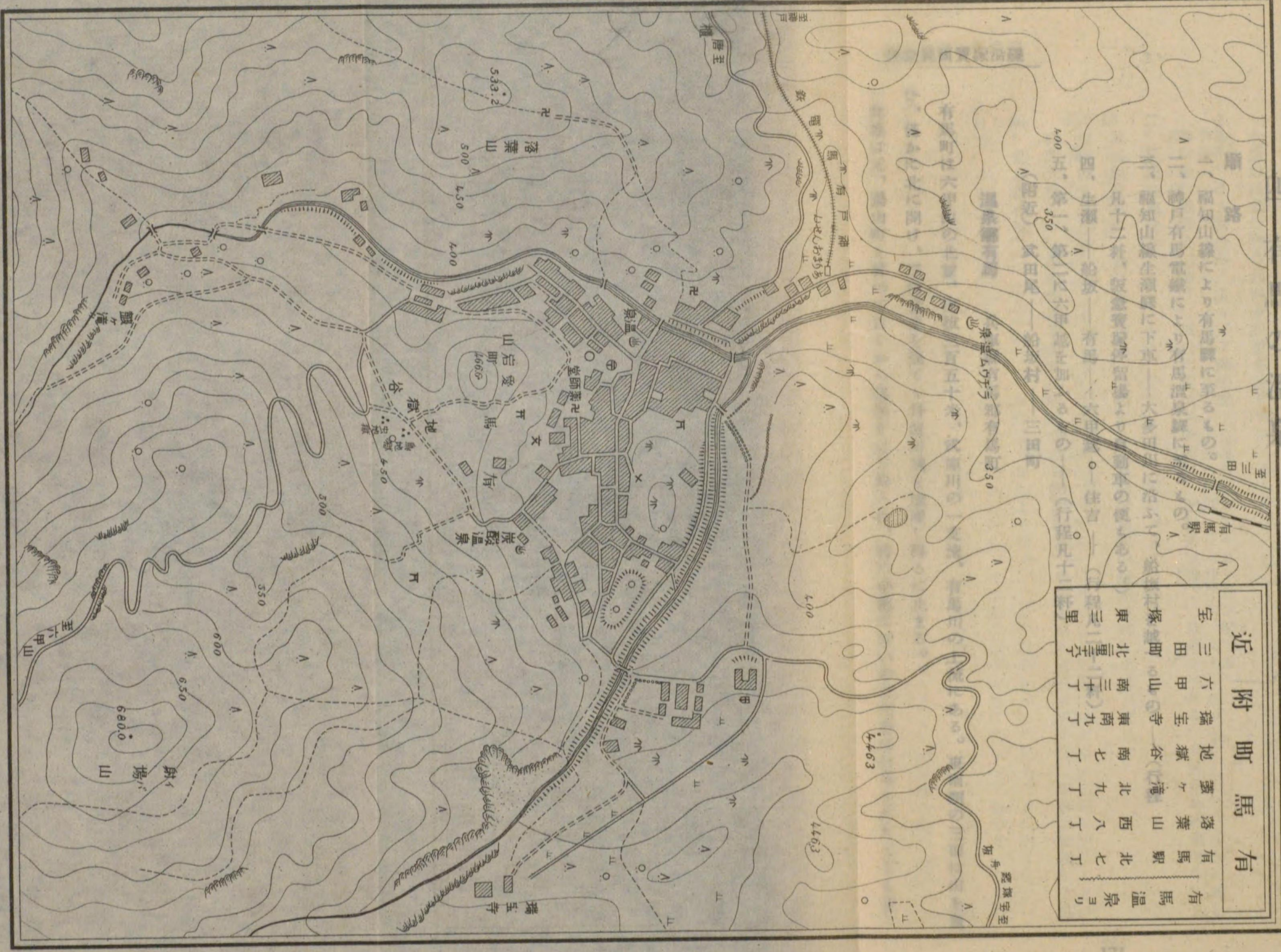
三、牡丹の名所、山本

川邊郡長尾村山本、山本停留場附近

山本は牡丹の名所で、又諸種の苗木を初め庭園用、觀賞植物の栽培は年と共に盛になり、其販路も内地は元より、遠く歐米へも廣がつてをる。長尾全村八一〇戸の内凡六割は此業に従ひ、宇山本の如きは



全図は縮尺1/25,000の地形図である。



有馬町附近	
有馬温泉ヨリ	有馬温泉ヨリ
有馬駅北七丁	有馬駅北七丁
落葉山西八丁	落葉山西八丁
藪ヶ滝北九丁	藪ヶ滝北九丁
地獄谷南七丁	地獄谷南七丁
瑞玉寺東南九丁	瑞玉寺東南九丁
六甲山南三十丁	六甲山南三十丁
三田町北重三ヶ	三田町北重三ヶ
宝塚東三里	宝塚東三里

この図は、明治二十六年の地形図に基き、宇山本の如きは

有馬町は六甲山の北麓、海拔三百五十米、武庫川の支流、有馬川の上流にある。東南西の三面は山を負ひ、僅かに北に開け、三田盆地を隔て、丹波山塊を遠望し得るに止まる。此地は元、湯山町と言つて古くから温泉を以て知られ、特に帝都に近いので天皇の行幸されたことも多く

全部落純農を見ざる盛況である。

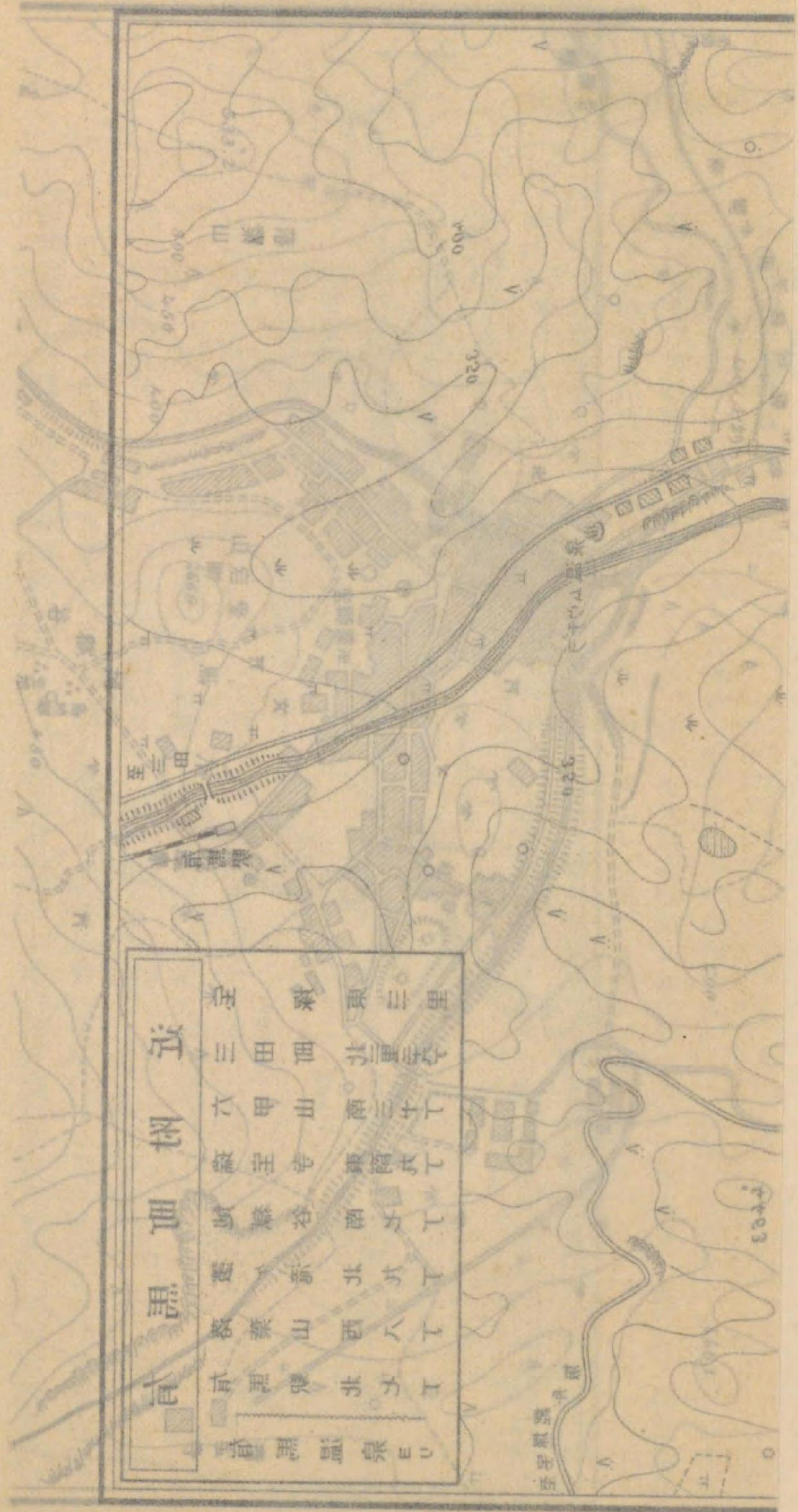
四、有馬の温泉

順路

- 一、福知山線により有馬驛に至るもの。
 - 二、神戸有馬電鐵により有馬温泉驛に至るもの。
 - 三、福知山線生瀬驛に下車——大多田川に沿ふて、船坂村を越へるもの——(行程凡十二軒、阪急寶塚停留場より自動車の便もある。)
 - 四、生瀬——船坂——有馬——六甲越——住吉——(行程凡二十二軒)
 - 五、第一、第二に六甲越を加ふるもの——(行程凡十二軒)
- (附近) 武田尾——船坂村——三田町

温泉郷有馬

兵庫縣有馬郡有馬町



温泉郷として其名天下に顯れてゐた。近時炭酸温泉・ラヂウム温泉等の施設も備はり、且省線有馬線・神戸有馬電鐵線も開通し、加ふるに山河の眺望も勝れてをるため、浴客は四時絶えない。近年登山熱の勃興につれて六甲の險を攀ちて此所に遊ぶ者も少くない。

人口二、一五七人（昭和五年十月現在）

一、温泉の由來

舒明天皇三年、幸攝津國有間湯、十年幸有間湯宮。孝德天皇大化三年冬十月、幸有間湯、左右大臣群卿大夫從焉。十二月天皇還_レ自湯宮（書記）

其後盛衰常なく僧行基の再興、仁西上人の再修等數度の變遷を経て今日に及んだ。

二、温泉の成分

本温泉は鹽類泉に屬し、無色で僅かに濁濁し、味は甚だ鹹_カく、且鐵味がある、其反應は弱酸性で、之を煮沸すると褐色物（主として酸化鐵）を析出してアルカリ性に變ずる。

水溫は攝氏六度の時四十九度を示す。

三、六甲越有馬廻遊

有馬遊覽の最も興味あるものは六甲越有馬廻遊である。今其行程を記すと、

福知山線生瀨驛下車

生瀨より有馬まで……十一粒。徒歩（上り三時間、下り二時間）_{オホタ}大田川の谷に沿ふて登ること三粒で七曲り坂下の茶店につく。此所から南を仰ぐと稜々たる山骨、其奇名狀すべからざるものがある。

有馬より六甲山頂迄……三粒。徒歩（上り一時間、下り四十分）頂上に近く茶店がある。清水に咽を濕し食事を取るも自由である。

六甲山頂より住吉迄……八粒。徒歩（上り三時間、下り二時間）

四、有馬名勝

落葉山（温泉の西一粒） 町の西に聳え、天文年中三好宗三が此處に城を築いたので城山ともいふ。山上に妙見堂がある。眺望が極めてよい。

鼓ヶ瀧（温泉の北凡一粒） 水源は六甲山より出で、二層の懸泉をなしてをる。下は高さ凡十一米。幅三米、上は突出した巖石を擁して左右からおち、古は瀑の響が山谷にこたへて鼓の音に似て居つたために此名があつたが、寛文の洪水に山は崩れ、石も落ち姿もかはり、音も失つたと傳へられてゐる。樹石の布置頗る幽致、有馬温泉第一の景勝である。

地獄谷 温泉の南方にある。所々に炭酸瓦斯や炭酸水が湧出してをつて鳥地獄・虫地獄・血の池等と稱へられてをる、虫類や、鳥類が近づくと忽ち死ぬることだ。

薬師堂 (温泉の南東百米) 昔は温泉寺といひ、本尊は薬師如来で行基大徳の創建と傳へられてをる。

建久二年大和國吉野の僧仁西上人が中興し、衆徒十二坊を置いて一山の事に當らしめた。天正・文祿の頃豊公夫妻が入浴の折改修されたが、其後荒廢して今は只薬師堂のみを存し清凉院と言つてをる。

薬師堂の由來

舊記に曰く

行基法師昆陽寺より有馬山に來る。一人の病人山中に臥すを見る。問ふて曰く汝何の病にて此の如く苦びか、答て曰く湯に赴き疾を癒さんとするに、力疲れつ進むこと能はず且已に數日絶食せりと。行基之を哀れみ飲食を與ふ。病者魚無しとて喜ばざりしかば行基乃ち長洲濱に至り魚を得て歸る、病者曰く上人先づ試みに之を食せよと。行基原ち食するに味甚だ美なり。於是之を勸む。病者臥しながら之を食ひ且つ曰く我に黒瘍あり。上人若し瘡瘍を舐めんには痛み少しく忍ぶべしと。行基忍びて之を舐む。忽ち病人の形變じて金身となる。即ち薬師堂の貌なり。行基大いに驚きて之を拜するに佛の曰く、我は有馬温泉なり、上人を試みんが爲に病軀を現せりと。言已みて見えず。行基感歎止まず。等身の薬師佛石像を刻み泉の湧出する處に置き一字を建てたり。之今の薬子堂なり。其の殘魚を以て昆陽池に放つに化して一目金魚となると云ふ云々。

五、有馬の旅館

當地の旅館は仁西上人が温泉再修の時に、薬師佛十二神にかたどり十二坊舎を作つたのに始る。池の坊・北の坊・角の坊等の名稱のあるのは此坊舎の今に傳はるものである。

附 近

一、武田尾温泉

(有馬郡名鹽村、武田尾驛の西凡そ一軒)

武庫川の清流が前を流れ、巨岩溪に迫るところの僅かな山麓を拓いて、數軒の旅舎が點在するのが武田尾の現状である。幽閑、景勝、四時の保養に適するが、殊に杜鵑ホトトギスの聲が清流の河鹿と相和する夏の夕肌に迫る涼味には仙境の感がある。

温泉は寛永十八年(約二百九十年前)武田尾直澄の末孫、直藏が神猿の指導に依つて發見したものと傳へられて居る。

本鑛泉は無色透明で、硫化水素臭を帶び、味微鹹、弱アルカリ性反應を呈し、比重攝氏十五度に於て一・〇〇五、皮膚病に最も効顯著なりとのことである。

二、船坂村

(兵庫縣有馬郡山口村の内船坂村、生瀬驛から凡六軒)

生瀬驛から太多田川の溪谷に沿ふて七曲りの坂を登りつめると船坂村に着く。海拔四百米、氣温も亦他と異なるので一般平地に見られない寒天及凍豆腐製造といふやうな特殊産業が發達して居る。

三、三田町 (兵庫縣有馬郡三田町)

古來播丹街道の樞要地で、人馬の交通、貨物の集散共に頻繁であつたが、近年鐵道開通と共に昔の繁華は見られなくなつた。有馬郡の中央に位し、山中の小都會で、農學校・中學校等がある。良質を以て誇る三田米は此所に集散する。名産三田焼は三田町の東につゞく三輪村から出る。其昔支那青滋と品質を競う程であつたが(一旦長崎へ行つて支那物として賣弘められた時代もあつた)今は只昔の面影を止むるに過ぎない。

人口四、八七七人(昭和五年十月現在)

五、天橋立と大江山

行程

大阪を朝の六時に立つ網野行の列車に乗ると、乗換なしに零時半天の橋立につく。こゝで五時間の遊覽をおへて五時半の列車にのるとく又乗換なしに午後十一時半大阪に歸れる。もし一泊すれば傳説の大江山にも樂に登る事が出来る。

順路

一、天の橋立驛——切戸の文珠——橋立——籠神社——傘松——成相寺——か

奥丹後第一の名邑

——二度と行くまい丹後の宮津 縞の財布がからになる。(俗諺)——

背後に大江山・由良岳(丹後富士)の連峰を負ひ、前には宮津灣をひかへた開港場で、港内廣く、よく各方

面の風波を避け船舶の碇泊に便がよい。昔から城下町として盛へ、奥丹後第一の名邑である。

海によつて立つた二層、三層の旅舎を夜間海上から望むと星をまいた様な燈火は龍宮の燈明かと思はれて美しい。天の橋立を龍宮へのかげ橋とすれば龍宮城にも似つかはしい宮津の町、天橋遊覽の客が一夜の旅情

- ら逆路をとつて——天の橋立驛(徒歩行程凡十籽)途中籠神社から傘松迄ケーブルもあり、又歸路は籠神社下から文珠迄モーターボートに乗るのも面白い。これを片道だけ利用すれば徒歩行程凡六籽半になる。
- 二、天の橋立驛から二ツ目の丹後山田驛から私設線で加悦の町へ——鬼穴——鬼嶽稻荷——元伊勢——河守——福知山——(徒歩行程加悦・河守間凡二十五籽鬼嶽稻荷を除くと十八籽。尙元伊勢・河守間凡三籽には自動車がある。)
- 三、福知山——河守——元伊勢——鬼穴——鬼嶽稻荷——元伊勢——河守——福知山——(徒歩行程凡三十二籽。鬼嶽を除くと廿六籽。)

宮津町 京都府與謝郡宮津町

を慰めるにはふさはしい町である。

有名な俳聖、晝家谷口蕪村は此處に住んで居て與謝野蕪村と號した。

天の橋立 京都府與謝郡府中村江尻（橋立驛の北凡そ五百米）

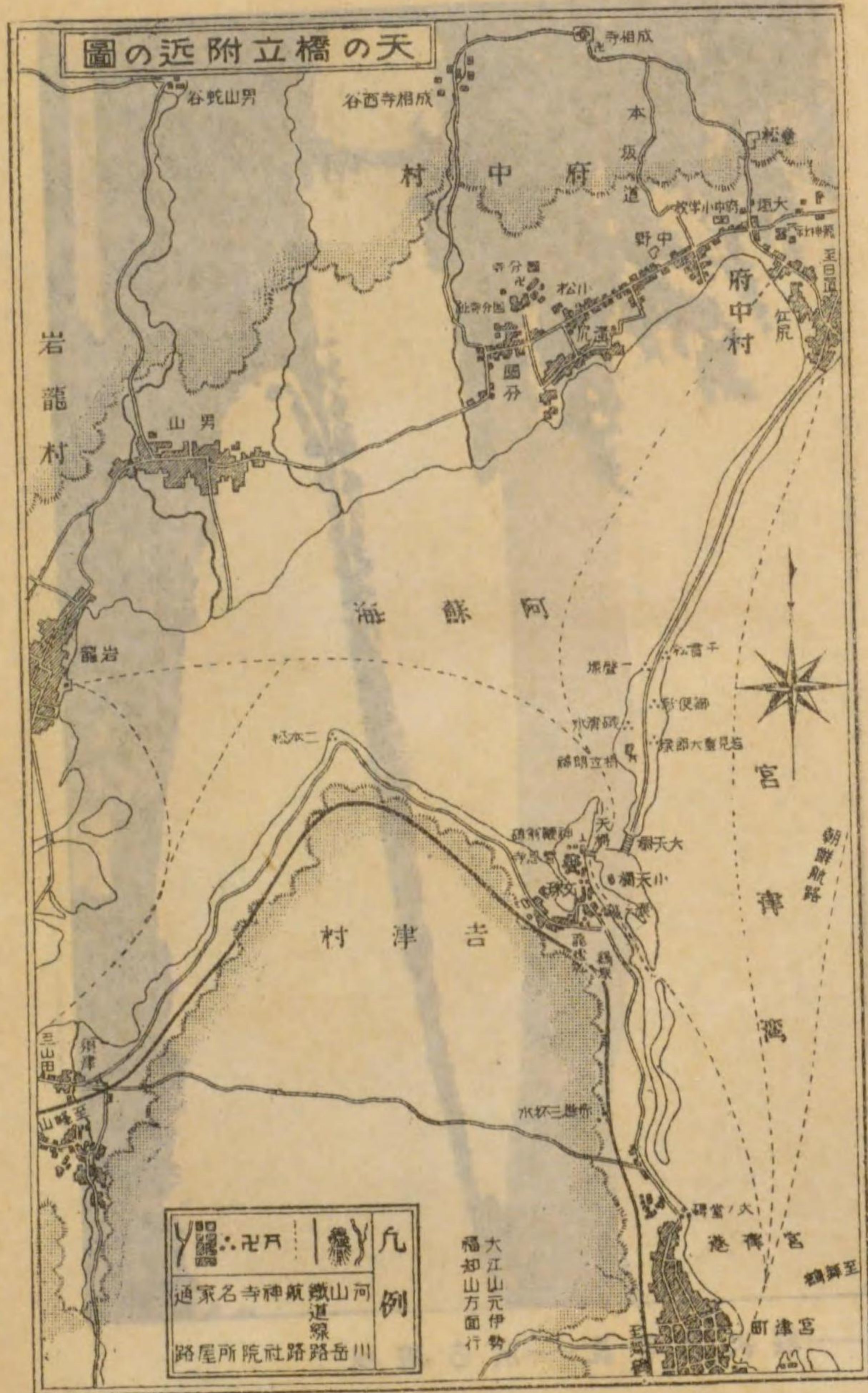
天の浮橋

松島・嚴島と共に我國の三景に數へられる天の橋立。府中村江尻からほぼ南西に向つて突出する沙嘴、長さ凡二千四百米、幅は廣いところで百米、狭いところは五十米にも足らない。與謝の海の中部に横はつてこの海を内海の岩瀧湊（阿蘇の海ともいふ）と、外海の宮津灣とに分け、文珠の切戸の五十米ばかりの狭い水道をへだて、文珠の久志濱に對してをる。

洗ひ上げた様な白砂の上の美しい松木立が紺碧の海に浮ぶ姿は、空にかけた浮橋かとも思はせる感があるので天の橋立の名を得た。

月と雪の天橋

さすがは昔からたゞへられた日本三景の天の橋立。四時のながめ、何時とえらぶまでもないが、とりわけ美しいのは月と雪の景色だといはれてをる。



橋立や 松に魚のせて月遊ぶ 三千風

鏡の様な海に船を浮べて月のすむ水を渡れば全く天河を渡る心地がする。

はしだてや 降るは泡雪、茶煎松 澤庵和尚
けれども此雪景色は容易に見られぬ。雪の北國にも海中のこの橋上に雪のつむことは少い。積つても早朝

風の出ぬまに見ねばすぐに消えるうらみがある。

傘松の股のぞき

天橋はこれを通り過ぎて静かな景色を味はうのと、高所に登つて見おろすのと二つの親しみがある。籠神コモリ社に参拜して背後の丘を登ること凡そ一軒で傘松に達する。こゝは成相山の傾斜にある鞍部で、松を浮べた長橋が縦一文字に文珠に連るのが見え、天橋を見下すには第一の場所だ。殊に裾をかゝげて股の下から覗く。一分。二分。海は空に見え、空は海と覚え、空に一條の長橋のかかるところ、天にも登らん心地がする。これがいゆる傘松の股のぞき、誰でも一度はやつて其妙味を味はうとよからう。

岩瀧から峯山へ通ずる樗峠ツチトウケに登つて横一文字の天橋を見るのも、又すて難いものに数へられてをる。

標式的沙嘴

天の橋立の成因に気づかなかつた古人はこれを諾冊二神が立たせ給うた天の浮橋の落ちてこゝに立つ

たものであると信じた。又上田秋成——大阪の人で徳川末頃の怪異小説の大家——の如きはこれを以て人工の作であると断定してをる。

併しこれを精細に観察すると田子浦（靜岡縣）和歌の浦（和歌山縣）夜見の濱（鳥取縣）海の中道（福岡縣）などと同じ成因によつて出来たものであることに気がつく。若狭灣一帯が陥没によつて出来たものだといふことは海岸の形状から断定できる。其西方の斷層面は一直線に北東から南西に走りそのつくとくるところに阿蘇海が灣入してをる。この斷層海岸に沿うて北東から南西の方向に流れて來る海流は、この突然の灣入に出あつてその方向を變ずることが出来ないでそのまま灣口を南西に流れ、然も容易に流勢を灣内に分つので、ここに運搬力を弱めて砂礫の推積を生じたものがこの天の橋立で、標式的沙嘴として橋立式とさへ呼ばれてをる。

橋立名所

橋立明神 文珠の切戸から小天橋・大天橋の二の橋を渡ると、そこははや天の橋立。二三百米進んだあたりに橋立明神の小さな祠がある。こゝは橋立でも一番幅の廣いところで老松が枝を交へたこのあたりを濃松といつてをる。

磯清水 橋立明神のかたはらの西側にある小井戸は海水に接近してをるのに、ちつとも鹽氣を含まない全くの眞水なので、磯清水といつて名高い。

一聲塚 「ひと聲の江に横たふや、ほととぎす」…俳聖芭蕉がかつてこゝに遊んで口ずさんだ句をほ

りつけた小さな塚がある。

千貫松 數ある老松の中でも最も古くて大きい一株を千貫松と呼んでをる。

天橋山智恩寺

與謝郡宮津町文珠

宗派、臨濟宗妙心寺派——本尊、文珠菩薩——

切戸の文珠

創建の年代は明かでない。寛永年中僧別源が重興した。天橋立の南方の岸頭に立ち、遙かに成相寺に對して畫中の景物を添へてをる。

境内には本堂・多寶塔・無相堂（地藏尊を安置）等がある。殊に多寶塔は明應九年（凡四百三十年前）府中城主の寄進に係り、室町代建築の好標本として、北丹唯一の特別保護建造物である。

籠神

與謝郡府中村大字大垣

社格、國幣中社——祭神、天水分神——

丹後一の宮

社は後に成相山を負ひ、前に天の橋立をのぞむ形勝の地にある。延喜式に名神大社に列し、後本國の一の

宮と稱へられた。明治維新の際に各國の一の宮を國幣社に列せられた時當社も國幣中社に列せられた。四月廿四日の例祭には近郷のものが大刀振を行ふ勇壯な神事がある。

成相寺 與謝郡府中村

宗派、眞言宗——本尊、聖觀世音菩薩——

西國廿八番の札所

なみのおと松のひゞきも成相の 風吹き渡す天の橋立

籠神社の裏から傘松まで凡壹軒、そこから又一軒半のだら／＼坂を上ると世谷山上、與謝の江山を一眸にあつめる景勝の成相寺につく。

寺傳に慶雲年中（凡千二百年前）應眞上人の開基としてをる。其後山崩れや兵火等にかゝり再興せられたが舊觀に至らなかつた。昭和二年夏又火を發して寺坊殆んど焼失したが、幸ひにも觀音堂は其厄をまぬがれた。西國廿八番の札所で、天橋に遊ぶ客は又多く此寺を訪れる。

福知山

丹波の京

由良川の上流音無瀬川の左岸の沖積平野にある丹波の一都會で、俗に丹波の京といふてをる。舞鶴・橋立に近接し、山陰本線及福知山線の連絡地として山陰の要領である。

大阪へ一一六軒、京都へは九〇・一軒、河口の由良港へ舟運の便もあつて、生糸・米穀等を集散し、近時にはかに商工業が發達した。

驛の東約五百米に朽木氏の居城であつた福知山城址がある。夏期廣小路に張る「あんまの夜店」は福知山情調として珍しいものに數へられてをる。

河守太神宮 京都府加佐郡河守上村

元伊勢

北丹鐵道の終點、河守驛から北へ凡そ一軒、大字天田内に外宮があり、そこから凡二軒、大字内宮に内宮があり、これを元伊勢と呼んでをる。古文書に何のよるところもないのはつきりとは言へないが、宮殿のさまや、附近の地名などから見て、或は昔皇太神宮のあつたところではあるまいか。

こゝは宮津へ通ずる街道のほとりで、河守驛から内宮迄は自動車の便がある。内宮から大江山鬼穴まで凡そ十軒ばかりある。

大江山

傳説、酒吞童子

大江山は大體三つの峯に分れてゐる。北から鬼穴・鍋塚・千丈ヶ岳。最高峯は千丈ヶ岳で八三三米。その東側の傾斜地千丈ヶ原に鬼岳（御嶽）稻荷がある。

鬼穴は一面にすゞき・小笹の茂つてのつべりとした山の南側にある。岩屋だから峨々として聳ゆるところだらうといふ豫想は裏切られるが、穴の深いには驚かされる。五十米位より奥へは這入つたものもないとのこと。しかし穴は存外小さく二人と並んでははいれない。少し行くと疊三枚じきほどのところがあつて、ここが一番廣い。これではとても頼光はじめ多くの鬼どものたち廻りも六ヶしかつたらうと思はれる。

登り道

山は東からと西からとの登り道がある。天橋から行けば二つ次の丹後山田驛で私設線の加悦鐵道にのりかへ加悦の町で一泊して西から鬼穴・鬼岳稻荷・元伊勢と東へ下つて福知山へ出るのが最も都合がよい大阪からならば福知山から北丹鐵道で河守迄行く。こゝから元伊勢まで自動車の便もある。

京都の大枝山

京都から龜岡へ通ずるところに老阪峠がある。古くは大枝山ともき書、又老山ともいつて關所を置か

れたこともあり、多く和歌にもよまれた。

大江山生野の道の遠ければ　　まだふみも見ず天の橋立

小式部内侍（金葉集）

丹波道の大江の山のさねかづら　　たえん心をわれ思はなくに　　萬葉集

この山は平安朝の衰へたころ一時山賊の巢窟になつたことがある。源頼光と酒吞童子の御伽噺は頼光

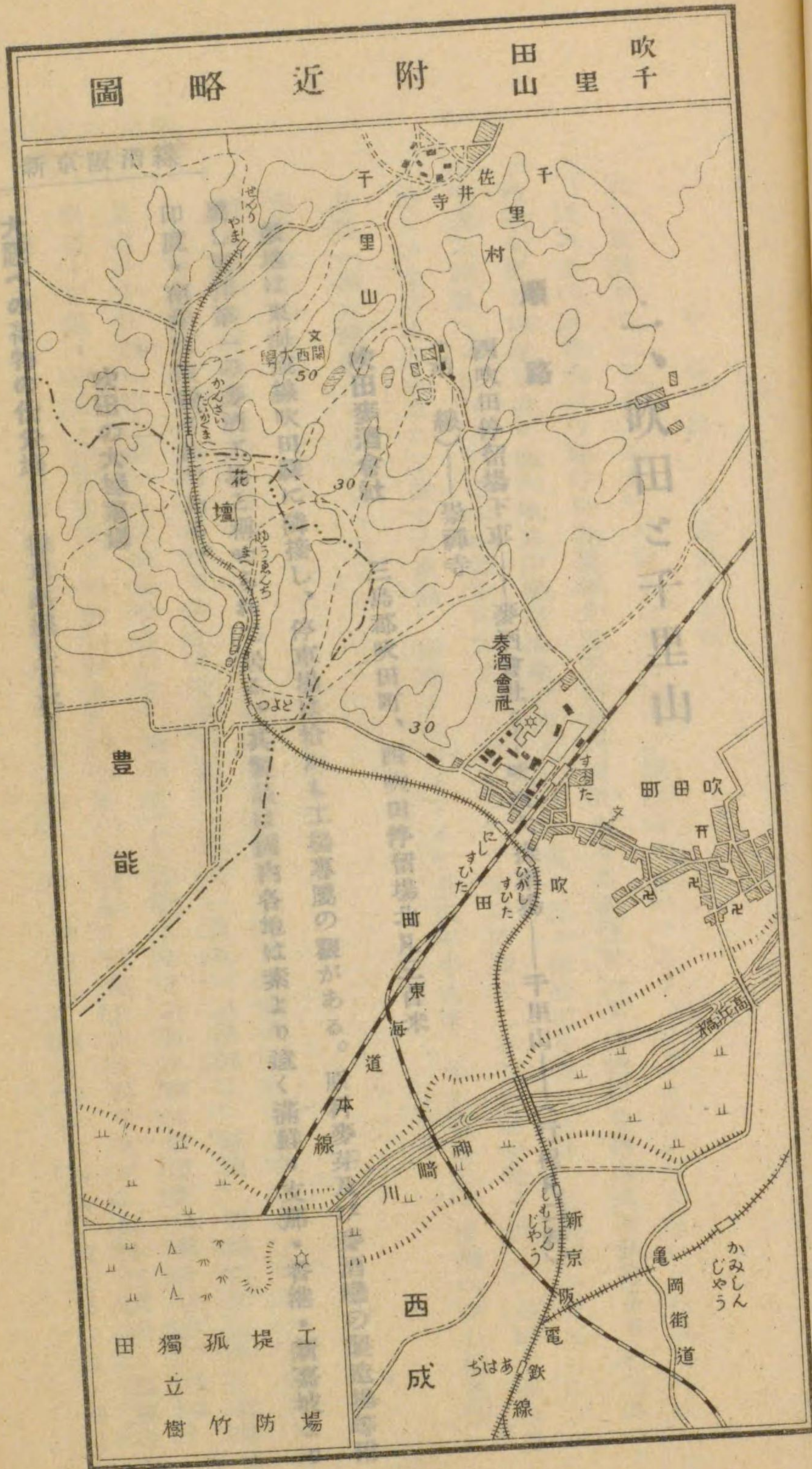
が鬼童丸を亡ぼした談と、此地方の山賊とを附會して作つたものであらう。

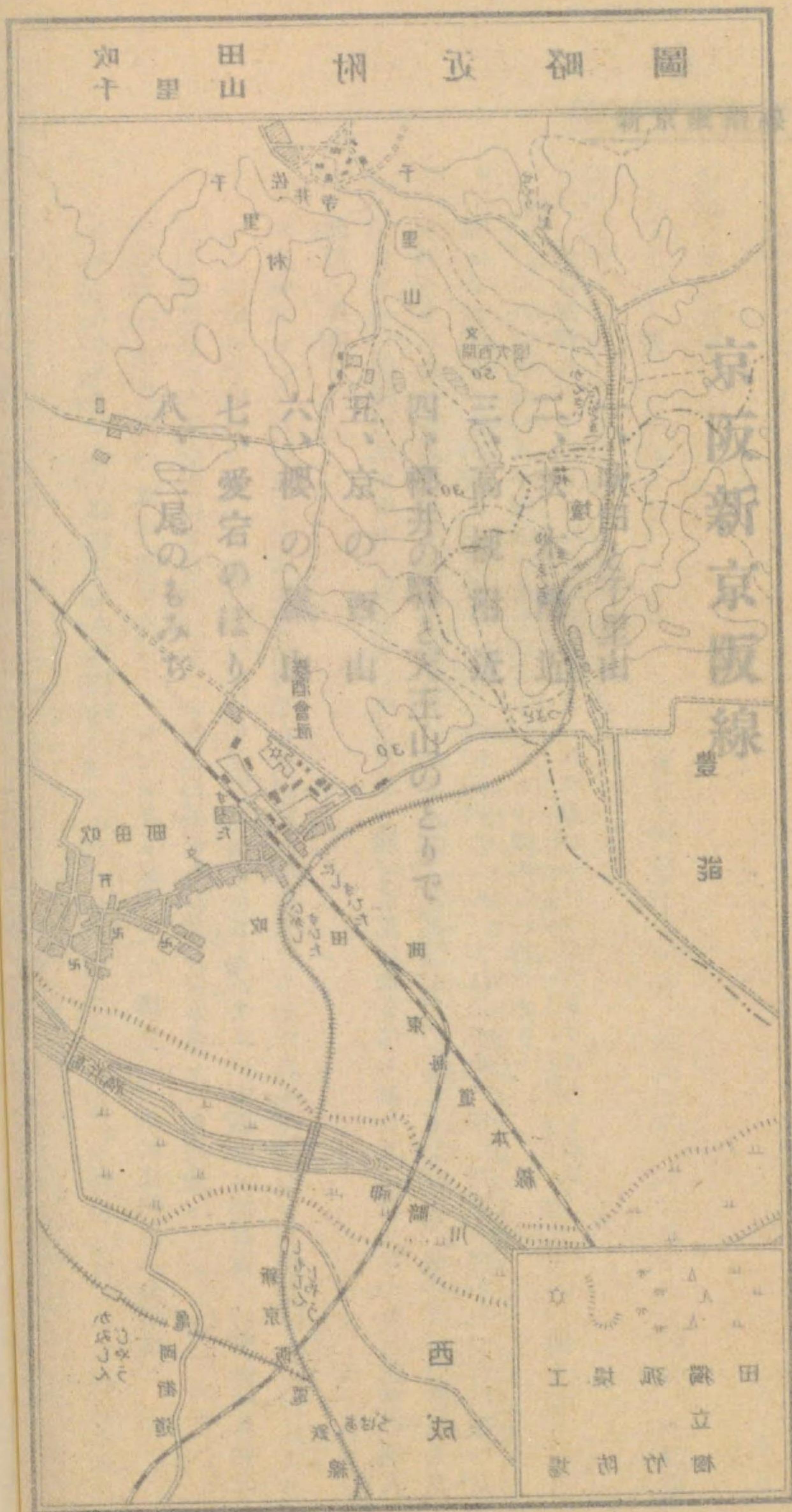
赤鬼・青鬼

昔ロシアの漂流民が與謝の海についた。言葉も通せず遂には食にも窮して盜賊となつた。越後の浪人が其手下になつて盛んに良民を苦しめた。毛髮・顔面の赤味のあるロシア人を赤鬼、其手下の日本人を青鬼といつて恐れたのだと。火のないところに烟はたゝぬ。大江山に鬼の住んだ話も何かあつたに違ひない。これは土地の人が傳説の鬼を現實のしかも合理化した話である。或は源頼光が退治した袴垂保輔の話に結びつける見方をする人もある。

京阪新京阪線

- 一、吹田と千里山
- 二、茨木附近
- 三、高槻附近
- 四、櫻井の驛と天王山のとりで
- 五、京の西山
- 六、櫻の嵐山
- 七、愛宕のぼり
- 八、三尾のもみぢ





一、吹田と千里山

順路

西吹田停留場下車——麥酒會社——吹田大操車場——千里山——(行程凡二軒)
 (沿線)——崇禪寺

吹田麥酒會社

三島郡吹田町、西吹田停留場北凡三百米

敷地は東海道線吹田驛に隣接し、停車場は恰かも工場專屬の觀がある。原料麥芽及び麥酒壘の製造場等附屬し東洋第一の麥酒工場と稱せられて居る。其製品は國內各地は素より遠く滿鮮・支那・香港・新嘉坡より印度・南洋に販賣されてゐる。

吹田の大操車場

大阪への荷物の仕分場——操車路線凡百軒——

新京阪沿線

關西唯一といはれる吹田の大操車場は大正八年起工、十二年竣工、總工費六百萬圓、延長凡四軒で吹田・岸部・千里・味舌・三宅の五ヶ町村に亘り、幅は平均三百米、面積凡八十萬平方米（二十三萬坪）路線の延長凡九十六軒（六十哩）の大規模なもので、田端・品川・稻澤とも日本四大操車場に數へられてをる。この大操車場は大阪驛に集散する上り下りの混合荷物を一旦こゝに格納し、線別、驛順に仕分け、混雜を防ぎ能率を高める目的で作られたもので、場内には機關車庫・荷物積換場・二大給水場・水槽・自動給炭場驛員詰所等がある。

日本一の大車庫

このうち機關車庫は工費廿六萬圓、鐵筋コンクリートで凡四千平方米（千三百餘坪）全體の形は扇形で、中央に轉臺車を設け、それから放射式になつてゐる。三十米の大烟突二本で内部の烟を出し、約四十臺の機關車を樂に收容される日本最大の機關車庫である。

因にこの建物全部の鐵筋は古軌條を以て鐵骨に利用されたもので、若し鐵材を購入して建てるると少くとも五十萬圓はかゝるとのこと。

千里山 三島郡千里村

吹田町の西北丘陵地に拓かれた住宅地及遊園地を總稱せるものである、丘陵を階段狀に拓いて建設した住宅は見るからに氣持がよい。土地高燥で排水の便よく、近くに大阪を控へてゐる郊外居住地として、交通の便と相待つて將來有望の地である。前方の花樹園内には花壇を作り運動場を設くる等一大遊園地となつた。展望殊に宜しく桃花の候は遊客特に多い。

沿線

崇禪寺 東淀川區中島町字山口

宗派、曹洞宗——本尊、釋迦牟尼佛——

嘉吉元年播磨國主赤松滿祐事を以て將軍義教を弑し首を携へ西走の途次ここに埋葬して走りしより、足利義勝管領細川持賢に命じて義教菩提のためにこの寺を建立せしめたものである。寺は後世衰頹したが、門前松林の馬場は大和郡山の藩士遠城治左衛門兄弟が、其の一弟を殺せる仇敵生田傳八郎を要撃して果さず、却つて返り討ちに會ひたる慘劇の地として世人に知られてゐる。寺には鎖帷子其他兄弟の武器がのこされてあり、境内に其の墳墓及び足利義教の墓ならびに木像がある。

崇禪寺馬場敵討

大和國郡山城主本田氏の家士に遠城宗左衛門といふ者があつた。同藩の士生田傳八郎と劍術の功を争ふて傳八郎に勝つた。傳八郎は意恨を含んで、宗左衛門を殺して大阪に走つた。時に宗左衛門十七歳、其母悲歎に堪えず。二兄遠城治左衛門・安藤喜八郎をしてこれが復讐をはからしめた。二人は大阪に來つて尋ねること數日にして傳八郎に遇ふた。日を期して崇禪寺馬場の松林にて闘はんことを約した。兩士之を諾して先着してこれを待つた。傳八郎は卑怯にも外くの悪徒を語らつて樹陰枝上に潜ましめて助勢せしめた。兄弟秘術を盡して戦つたが遂に返討ちにあつて死んだ。時に正徳五年十一月四日で治左衛門二十八歳、喜八郎二十四歳、村人これを悼み、爲めに一基の塔を建て、其勇魂を弔つた。

二、茨木附近

順路

富田町停車場——繼體天皇陵——總持寺——茨木町——茨木町停車場——或はこの逆——(行程約五・五軒)

茨木町

三島郡中部の中心

町は三島郡中部の中心地で、中學校・女學校等がある。織田信長は永祿十一年攝津を從へて茨木の地を中川清秀に與へた。慶長の頃豊臣秀吉は茨木貳萬五千石を片桐且元に與へた。城は今の茨木町字城の町・殿町一體の地で今の尋常小學校は其中心に當るとのこと。舊城門は茨木神社の東門として残つてをる。

因に大阪冬の役に且元は大阪を退いてこゝに歸り、更に家康に見えて大阪攻に従ひ、秀頼滅亡後二十日ばかりほどへて惱み死に死んだ。

總持寺

三島郡三島村字總持寺、藍野陵から約二軒、新京阪茨木町驛へ約一・五軒——宗派、眞言宗高野派——本尊、十一面千手觀音——

西國二十二番の札所

おしなべて高きいやしき總持寺の 佛のちかひたのまぬはなし

寺は仁和二年山蔭中納言藤原政朝の開基で、寛平二年(凡千四十年前)の創建と傳へてゐる。元龜年間以

後度々兵火、震災等に遇つて荒れ果てた。慶長八年（凡三百三十年前）豊臣秀頼が片桐且元を奉行に任じて再興せしめたものが今の堂宇である。

當山の縁起には承和年中（約千百年前）山蔭中納言の父高房が太宰大貳ダイニとなつて筑紫に行く途中、龜の殺されやうとするのを見て、錢を與へて放してやつた。ところが其翌朝誤つて幼児が海に落ちた折、龜が其子を背にのせて浮び上つた。高房は之を觀音の力と信じ寺を興さんと思つたが果さずして死んだので子政朝が父の志をついで建てたのが此の寺だといふ浦島物語を似た傳説が残つてゐる。

境内は高燥で、麓から數十の石段を登つて行く。登りつめると樓門があり、其正面に本堂がある。本堂の左側に開山堂がある。北方二百米ばかりの奥の院には藤原山蔭の墓があり、東に並んだ其室及女の墓を姫塚といひ、俗に女郎山とよんでゐる。

繼體天皇（第二十六代）三島藍野陵 三島郡三島村大字太田、新京阪茨木町驛北東約二軒

陵は南面に四段に築いた前方後圓の塚で、前後の徑百三十二間、後圓の徑七十六間、前方の幅七十八間、後圓の高さ五十五尺、前方の高さ五十尺、周圍には深い濠ホリがあり、陪塚も三個ある。

天皇は應仁天皇の五世の孫、武烈天皇崩じて嗣がなかつたので、群臣議して天皇を越前から御迎へして、

御位につかれた。御在位二十五年、八十二歳を以て御崩御になつた。

因にこゝから東凡千五百米に金城塚とよぶ前方後圓の塚がある。この塚を繼體天皇の御陵ではなからうといふ説もあるが確でない。

三、高槻附近

順路

一、新京阪高槻町驛——神峯山寺——能因法師の墓——天神馬場——新京阪高槻町驛

——（行程凡十四軒）

二、新京阪高槻町驛——攝津耶馬溪——神峯山寺——新京阪高槻町驛——（行程凡十七軒）

高槻町

永井氏の城下町

城址は停留場南東方一帯の地、今の工兵隊の附近がそれで、尙石垣も所々にあり塚の跡も見られる。戦國時代には高山友祥がゐた。

高山友祥は右近將監と稱しキリスト教の信者として名高い。近年高槻の北西方の山奥、清溪村キョウジの農家から假名書の聖書が出たり、十字架の耶蘇・マリヤの像などが發見されたのも全くこの時代のものらしい。豊臣

秀吉のキリスト教禁止後も友祥は改宗しなかつたのでマニラに追放されてまもなく彼の地で死んだ。其後數代の城主を代へて慶安二年(凡二百八十年前)永井日向守直清こゝに入り、世襲して明治に至つた。鐵道は町の北西を過ぎ、今又新京阪電鐵が開通して交通運輸の上に一層の利を加へた。

天神の馬場

新京阪高槻町驛の北へ凡一軒のところ野身神社がある。一に上宮天神といひ延喜式内の舊社で野見宿禰菅原道眞及武日照命を祀つてゐる。京街道から北へ石の大鳥居をくゞつて石段數百米を上ると社前に入る。極めて見晴がよい。

社前の大路を天神の馬場といふ。天正十年六月の山崎合戦の折に備中の高松城から馳せつけた豊臣秀吉は十二日この天神の馬場に陣し、翌十三日未明にこゝを立つて山崎に向つた。

能因法師の墓

三島郡高槻町大字古曾部、新京阪高槻町驛北凡そ千八百米

平安時代の和歌の名人

高さ三米許りの封土の上にもちの老木と數株の檜がある。平安時代の和歌の名人能因法師の墓で前面樹下に一碑あり、高さ凡一米半。慶安三年(凡二百八十年前)高槻城主永井直清の建立、碑銘は時の碩學林羅山が書いたものである。法師は晩年こゝに住んだので古曾部入道といはれ、遂にこの地に卒つた。

墓の北五十米ばかり田のふちに、八重櫻があつて能因櫻といはれてゐる。法師は朝夕これを賞して飯るのも忘れてゐたと。今文塚と記した小石碑にならぶ若木はその何代目かであらう。

津の國古曾部と云ふ所にてよめる。

我が宿の梢の夏になるときは 生駒の山は見えずなりける 能因法師(後拾遺)

都をば霞とよもに出でしかど 秋風ぞ吹く白川の關 同

能因は奥羽へ行かないで、この歌を作つて勅答したと傳へられる。

攝津耶馬溪

高槻町驛から北へ凡そ四軒

高槻町字塚脇の部落から北西へ折れて一軒ばかりに芥川の細流がある。

攝丹の境、龍王山に源を發する芥川が固い古生層に出あつて作つた一小溪に過ぎないが、雄瀧・白瀧・雌瀧逆川の瀧などの小飛瀑があり、きつたつた烏帽子岩、平らかな八疊岩などあり、いはゆる攝津耶馬溪で其間凡そ二軒、細道傳ひの散策は大阪から手頃なところとして訪れるものも少くない。

神峯山寺

三島郡高槻町大字原、新京阪高槻町驛北凡そ七軒

——宗派、天台宗——本尊、毘沙門天——

神峯山寺は役小角の草創と傳へられ、その自作といはれる毘沙門天を本尊としてゐる。

寶龜五年開成皇子が彌勒寺ミロクジ（勝尾寺）から入山して再興された。大治年間（凡八百年前）大原莊の橋輔元といふ者が惡疾を患つて當山の毘沙門天に祈願し、九頭龍の瀧に浴してなほつたので、感喜のあまり僧となり良忍上人を師として良恵と稱し當山に住し、大に土木を起し伽藍を建營した。次で明和二年に燒失、安永六年に再興した。古來皇室及武門の歸依も厚かつたが漸次衰頽して、古の二十一坊も、今は寶塔院（本坊）寂定院・龍光院の三院を存してゐるのみである。

伽藍は崖によつて建ち、中腹の總門は大治二年の建築で運慶作と傳へる二王天像を安置。石段を上ると本堂がある。その右に輪藏があり、左に觀音堂があり、傍に光仁天皇分骨塔がある。塔は十三重で凡三米、開成皇子の建立であるといはれてゐる。後方の高所の開山堂には小角の像を安んじ、石段は高く梯子の様に聳えてゐる。其東の谷に九頭龍の瀧がある。

寺寶中の絹本着色佛涅槃圖・木造阿彌陀如來座像・同聖觀世音立像二軀等は國寶に指定せられてゐる。

四、櫻井の驛と天王山のこりて

順 路

山崎驛——山崎——水無瀨宮——櫻井驛址——天王山——山崎驛——（或は

此の逆路——（行程約八軒）

山 崎 京都府乙訓郡大山崎村

京師の南塞

山城國乙訓郡の南限山城・攝津の國界にある今の大山崎村は、中世は大山崎莊と稱して隣接地の攝津の山崎村と區別した。地勢袋の口の如く八幡と相距ること一軒、淀川及び西國街道之を通じて天王・男の二峯相對峙し實に京師の南塞である。古來幾たびか爭奪の險隘となり、其の陣地は常に西岡・淀・八幡・神南カウナミにわたつた。彼の天正十年と明治戊申の兩度の戦は其の顯著なるものである。

山崎合戦

天正十年六月十二日秀吉、攝津天神馬場シヤウリウワジ（今高槻に屬す）に着給ひぬ。光秀聞いて青龍寺の城に移り其勢を山崎の東に軍立す。同十三日未明に秀吉天神馬場を立ち山崎に向ふ。中川瀨兵衛・高山右近心ざしありければ山崎の宿のはづれ寶寺を東に軍立して明智が陣に向ふ。秀吉の先陣未だ戦はざるに、秀吉の從者加藤遠江旗を進めて山崎宿の南、川の端を直に久我暇を上り後へにまはらんと進み行けば、明智の勢後をつままれじと色めき見えしに中川・高山、兵を進めて掛りければ明智の先勢戦はんとすれど叶はず我先にと落行けり。（豊鑑）

明治戊辰の役

慶應四年正月鳥羽・伏見の戦に東軍敗れ、五月橋本（八幡）近傍に陣したる京軍の參謀議して淀藩を先鋒となし之に逼らしめ、又山崎の關を守る藤堂藩へ使者を向け京軍に屬すべき旨を強ゆ。東軍未だ之を知らず橋本に防げる際突然山崎より東軍本營へ榴彈を打込み攻撃す。東軍不意のことにて大に狼狽し最早味方と頼む要所の屯兵裏切となり失望曰はん方なく敗走す。（舊幕府雜誌）

志士の墓

元治元年七月長州藩士久坂義助・入江九一・眞木和泉守等兵を率ゐて京師に侵入し、義助・九一の兩人は戦死した。和泉守は兵を収めて天王山により、會津・桑名の兵と戦つて、眞木和泉守保臣以下十七士はこの山上にて戦死した。今そこに墓が淋しく建つてをる。

水無瀬宮 三島郡島本村廣瀬

社格、官幣中社——祭神、後鳥羽・土御門・順徳三上皇——

承久の昔を偲ぶ水無瀬宮

三上皇承久の變にあたり遠島に遷幸あり、車駕遂に還ります日はなかつた。仁治年間（凡そ六九〇年前）後鳥羽院御在世中度々行幸ありし水無瀬殿のあつた地に聖廟を營み、御影を奉安し御尊靈を鎮め祀りしもの

が當社のはじめである。明治六年官幣中社に列せられ、水無瀬宮と稱し隱岐・阿波・佐渡より各々神靈を奉迎し、神殿を造營せしめられたものが今の水無瀬宮で、神域は廣くもないが閑雅掬すべき神境である。

後鳥羽天皇宸翰御置文（御絶筆）

天皇が崩御の二週間前（曆仁二年二月九日約七〇〇年前）隱岐の行宮に居まして、寵臣藤原信成に賜はつた御宸翰で、行宮に側近して忠節をぬきんでた二子親成・信氏に就いての御處分を記したまへるものである。我國民として其御心中を察し奉り御手印御花押を拜し、之を読み奉つて涙なきものは一人も
あるまい。

「此の所勞さりともし思へども（天皇は御自身の御病狀を指す）隨日大事に成れば、おほやう一定と思てある也。日來の奉公不便に存れとも、便宜の所領もなきあひだ力不及於水無瀬井内兩方無二相違一知行して、我れ後生をも返す」とぶらふべし。もぢたは眞念すぐに親成にゆづりたれば、よも父もたがへし。加賀は信氏にぞたはんずらむとおもへども、おほこにて、とかならん、一方なりとても親成をよきながら、弟に給べき道理なし。おなじく親成知行してわかこゝろに信氏にもあつけんは、そのかきりなし。一の家人人となりなは、信氏の官位もとよこほらずあらんには、父もそれをこそもてなされむずれ。たとひさりと、このをしてをそむきて、この領々をもしとるほどのことは、いか

でかあるべきところ存ずれ。」

曆仁二年二月九日

御花押

因に現社司水無瀬子爵は藤原信成の裔である。

石川五右衛門の手形

表門の右柱に巨盜石川五右衛門の手形と稱するものがあり、金網を以ておほふてある。かつて石川五右衛門が當社の神殿にある後鳥羽天皇宸作の寶劍を盗まうと思つて神殿に近づいたが、足が地について一歩も進むことが出来ない。竹林の中に七晝夜もかくれて遂に意を果すことが出来なかつたので、深く其非を悔いて神前に其罪を謝し、且この事を後世に示さんがために其手形を残したのだと傳へてゐる。

櫻井の驛址

三島郡島本村大字櫻井、山崎驛西凡二軒、水無瀬宮西北凡五百米

君がためにのこす一塊の肉

楠公父子訣別で有名な櫻井驛址は山崎驛の西凡二軒、東海道線の南側の街道端にあり、子別の松と稱する枯木のかたはらに玉垣をめぐらして一石碑を立て、表面には「楠公訣別之處」の六文字を題し、裏面には英國公使パークスの筆をとつた英文を刻んでをる。明治九年有志の建設したものである。近年更に地域をとり

廣げ乃木大將染筆の一大記念碑を建てた。頼山陽は歌

驛址に立つてはるかに南を見る。金剛の山は霞につままれて延元の昔を語り顔に立つてゐる。

つた。「君がため更にのこす一塊の肉」と。忠臣の心事の偲ばれて熱い涙、せき來るのを覺える。

櫻井の訣別——太平記から——

正成此上はさのみ異議を申すには及ばずとて、延元元年五月十六日都を立ち五百騎にて兵庫へぞ下りける。正成是を最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様ありとて櫻井の宿より河内へ返し遣すとて庭訓を残しけるは、獅子は子を産みて三日を経る時、數千丈の石壁よりこれを擲ぐ。其子獅子の機分あれば、教へざるに宙より跳返つて死することを得ずといへり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば我教誡に違ふことなけれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生に汝が顔を見んことを限りと思ふなり。正成已に討死すと聞ならば、天下は必ず將軍の代に成ぬと心得べし。然りといへども一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ふて降人に出る事あるべからず。一族若黨の一人も生残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢先に懸て、義を紀信が忠に比すべし。……云々

天王山

大山崎村の西に峙つてゐるのが即ちこれで高さ二七〇米、山崎驛より約一軒。山上に祇園祠、山下に聖天堂があるので天王山と言ふのである。山上の眺望至つてよく脚下に京都盆地及び大阪平野の一部を俯瞰し盆地・丘陵・河流・交通路等の地理的基礎概念を與へるには絶好の地點である。

山上に於ける觀察事項

一、京都盆地の地形

東は山城東部の丘陵、南は奈良盆地との間の丘陵、丹波高原の東邊は西北一帯に迫りて一の陥没盆地の形成されたる状を見る。殊に巨椋池は前面東方八軒の距離に展開して往昔の大湖たりし名残を止める化石湖の好標本を示して居る。

二、河流の方向

四周の山地から盆地内の低地に向つて集まる河川の状態を明瞭に觀察し得られる。即ち東部からは淀川の本流、宇治川は宇治の山峽を出で巨椋池の北邊を圍繞して西流し、南方笠置の山地よりは木津川、北方山地よりは賀茂・桂の兩川流れ來りて下鳥羽附近で合し、更に脚下の橋本附近で本流と相會する。故に巨椋池の西方一帯淀・八幡附近は此盆地の最低地なる事を窺はれ、殊に淀附近に散在せる沼池によつて

一層その事が確められる。

三、八幡との狹隘點

淀川を隔て、相對峙する八幡との間は京阪間唯一の通路として古來最も重要視せられた地點である。淀川に沿ふて左に京街道及京阪電鐵線、右に西國街道及東海道線・新京阪電鐵線の通ぜるを見、更に淀川を上下する通船を見れば如何に此地が交通上の要衝に當れるかを察知し得る。

然して交通上の要地たる此地點は一面又軍略上看過すべからざる處であつたことは「山崎」のところ既に述べた。人文地理上此種の説明には此地が最も適當である。

四、京都伏見の發達

京都市附近の堂塔は古都の面影を偲ばせ、伏見市附近に工場の散見せるは水利の便を利用して近時工業的發展の傾向にあるを窺はれる。

山崎城址

天王山の頂上にある。文明二年山名是豊兵庫より攻上りここに築城したもので、之を本陣として淀・鳥羽八幡を支へ、畠山義就は西岡の勝龍寺に、大内政弘は上山城の拍津に城廓を構へて相對陣したものである。

寶積寺(寶寺)

天王山の山腹

——宗派、眞言宗——本尊、十一面觀世音——

開基は行基菩薩で、昔は隨分立派なものであったが、今は二王門・三重塔・本堂・方丈を残すのみである。三重塔は特別保護建造物で大日如來が安置され、今に至るまで本郡屈指の古名刹として知られてゐる。

天正十年山崎役後一時羽柴秀吉の陣所となつた。

寺寶の打出の小槌は龍神が人と化現して聖武天皇に奉つたものと傳へられ、又國寶板畫の神像は弘安年間の筆で同時代を知る貴重な人物畫である。

妙喜庵

大山崎驛の西二百米

利休の茶室

明應の頃山崎宗鑑の建立したもので、境内には山崎合戦の時秀吉が利休に茶をたてさせた千利休の茶室および袖摺ソテヅリの松などがある。殊に茶室は好事者の激賞する名高きもので茶室の模範として現に特別保護建造物である。書院も特別保護建造物に編入されてゐる重寶なものである。

山崎宗鑑

山崎宗鑑(佐々木範光)は將軍足利義尙の侍者であつたが、將軍薨後剃髮して妙喜庵に隠れ俳諧に日を送つた。故に山崎の地名を冠して山崎宗鑑と言つた。また連歌の名匠である。

五、京の西山

順路

一、長岡驛——長岡天満宮——土御門天皇陵——柳谷の觀音——光明寺——長岡驛——(行程約十二軒)

二、長岡驛——光明寺——善峯寺——大原野神社——淳和天皇陵——西向日町驛——(行程約二十軒)

長岡京 京都府乙訓郡向日町

長岡は桓武帝十年間帝都の地。長岡京の名は北方から長く延びて今の向日町の邊まで來てゐる長々しい丘陵から起つたものであらう。其の宮城址は長岡の南端即ち向日町の邊を主要部としたもので、京城は是から

左右に亘り南方に延びて居つたものと察せられる。今日日町の市街の東方に長岡宮大極殿趾の碑が建設せられてある。其の地は方百米ばかりの小字を大極殿と言つて居り、その北に接して小字を荒内アレイノチと稱してゐる。荒内は大津京で見ると内と同じく荒廢した内裏の稱を傳へたものである。乃ち大極殿の小字と相待つて宮所ミヤトコロの所在を明示して居るものである。其の規模は明かでないが思ふに平城・平安に似たものであらう。

遷都の理由

七十餘年間非常なる隆盛を來した奈良の都を棄て、長岡に奠都した理由としては、

表面の理由、水陸交通の便利なることであるが、其裏面には種々なるものが伏在してゐる。

裏面の理由、豪族の軋轢アノレキ、僧侶の跋扈腐敗バツコフバイ（遂に救済の道なきまでに至つた）皇室財政困難（藤原種繼等姻戚秦氏の資力による寄附行爲により舊家を出し抜き自己勢力の扶植を計つた）

等で、延暦四年造宮使長官藤原種繼の暗殺されると共に造宮のことも頓挫を來したが、延暦三年十一月より同十三年平安遷都まで十年間の都であつた。

長岡天滿宮

京都府乙訓郡乙訓村字開田、長岡驛南西八百米

——社格、

——祭神、菅原道真——

弘法大師開基の眞言宗の寺であつたが、菅原道真屢々此所に遊び配謫の際住僧に御影を與へられたから其

の薨後に祠を建てたものであると傳へてゐる。後世寺院は廢滅して神祠のみ世に著はれるやうになつた。境内池畔には梅・櫻・楓及躑躅が多い、池中へかけ出した茶亭のながめもすがたがたいものがある。

土御門天皇（第八十三代）金原陵

乙訓郡海印寺村大字金ヶ原、長岡驛西約三軒

寛喜三年十月阿波池谷の行在所にて崩御、御火葬の後御遺骨を西山金ヶ原御堂に納め奉つたが、御堂は既に亡びて空陸カラホリを廻らした八角型の趾をとめてゐる。

後鳥羽大皇第一の皇子で建久六年（凡そ七百年前）僅かに四歳で禪を受け第八十三代の帝位に昇られた。

在位十二年改元したまふこと五度、承久三年先帝の北條氏討伐の御計畫を諫止し給へるも用ひられず、亂後自ら土佐に遷幸し、後阿波に遷つて崩御。御壽三十七。

楊谷觀音

京都府乙訓郡海印寺村、長岡驛南西凡そ五軒

——宗派、淨土宗西山派——本尊、觀世音菩薩——

眼病に靈驗あらたかなりとて遠方よりの參籠者が多い。觀音堂の左側に懸崖がある。その下に點々滴下する水を獨鉛水と言つて眼病者の洗眼用とする。堂前の參詣道の兩側に旅館が數軒あつて參詣者及參籠者のた

めに便宜を興へてゐる。

粟生光明寺

長岡驛より北西約二軒

——宗派、淨土宗——本尊、阿彌陀如來——

西山派の總本山

宗祖法然上人の大谷廟が嘉祿三年（約七百年前）山門の僧徒に因つて破壊されたので勢觀・隆寛の二僧が遺骸を、葛野郡の來迎院に移したが、後安貞二年（約六百九十年前）西山の蓮生房の弟子、幸阿彌の庵で茶毘して、遺骨をおさめて堂宇を建て念佛三昧院と號した。本尊は法然自作の張貫きの像である。四條天皇が仁治三年（約六百八十年前）光明寺の勅額を賜はつたので寺號を改めた。永祿年中（約三百六十年前）正親町天皇から淨土宗根源地たるの繪旨を賜はつた。彌陀來迎圖、二河白道圖は國寶である。

善峯寺

西向日町驛より西へ八軒、内山道二軒

——宗派、天台宗——本尊、千手觀世音——

西國第二十番の札所

後一條天皇長久二年（約九百年前）源算上人の開基で中世慈鎮和尚之に住し、尊圓法親王の入室があつた。昔は寺域が三尾四谷に及び五十餘の坊舎を備へ、西山御所と稱したが、應仁・文明の兵火を受けてから遂に恢復せられなかつた。

樓門の金剛力士は運慶の作と傳へられ、本尊は空海の作と稱せられてゐる。本堂の後方に阿彌陀堂があり

其後方の藥師堂は寺内の高處で東に京の町を見はらした眺望は又格別である。

多寶塔わきに左右へ各十米ばかりの枝をはつた稀に見る美しい五葉の松がある。

野邊もすぎ、山路に向ふあめのそら 善峯よりもはるゝ夕立

寺の北隣の三鉾寺は開山上人の隱棲寺で、宇都宮頼綱入道が奇瑞を見て抱き止めた阿彌陀如來をもつて名高い。

大原野神社

乙訓郡大原野村、西向日町驛の西約五軒

——社格、官幣中社——祭神、建御賀豆智命・伊波比主命・天之子八根

命・比賣神——

京の春日神社

春日神社は藤原氏一門の氏神として崇敬されてゐたが、桓武天皇の平安奠都後、交通不便な當時のことで

あり殊に婦人の参拜は非常に不便であつた。そこで藤原氏の所出にかゝる皇后の参拜に便せんがため、藤原乙牟漏が春日神を移し祀つたのが當社である。或は嘉祥三年（奠都後凡そ五十年）藤原冬嗣の移したものとはいはれてゐる。

皇后宮行啓の歴史に見えてゐるのは、貞觀三年二月仁明天皇の後、藤原順子を始めとし、圓融天皇の行幸し給ひしより後は亦行幸のことも屢々見えてゐる。

社は小鹽山を負うて南に面し、老樹生ひ茂つた間にある。今の社殿は後水尾天皇の慶安年中の建築、本殿は檜皮葺で瑞籬の内に四字相並べたる様は奈良の春日神社と同じである。

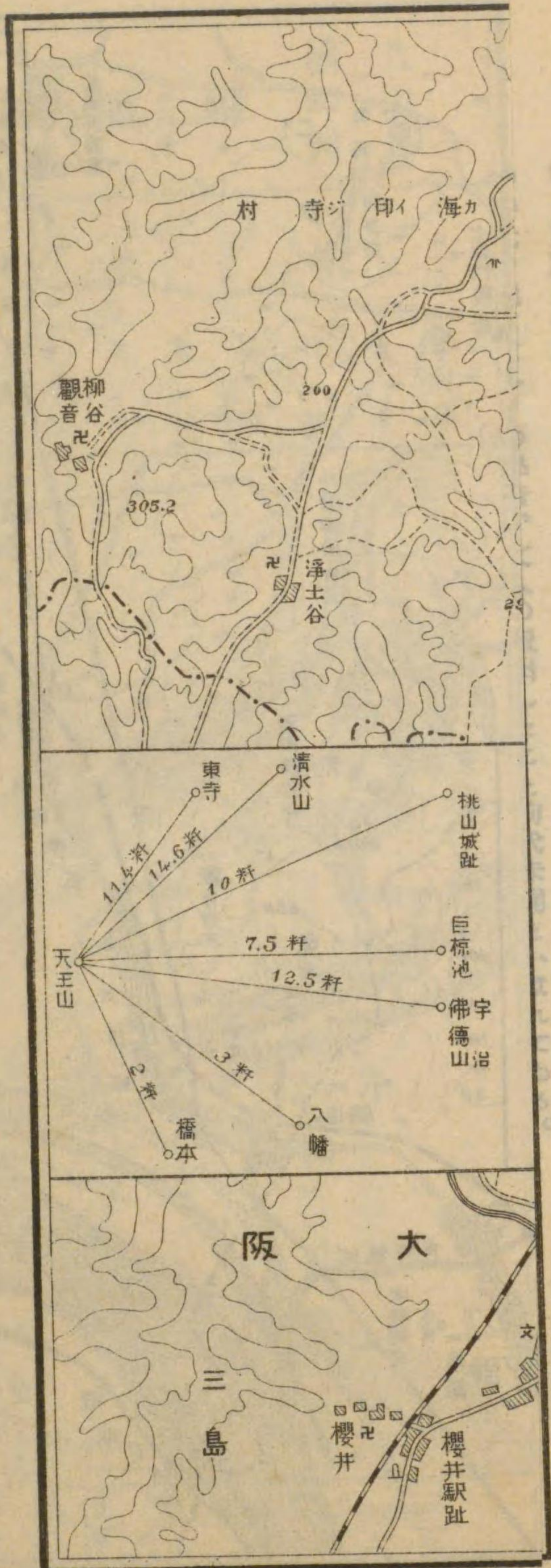
淳和天皇（第五十三代）大原野西嶺上陵

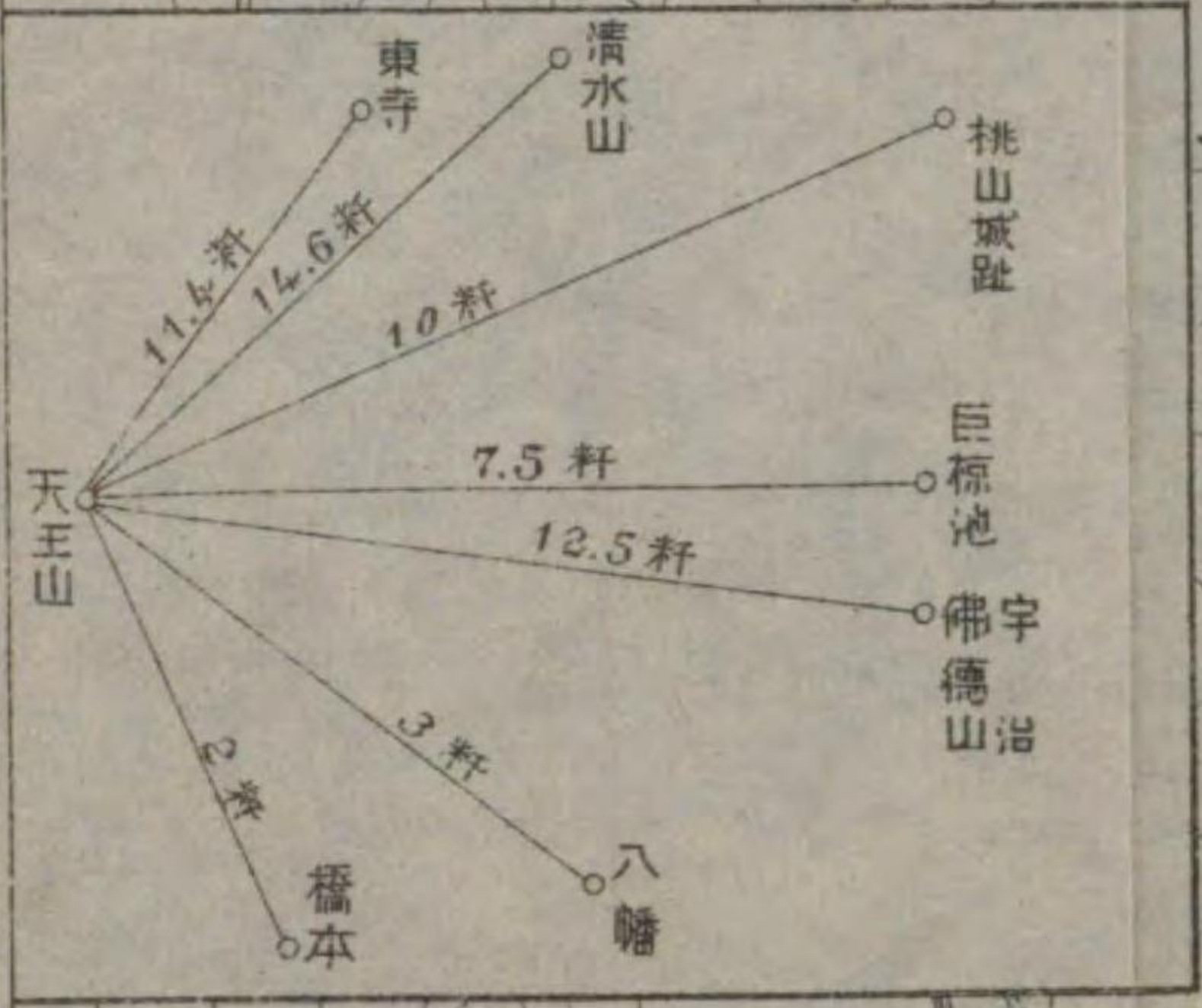
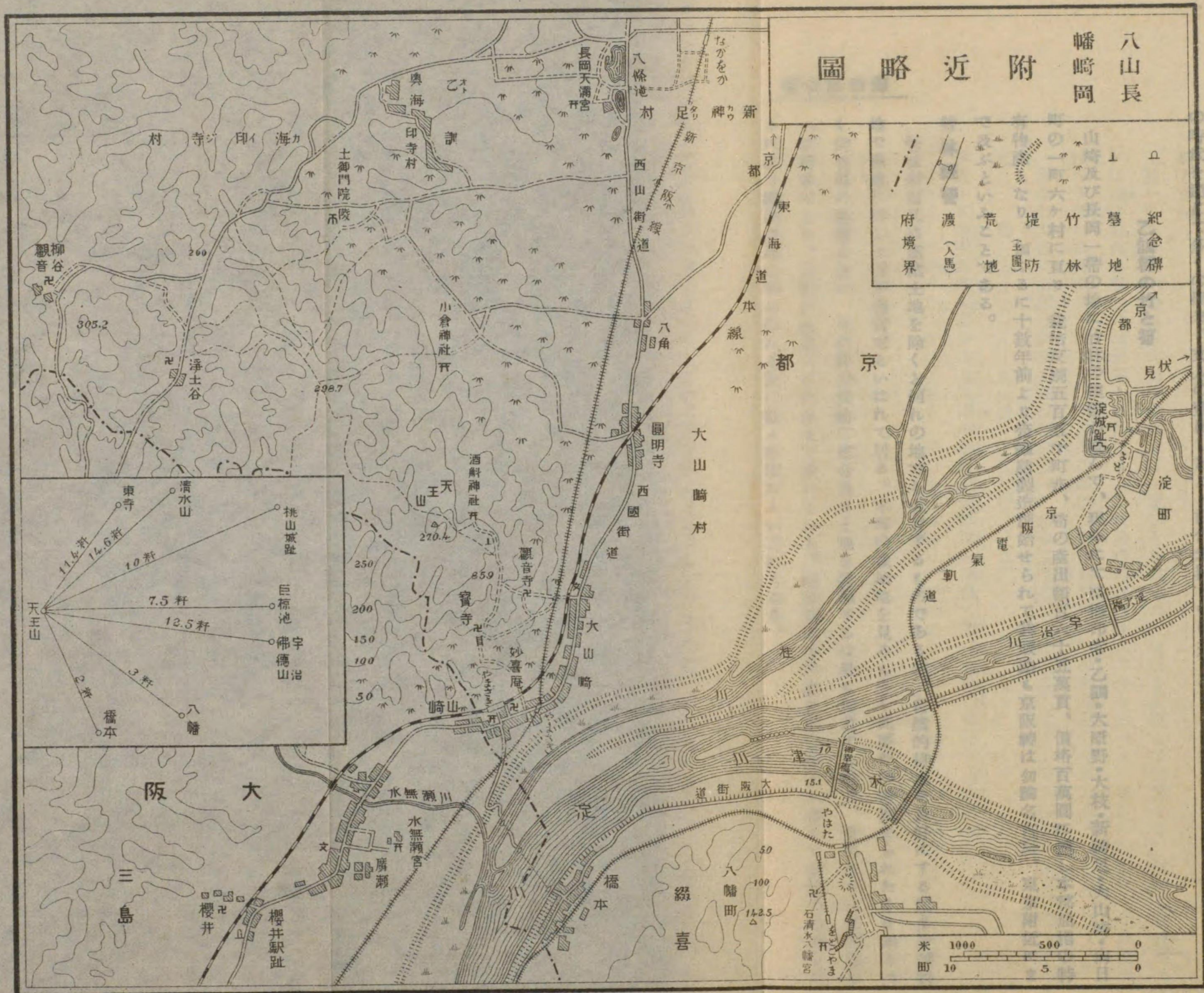
（西向日町驛より北西へ大原野神社まで）
（約五軒大原野神社より山上難路三軒強）

御骨を散らし奉る

承和七年五月淳和院に崩御、乙訓郡物集村に火葬し奉り、「歛葬は薄く、追福は儉約に」との御遺詔に因り御骨は大原野西嶺上に散らし奉つた。陵上にある圓く小石を積み圍んだ塚五つは御骨の散逸を惜んだためのものだとのこと。

桓武天皇の第三皇子にて、御兄嵯峨天皇の禪を受けて天長元年御位に即かれた。御心性いと恭順にましま

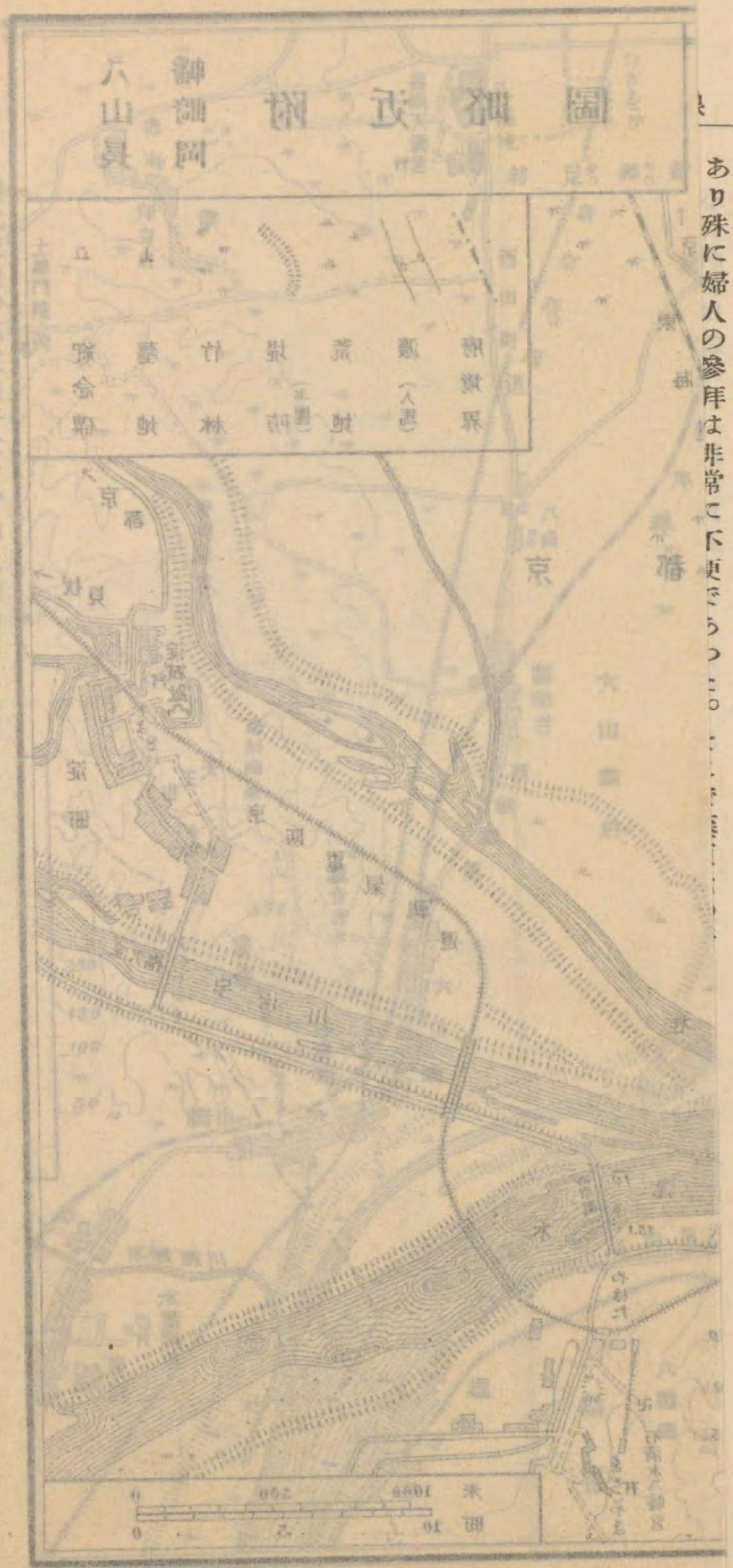




桓武天皇の第三皇子にて、御兄嵯峨天皇の禪を受けて天長元年御位に即かれた。御心性いと恭順にましま

し、兄天皇の恩召を懐せられて其御皇子を立て、皇太子と號せられた。在位十年學問を尊んぜられ、

あり殊に婦人の參拜は非常て下更さうつ。



し、兄天皇の思召を體せられて其御皇子を立て、皇太子と遊ばされた。在位十年學問を重んぜられ、兄天皇の時代を通じて多くの學者、文人の輩出したこと前代未聞といはれてゐる。

乙訓郡の竹と筍

山崎及び長岡一帯の地に竹林の經營が盛んで、現今にては海印寺・乙訓・大原野・大枝・新神足・大山崎・向日町の一町六ヶ村に亘り、栽培反別五百五十町歩、筍の産出額百六十五萬貫、價格百萬圓に達し本郡屈指の特産物となり、加ふるに十數年前より筍罐詰製造創始せられて其販路も京阪神は勿論名古屋、東京附近にまで及ぶといふことである。

竹林經營

竹は岩石又は重粘土を除くと何れの地でも生育するものであるが、自然的排水を良好にする爲多少傾斜地で南東に面した所が適當だといはれて居る。本郡の栽培地を見るも多く此要件の考察せられたるを知るべく尙竹材の運搬は便に、且肥料の供給に都合良き土地を選択するは最も留意する點で、當地にては京阪地方へは荷車により、其他は水運又は汽車便で搬出される。近來灘地方の酒造業の盛大に伴ふて需要の増加を見るに至り搬出上地の利を得たる故に益々有望だといはれてゐる。

新京阪沿線

孟宗竹の栽培

口碑の傳ふる所に依ると宇治黄蘗山主某唐土に遊學し、歸朝の際持ち歸つた孟宗竹を其友なる海印寺村の眞言宗寂照院と稱する古寺の院主に贈り同院の所有地に移植したのが嚆矢だといはれる。當時孟宗竹の幹枝在來の竹類に比し優美で盆栽用に適するより之れを庭園に移植して愛翫用とせるのみで生産的栽培は漸く天保時代に至つて起り、筍の肉豊富で且つ美味なるを知り、爾後次第に栽培者の増加を來し培養の方法亦逐次改善せられ、明治維新後栽培頓に隆盛を來し現今に至つたものである。

土質

孟宗竹は他の竹類と同様栽培上氣候暖か、降雨・降霜少く烈風の當らない、而かも土地高燥で南面に傾斜せる等は必要條件とするも、其土質の如何は殊に關係多く、品質收穫の多寡は主として之に關する。すなはち赤色を帯びた粘質壤土を最良とし、白色の砂質壤土之に次ぐといふ。本郡は勿論如上の諸要件を具へてゐる上に栽培の方法亦周到なる注意の下に行はれ、自然と人爲との合致せる、到底他の追隨を許さない。

順路

六、櫻の嵐山

附、保津川下り

順路

- 一、新京阪嵐山驛——渡月橋——大悲閣——龜山公園——天龍寺——清凉寺——二尊院——大覺寺——廣澤池——嵐山驛——（行程凡そ十二軒）
- 二、新京阪嵐山驛——渡月橋——天龍寺——龜山公園——大悲閣——松尾神社——梅宮神社——嵐山驛——（行程凡そ十軒）
- 附近の御陵——後嵯峨天皇陵——龜山天皇陵——後龜山天皇陵——嵯峨天皇陵——後宇多天皇陵
- （沿線）桂離宮

嵐山

櫻は吉野から

丹波の南部からつゞいた山の一部で、小倉山・龜山と對し桂川の清流を北にひかへて優姿愛すべく、たゞに

花と紅葉とのみいはず、全山新緑に萌ゆるの時偶々烟雨につままれた情趣は、眞に天下の絶景である。因みにこゝの櫻は龜山上皇嵯峨に宸居せられた時、吉野より移植させられたものである。

山の東のふもとに十三まゐりで名高い法輪寺の虚空藏様がある。

桂川

嵐山の風致はもとよりこの川を生命とするも、特にこの川は保津川舟遊を以て其の名を知られ、落合橋・渡月橋間の舟行は情趣掬すべきものである。

大宮人の清遊

嵐山の明媚な山水には古來、天皇の行幸、大宮人の遊覽など屢々あり、殊に宇多法皇の御幸、御堂關白道長が詩歌・管絃の三船を浮べて其才能を競つた如きは其著しいものである。

桂川の水源と保津川の横谷

この川は丹波北桑田郡大悲山附近に發源する大堰川を源とし、園部附近で園部川を合せ、南西は大曲折をなし保津川となつて流れる。龜岡町東方で、丹波山地の東邊を限る愛宕山脈及南部の老之阪山脈の連嶺に遮らるゝも一大横谷をなして之を突破する。

嵐山よりは桂川となつて山城西部の平野を緩流し、橋本附近で淀川本流と合する。

水量は平時宇治川本流の二割、淀川の一割二分に相當する程度であるから、水運の便には乏しいが、灌漑流筏上の利用はかなり行はれて居る。

保津川下り

保津川の横谷は、南桑田郡山本から葛野郡嵐山に至る約十軒間、所謂保津川の峽流として知られた所で奔流岸を噛み岩に激し、加ふるに河底の傾斜急、屏風岩・書物岩・獅子ヶ口等の勝景を呈し、ここに輕舟をうかべる名高い保津川下りは、初夏兩岸に紅を點ずる躑躅頃を最も良とせられて居る。

舟乗場は龜岡驛の東凡そ四百米保津橋の下にある。二、三十人乗の高瀬舟は前部二人、後部一人の舟夫が巧にあやつる棹で巨岩の間を縫ひ、急湍を乗り切る。しぶきにうるほふ頭を上げるとV字形をした若い谷もはやつきて大悲閣につく。ここまで凡そ十二軒、所要時間凡そ一時十分、上行は空舟で四時間、急流のほども思はれる。

流筏集積場

筏たまりは渡月橋下及其下流の臨川寺濱にある。桂川上流の丹波山地は杉・扁柏・榎・羅漢柏・櫟アストロの自然及人工の兩林に被はれて居る。従つて流筏する材は多くこの種に屬し、現今一ヶ年に約三千乘、(一乗幅四米長さ五十米以内)の運材を見るといふことであるが、然し此處は一時的の貯材場に過ぎないで、更に嵯峨木材會

社の企劃に係る貯木場に運材せられるのである。

流 筏 材

A 丹波山地の林相 保津川および由良川の分水嶺に當る北桑田郡附近は、落葉・潤葉の樹林に被はれ、杉・扁柏・榎・羅漢柏の如き針葉樹の純林もある。殊に同郡知井村(大堰川水源地方)には杉・扁柏の良林五千町歩以上もあるといふ。

B 人造林 杉・扁柏……北桑田郡及葛野郡北山地方に多く、殊に杉は北山特殊の材で、大阪方面では北山杉として珍重せられる。樺は角倉了以の大堰川開鑿以來水運の便が開けたので植樹大いに發展しつつあるといふ。

伐採年数は概して四五十年ではあるが南部に至るに従つて稍早いといふことである。(臺灣阿里山森林では二十五ヶ年で内地と同一材積のものを得るといふ。)

大 悲 閣 渡月橋の西約千五百米

桂川右岸に沿ふ紆餘曲折の山道を西に辿ること凡そ千五百米。大堰川開鑿に功のあつた角倉了以の創立する所、翁の木像を安置して居る。

花の山二町のぼれば大悲閣 芭 蕉

角倉了以

京都の人、慶長の奇傑で開鑿事業に大功あり、慶長八年家康の令を以て巨船をつくり安南に通商して奇利を博した。後請ひて大堰川を浚へ工夫を指揮して岩石を碎き初て丹波口へ舟楫の途を開き、次で富士川の急流を浚へ舟を挽て甲府に到る。山峽の民舟のあるを知らざりしが故に皆驚いた。鳴川・阿部川まを共に了以によりて運輸の便を得たことが多い。彼の洛東に大佛殿を營むや請ひて、伏見より大木巨材を河に浮べてさかのぼつた。慶長十九年歿す。年六十一。彼病革まるや「我肖像を作り造營中の大悲閣側におき巨綱を以て坐とし藜を杖となし而して石誌を建つべし」と。

渡 月 橋

嵐山のふもと大堰川に架せられ附近の情景に一段の趣をそへてゐる。橋の北詰四百米ほどのところに小督局の塚と稱せられるものがあり、又、琴聴橋があるが、眞疑のほどはわからぬ。

小 督 局

高倉帝の寵姫。琴を善くした。姿色あり宮に入りて大に寵せらる。爲に中宮建禮門院の寵衰へ、又局に眷戀してゐた平清盛の女婿藤原隆房の煩悶は一通りでない。清盛、おもへらく、中宮寵衰へ隆房憂鬱するは皆小督に因ると。因つて之を殺さんとした。小督ひそかに宮を出で、嵯峨の民舎にかくれた。帝北面の土源仲國に命じて之を索めしむ。仲國獨り驕して嵯峨に到り遙に琴聲を聞き之を得た。従ひて宮に歸るや寵幸愈々渥し。清盛怒り捕へて尼とした。時に年二十三、後大堰川に投じて死すと。

龜山公園 渡月橋の北詰を西へ凡そ二百米

大堰川の北岸一帯の地凡そ三萬坪餘、明治四十四年に開いて公園としたもの、高きに登つて遠望すべく、脚下に風光賞すべき碧潭を湛へ、旅館・旗亭等隨所に在つて客をまつてゐる。園内に角倉了以の銅像がある。

天龍寺 葛野郡嵯峨村大字天龍寺、渡月橋より北百米

——宗派、臨濟宗天龍寺派本山——本尊、釋迦佛——

尊氏後醍醐天皇の冥福を祈る

後醍醐天皇は北方の天をにらんで吉野に崩御あそばした。足利尊氏が尊信してゐた夢想國師は、佛刹を建て、罪を滅ぼし天皇の冥福を禱るべきことを勧めた。流石の尊氏も良心の苛責にたへず、後醍醐天皇と御因縁の深い後嵯峨・龜山兩上皇の御所のあつた此地を卜して寺をたて尊氏自ら土石を運搬したといふ。後村上天皇の時には七堂伽藍が全く出来て洛西第一の巨刹となり京都五山の一にゐた。其後幾度も火災にかゝり今の建物は近年の建築である。法堂内天井の躍龍は鈴木松年畫伯の筆で有名なもの。
後嵯峨・龜山兩天皇の御陵は寺の北部にある。

天龍寺船

當寺建立の時、夢想國師の建議で商船を明國に出して貿易をなし、其商利をもつて寺院造立の資に充てた。所謂天龍寺船の名はこれからおこつた。

後嵯峨天皇（第八十八代）嵯峨南陵 葛野郡嵯峨村大字天龍寺

陵は龜山天皇陵と東西に相並び、その東方の法華堂にある。堂は二間半四方、軒高十五尺、元治元年の造營である。

天皇は土御門天皇の第二皇子、四條帝崩御後御世嗣がなかつたので、平泰時が迎へて立て奉つた。文永九年崩御。壽五十三。天皇蹴鞠を好み給ひ中興の祖と稱せられた。

龜山天皇（第九十代）龜山陵 葛野郡嵯峨村大字天龍寺

陵は後嵯峨天皇と東西に相並び、その西方の法華堂にある。後嵯峨天皇陵と同じく塀をめぐらし正面には別々に唐門がある周圍八十間。

天皇は後嵯峨天皇の第三皇子、後深草天皇の後を受けて御即位、御在位十五年、嘉元三年九月崩御。

清凉寺 新京阪嵐山終點北凡そ一軒

——宗派、淨土宗——本尊、釋迦如來——

嵯峨の釋迦堂

もと嵯峨天皇の離宮の一部であつた土地で、源融は此處に山莊を營んで棲霞觀と名づけた。永觀元年（九

百五十年前) 東大寺の僧裔然が入宋して釋迦像・藏經・舍利等を將來し、長保四年(九百三十年前) 此處に精舎を建て、釋迦像を安置せんとしたが、果さずして遷化したので、其弟子盛算が其志を嗣いで之を果し、五臺山清涼寺と號した。本尊を一名三國傳來の釋迦と云ふ。中世以後寺運振はず漸衰して今日に至つた。阿彌陀堂は本堂の南東にあり、昔の棲霞寺の遺趾であると傳へられる。尊像は平安朝時代の逸品である。

國寶 本尊釋迦立像、傳土佐行秀筆融通念佛緣起一卷、傳狩野元信筆釋迦堂緣起六卷。

二尊院 渡月橋の北西凡そ千五百米

——宗派、天臺・律・法相・淨土の四宗兼學——本尊、釋迦・阿彌陀の二尊(二尊院の名は、これよりおこる)——

歌枕、小倉山の麓

小倉山みねのみぢば心あらば 今ひとたびの御幸またなん。

境内後方の山は小倉山で、古來和歌の名所として著はれて居る。寺域中に藤原定家の山莊と言ひ傳へる時雨亭並に伊藤仁齋一家及角倉了以父子の墓がある。

寺の北、凡そ四百米に後龜山天皇の嵯峨小倉陵があり、南凡そ二百米に去來の舊居落柿舎がある。

後龜山天皇(第九十九代) 嵯峨小倉陵

應永三十一年四月十二日崩御、御墓は五輪の石塔で、周圍に小五輪塔・小寶篋印塔がある。

天皇は文中二年十一月一日御即位、當時、楠木・和田等南朝の餘黨多くは徴々として振はず、一方足利三代將軍義滿も多年の兵亂に苦しみ和平の希望を申し入れたので、御父子の禮を以て後小松天皇に神器を授けたまひ、五十餘年分立してゐた南北兩朝の合一を見た。

落柿舎

二尊院の門を出て南へ凡そ二百米、藪のつきるところを東へ廻ると元祿の俳人、蕉門の十哲として知られた向井去來の舊居落柿舎がある。今はその後裔堀晚翠翁が住つてゐる。

柿ぬしや 梢はちかきあらし山 去 來

大覺寺

葛野郡嵯峨村、渡月橋の北凡そ二軒

——宗派、古義眞言宗大覺寺派の本山——本尊、五大尊——

嵯峨天皇の離宮

こゝは初め嵯峨天皇の離宮であつたが、貞觀十八年(約一千五十年前) 佛寺となし、淳和帝第二皇子恒寂法親王を開祖として居る。

後嵯峨、龜山、後宇多の諸帝は御讓位の後當寺に入御あらせられ、後宇多法皇はこゝで院政を聽かれた。元中九年後龜山天皇、吉野から此寺に入り給ひ三種の神器をこゝの正寢殿より後小松天皇の土御門内裏——今の京都御所——へ遷された南北合一の御儀も此所で行はれた。

正・宸・殿 は四百餘年前に紫宸殿の舊構を移されたもので、特別保護建造物となつて居る。また境内の大・澤・池 は嵯峨帝の離宮の庭池たりしもので大正十一年天然物史蹟保存地に指定せられて居る。

附近には觀月の名所として名高い廣澤池及び嵯峨・後宇多兩天皇の御陵がある。

廣澤の池 葛野郡嵯峨村、大覺寺の東、凡そ一畝

池は東西凡そ二百米南北百米、周圍約千三百米、拾芥抄には寛朝僧正の開墾したものとしてをる。觀櫻と觀月の勝を以てあらはれてゐる。櫻は南の堤上に多い。

嵯峨天皇（第五十二代）嵯峨山上陵 葛野郡嵯峨村大字嵯峨字朝原山、大覺寺の北凡そ千五百米

承和九年七月嵯峨院（今の大覺寺）に崩御、「棺を作る厚からず、之を覆ふに席を以てし約するに黒葛を以てし、床上におき、衣衾飯喰平生の物一に皆之を絶て、又山北幽僻不毛の地を擇び葬るに三日を限る、又坑を穿つに淺深縦横棺を容るべからしめ、棺既に下し了れば封せず樹せず、地を平ならしめ、草を上を生ぜしめ長く祭祀を絶て」との遺詔があつた。當時薄葬の風があつたためらしい。

陵は嵯峨山の頂上に在つて京洛の内外を一望の内に收め、遠く巨椋の沼・八幡・山崎から一條の白布

を延べた様な淀川も見える。

天皇は幼少の頃から聰明にわたらせられ、好んで書をよみ、御成長に及んで經史に通じ、詩文にたくみに、書法亦巧妙で當時の三筆と稱せられた。

後宇多天皇（第九十一代）蓮華峰寺陵 葛野郡嵯峨村大字上嵯峨、大覺寺の北東凡そ一畝

元享四年六月大覺寺に崩御、こゝに葬り奉る。陵はもと八角の圓堂であつたので、なほ八角堂といつてをるが、今は四角の小堂、堂内の五輪の石塔がある。

天皇は龜山天皇の第二皇子、御治世中弘安四年蒙古が襲來したが、大暴風が起つて敵艦を破碎し、我將士之に乗じて奮戦、大勝したことは史上に名高い事實である。

松尾神社 葛野郡松尾村、新京阪線松尾神社前驛西凡そ百米

——社格、官幣大社——祭神、大山咋神・中津島姫命——

帝都の守護神

祭神、大山咋神は大國主命の御子で、加茂別雷神の御父である。大寶元年秦都理が創建するところで、桓武天皇平安奠都後、加茂の社と共に帝都の守護神として尊崇せられた。上世より威靈大いにあらはれ、猛靈神として崇められたことは國史に屢々見ゆる事實である。

一條天皇の寛弘元年車駕神幸あつてから松尾行幸の例が開け、歴聖の行幸十度に及んでゐる。又造酒の神と稱せられ、醸酒家の守護神として崇敬せられてゐる。中津島姫命は、即ち市杵島姫命のことで、大山咋神の御母神だとのこと。福岡縣官幣大社宗像神社の中津島に祀られてゐるので中津島姫命ともいふのである。

名高い松尾祭は貞觀年中から始つたと傳へ、洛西第一の祭事である。

社は雷峯を西に負ひ、老松・古杉森々と生ひ茂り、清淨なる境内には櫻・楓等も多く、春秋の眺めもよい。

本殿は檜皮葺、屋根流造り室町時代の建築で、特別保護建造物、木像の男神坐像二軀、同女神坐像一軀は國寶に編入せられてゐる。

松尾祭

本社の例祭は四月二日であるが、神輿渡御祭は四月下卯日、還御祭は五月上旬日に行はれる。いはゆる松尾祭で、洛西第一の祭事である。神殿をはじめ供奉のものに皆葵を飾るので葵祭とも云ふ。當日は六基の神輿順次出門して、七條通桂橋の上流に船をよそほひ、神輿をのせて桂川を渡り、内四基は七條村字七條の旅所に、一基は京極村勝寺の旅所に、一基は京極村郡の旅所に着御して祭事あり、還御祭は七日開きといひ、三所の神輿西七條の旅所にあひて還御、供奉の多勢神輿を守りて桂川を渡ること神幸のときと同じく、其川渡御の壯觀を拜せんとする士女數萬に及ぶといふことである。

社は藤原不比等の妻、縣犬養橋三千代が其祖神を祀つたのがはぢまりで、仁明天皇の母后橋喜智子（檀林皇后）が其氏神たるを以て今の地に移し祀られてから世に名高くなつた。境内は北西に嵐山をのぞみ、南西に松尾山があり、樹木蒼鬱たる中に一條の清涼が流れ、閑寂な一區をなしてゐる。水邊に燕子花多く、花時訪れる人が多い。

沿線

桂離宮

葛野郡桂村字下桂、新京阪線東向日町驛北東凡そ一軒

小堀遠州苦心の名園

豊臣秀吉が天下を統一するや天正十七年（約三百四十年前）正親町天皇の皇孫智仁親王を己が猶子に請ひ奉り、勅許を得るや、其別業を桂村に建營して親王に獻じたのが起りて其の當時のものは今日見るやうな整つたものでは無かつた。第二代智忠親王が園庭を御増營あそばされた時、幕府は御内命に因つ

て伏見奉行小堀政一に其設計、製作を委ねた。政一は幕命を拜した時次の事を上申して其允可を受けて彼れが畢生の力を集中して造り上げたのが今の御庭で、明治十六年九月之を離宮となし、天皇・皇族方の御休憩所となつた。

- 一、雑用如何程にても御出し下さること。
- 二、年月は如何に長うとも御叱りなきこと。
- 三、竣工するまで來り觀ざること。

此の如き條件のもとに造り上げられた此の御庭は泉石の敷置、樹木の配列、亭舎の按配、其のつ一つに凡俗を離れた妙趣が現はれ、何人でも園内に足を運んだものは、人間の世界を脱したやうな心地になる。廻遊式庭園としては修學院離宮と共に本邦最上のものである。修學院離宮は背景を自然の山に取つてあるが、本庭園は人工のみに因つて自然を征服しやうとした所に相違がある。離宮は桂川に接し其河水は園内に入つて池邊の瀧と化してゐる。

因みに政一は小堀遠州と稱して、茶の湯・書畫・造庭・建築等風流の道に於て可ならざるは無き程の達人であつた。

七、愛宕のぼり

順路

嵐山驛——鳥居本——清瀧——愛宕山——(行程往復約廿四軒)

愛宕電鐵を利用すればケーブル終點より往復約二軒

(附近) 清和天皇陵

防火の神、愛宕のぼり

嵯峨野

嵯峨村から、清瀧に向ふ途中、所謂洛西嵯峨の自然は、古堂祠の面影と共に平安朝の昔を偲ばしめる。大宮人の隠遁の地は、今も世棄人の慕ふ所となり、閑寂な隠家は隨所に見受けられる。

粘板岩層

剝理の正しい粘板岩層は、山道兩側の懸崖に、又は街道の自然敷石に層々重つて表はれてゐる。此の岩片を以て硯石・砥石の製造を業とせる家も散見する。

試

鳥居本からは、自動車も通ぜぬ傾斜路。峠は平均六分の一の傾斜を以て清瀧川畔に下る愛宕登山第一歩の難所であつたが、今は愛宕電鐵が通じて峠を越へる人も少い。

清瀧村

桂川の一支流清瀧川の谿流に臨む一寒村で、旅舎小亭谷に懸り岩により、秋季紅楓谷を染めて、恰も小高嶺を現出するの趣がある。こゝから愛宕ケーブルが通じて愛宕のぼりも楽になつた。

水力電氣發電所

清瀧村をはなれて更に坂路を登ること約二百米、北方清瀧川左岸に之を望む。上流高雄附近より引水して嵯峨・嵐山附近に送電して居る。

保津川横谷

愛宕山頂上近くの山道は、山背の南西に沿ふて通ずる故に、展望は南西方のみである。保津川の標式的横谷は南方に俯瞰し得る。地質時代に湖水であつた龜岡盆地が其排水路を老の阪から愛宕山南麓の斷層線に轉じ、峽流を縫ふて斷崖をなし、深淵淀む所、手にとるやうに明かであり、谿流に沿ひ山陰本線の敷設されたるをも望まれて、谿谷と交通路との關係を明示することも出来る。

丹波山地

愛宕山頂に近づくと、西方丹波地方の斷續せられた山容は展ける。金剛山頂より觀たる紀伊山脈の連嶺重疊して走れると對比して所謂丹波山地特殊の地貌を見ることが出来る。

愛宕山

京都府葛野郡嵯峨村

愛宕山は海拔九二四米、京都の北西に聳え、比叡山を抜くこと七六米、京都附近第一の高峯である。頂上には、文武天皇の大寶元年、僧泰澄白雲寺を創立し、天應年中僧慶俊が愛宕郡鷹が峯より移したと傳へる、伊弉册尊外四神を祀る府社愛宕神社がある。毎年四月二十八日には鎮火大祭が行はれ、火防の神として參詣者が多い。

神域は杉の老樹多く、展望は十分でないが、高雄に下る途中東方に京都盆地の北部を望むことができる。京都市は、盆地の東部に偏して發達して居るから、市街の展望は比叡山に及ばないが、西部の桂川流域及洛西一帯の平地を見はらして景色がよい。

愛宕山の地質

愛宕山頂上は性堅緻な石英質硅岩で、他の粘板岩・砂岩の脆弱な部分の風化剝された中の殘丘であ

るから、かく突兀たる地貌を呈するに至つたものである。

山と神社

愛宕山頂に神社を祭祀せられたことは、古來本邦一般に山を靈化し神聖化した宗教的觀念の發現と見られる。

山と宗教との關係は、近く比叡山と延曆寺、高野山と金剛峰寺、生駒山・信貴山等の例を見るも明かである。又山地は多く雜鬧の都市を離れ、險難な行路は俗塵を遠ざからしめた結果、精神修養の行場として開かれた點も、重要な一理由であらう。大峯山の役行者、鞍馬山に於ける義經其の他古來の傑士は多く山に入つて修養したと傳へられるのも亦この間の消息を語るものである。

高雄へ下る道

山道の交叉點多く、高雄行の粗雑な木札は案内として在るも、信を措くに足らぬ。只直進すればよい。愛宕神社前より右折してけわしい山道を凡そ一軒餘下ると左側に風化した山崩を見る、粘板岩片の採集に適する。こゝから前途愈々わるく五六百米の間雜木・熊笹が生茂つて山徑を没し、全く行路を遮る思がする。而も山背に通ずる一路、一步誤れば顛落するの危険が伴ふ。此の難所を辿りぬけると道稍坦、雜木漸く粗、秋空高く澄んで、林間紅く秋の日ざしに燃えた鮮かな山徑を行く、楓樹の紅なるよりも亦更に別趣の景致を味ふに足る。けれどもこの行旅は兒童の修學旅行には適せず、青年團員などの鍛練旅行として好適のものである。

清和天皇(第五十六代)水尾山陵

葛野郡嵯峨村大字水尾(愛宕電鐵清瀧驛西約三軒、渡月橋から北西約十軒)

慶元四年(約千五十年前)右大臣藤原基經の栗田の山莊に崩御、愛宕郡上栗田山に火葬し、御骨を水

尾山の上に置き奉つた。陵は今小圓墳である。

天皇は文徳天皇の第四皇子、御年九歳にて御即位、外祖父太政大臣藤原良房政を攝した。藤原氏攝政の初めである。御在位十八年、位を陽成天皇に譲り出家得道してあらゆる難行、苦行をつまれた。これ外戚藤原氏の勢を以て惟喬皇子をこえて踐祚せられたことを悔ひ給ふためと察する。恐れおぼい極みである。

八、三尾のもみぢ

順路

一、嵐山驛——高雄——榎ノ尾——榎ノ尾——嵐山驛——(行程往復約十六軒)

二、嵐山驛——嵐山電車乗換——清瀧驛——高雄——榎ノ尾——榎ノ尾——嵐山驛——(行程往復約十二軒) 尙嵐山電車、高雄口および北野停留場より乗合自動車もある。

三、尾 京都府葛野郡梅畑村

紅葉の名勝

清瀧川の溪流に臨む左右の山腹より河畔に沿ふ山麓一帯、古色蒼然たる楓樹谿水と相映じ、山門・堂宇其間に隠見して、さながら錦繪を見る様である。その山容水態の布置結構は雄大でもない、壯美でもない、正に雅麗の美にある。地京洛に近く都人一日の清遊には蓋し好適の境であらう。

高雄山神護寺・槇尾山西明寺・榎尾山高山寺を併せ稱して三尾といひ、紅葉の名所として知られてゐる。

高雄山神護寺

葛野郡梅畑村、嵐山驛の北凡そ八軒

——宗派、眞言宗別格本山——本尊、薬師如来——

清麿・空海・文覺三偉人の遺跡

もと神願寺と稱し、和氣朝臣清麿が開創した寺で、空海が歸朝すると天長二年勅を奉じて、神護國祚眞言寺と改め之に住し、道俗のために灌頂の法を授けた。天台の開祖最澄も此處に來て空海から灌頂を受けた。後年寺運の衰頽に向つた時、文覺上人、後白河法皇に奏して御朱印を得四方に勸化して、壽永（凡そ七百五十年前）年間之を再建した。文覺上人の勸進帳は有名な其時の回顧である。之がために天皇、源頼朝以下之に應じて庄園を寄せた。併し寺は其後東寺に屬し且つ應仁以後は武家のために所領を奪はれて衰微したが、豊臣・徳川二氏又寺領を寄せて稍々舊觀に復せしめた。
特別保護建造物 大師堂

國寶 五大虚空藏菩薩五軀・薬師如来座像一軀・兩脇士立像二軀・十二天圖十二幅・藤原忠實筆跋文後白河法皇宸翰・文覺四十五箇條起請文・空海筆灌頂歴名其他。

三絶の鐘 貞觀十七年の鑄造で、序文を書いたのが橋廣相、銘文を書いたのが菅原是善、之を清書したのが藤原敏行で、三絶の鐘といはれてゐる。又この鐘は銘は神護寺、形は鳳凰堂、音は三井寺と合せて日本三名鐘に數へられてゐる。

護法善神社舊址 和氣清麿を祀つたお宮であつたが、明治十九年京都御所西側に移され、別格官幣社護王神社と改められたので其以後は此所に遺跡を止むるのみとなつた。

和氣清麿の墓 鐘樓の後方約三百米にある。

文覺上人

名は遠藤盛遠、豪宕不羈で體軀壯大武藝に通ず。年十八の時誤つて左衛門尉源渡の妻袈裟を殺し、遂に僧となり文覺といつた。専ら難苦を嘗めて屢々死に瀕したこともある。源頼朝が伊豆に謫居した時、文覺も伊豆に行つて旗擧をたすけて功があつた。後この神護寺を再興し、また東寺をも修した。墓は鐘樓から北へ凡そ六百米、後深草天皇の第四王子で神護寺門主であらせられた性仁法親王墓と並んで淋しく立つてゐる。

槇尾山西明寺

神護寺より清瀧川に沿ふて上ること數百米

——宗派、眞言宗——本尊、釋迦佛——

弘法大師の法弟、神護寺の智泉の開基。初夏の綠蔭と秋霜紅楓の對照の妙は筆舌に盡し難い。

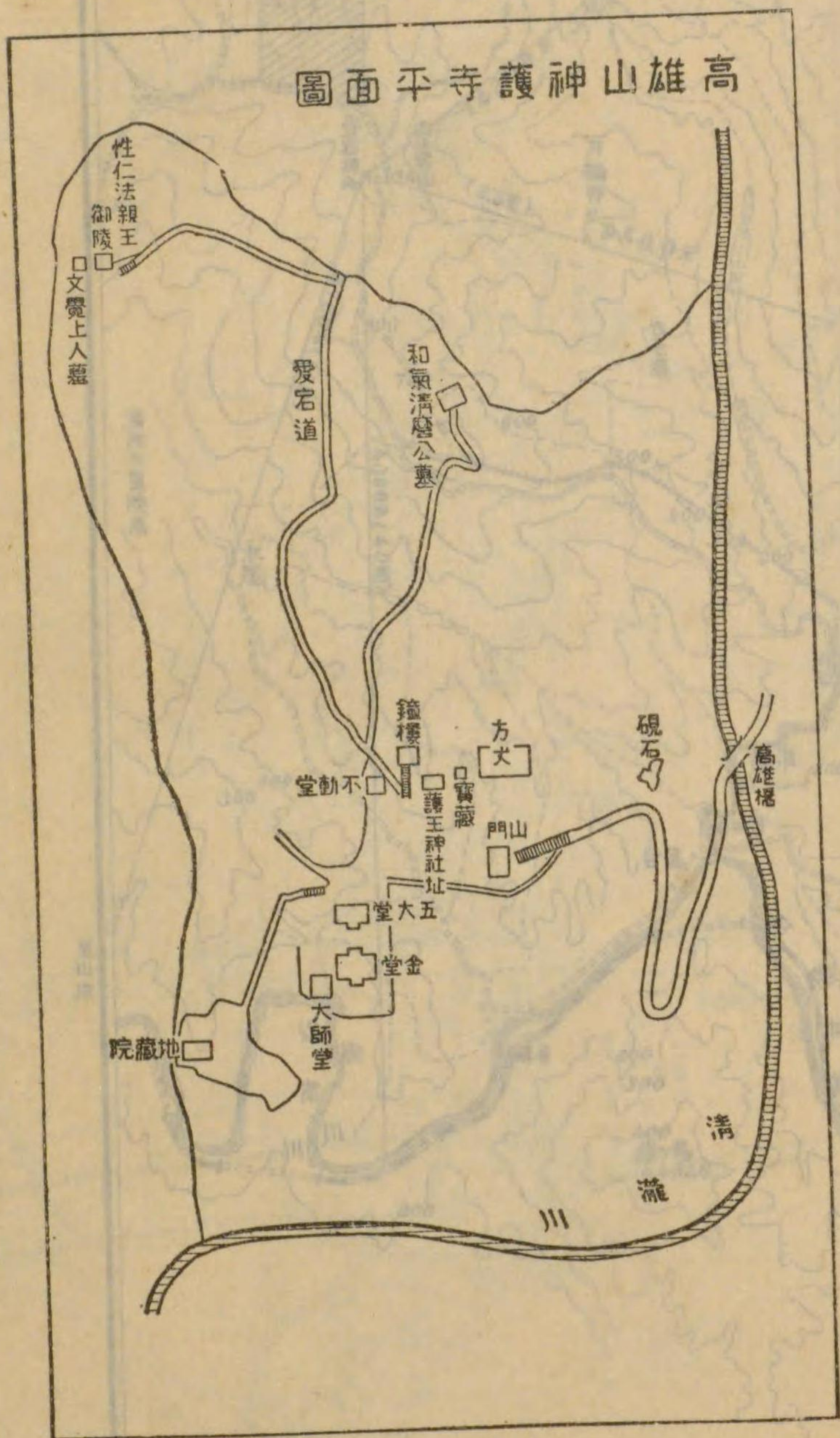
櫻尾山高山寺 西明寺より北東およそ四百米上る

——宗派、古義眞言宗——本尊、釋迦佛——

一世の善知識として、北條泰時なども熱心に歸依した明惠上人を中興開山と仰いでゐる。建仁寺榮西、宋より將來の茶種を明惠に與へ、此の寺域に試植せしめたのが本邦茶の始めである。

後鳥羽法皇、深く當山に歸依し給ひ、御下賜の石水院（五所堂）は、今尙殘存し、特別保護建造物に編入されてゐる。

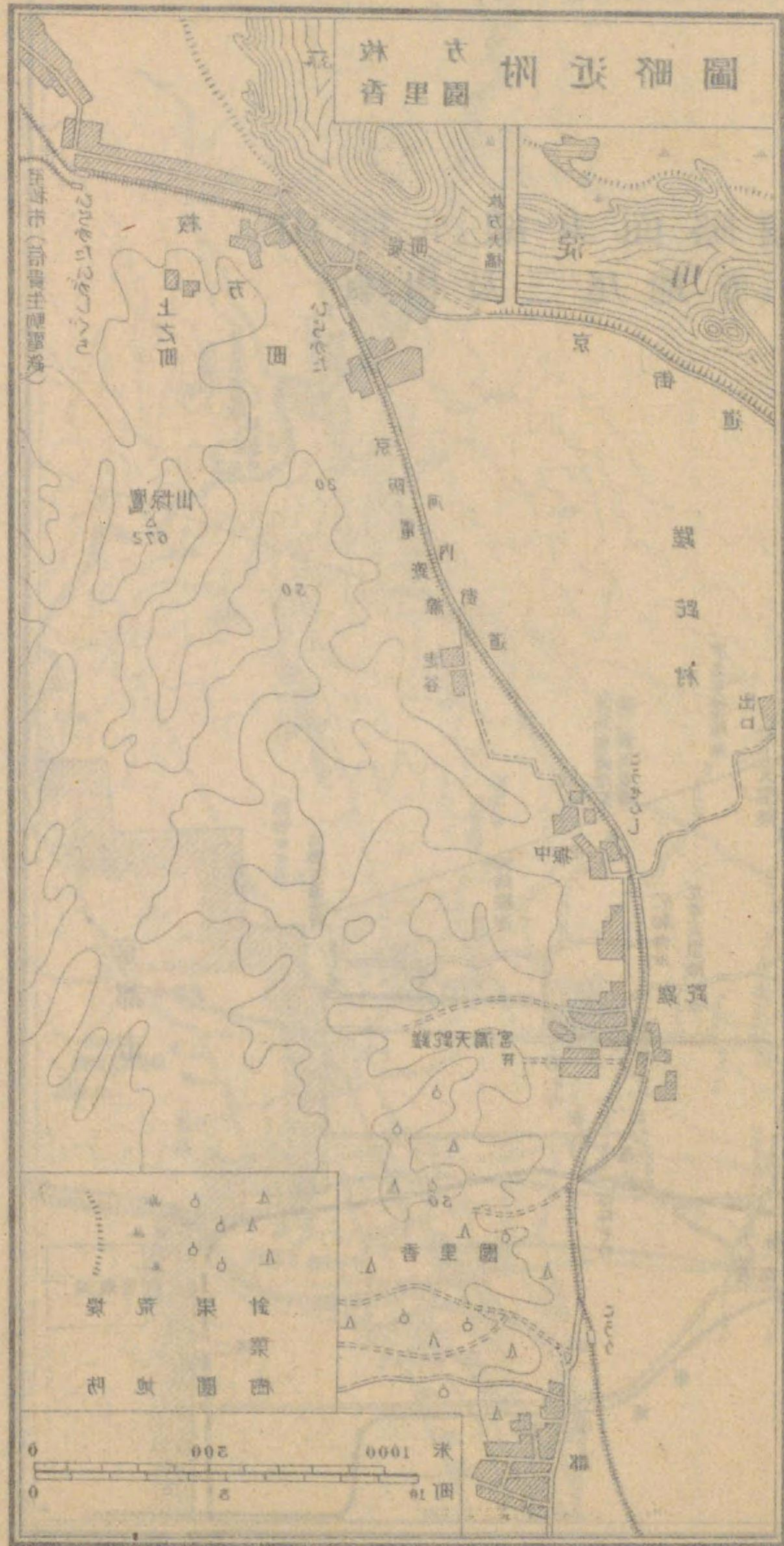
國寶・鳥羽僧正筆水墨畫四卷、玉篇（裏面に明惠上人の畫あり）其他の什寶が多い。



- 一、香里園
- 二、淀と八幡
- 三、伏見、深草
- 四、京のみやこ
- 五、鞍馬山
- 六、八瀬大原
- 七、琵琶湖のほとり

京阪本線

附、京阪京津線、琵琶湖電鐵線



一、香里園

順路

- 一、香里停留場——香里園——蹉跎天満宮——香里停留場——(行程約二軒)
 - 二、枚方西口停留場——香里園——蹉跎天満宮——香里停留場——(行程約六軒)
- (附近) 交野原

香里園 北河内郡友呂岐村、香里停留場東

京阪電車香里驛の東隣御所山を中心とする丘陵一帯の地で、東北に松林を負ひ、南方稍低き舊來の村落を隔て、遙に飯盛・生駒・金剛の層巒と相對し、西は展開して淀川の清流をはらむ攝河の沃野を瞰下する景勝の地である。園内櫻楓樹多く、附近には菅相塚・蹉跎天満宮等菅公の遺跡がある。ここを以て近時住宅經營地として年を逐ふて發展しつつある。

蹉跎天満宮 北河内郡蹉跎村、香里停留場北凡一軒

蹉跎山の半腹にある。その昔土地の人が菅原道眞の息女苺屋姫の深い孝心に感じ、其の舊跡であるこの蹉

跎山に社殿を造つて菅公を祀つたものである。御神體は公自作の等身像であつて、その左遷の時記念の爲に苺屋姫に贈られたものであるといはれて居る。神社の東一帯の松林は松茸の産地として知られ、山の東なる高さ凡六米周圍廿二米程の一堆の地は所謂菅相塚で、道眞左遷の時こゝに憩ふて京師をかへりみ、名残を惜んだ所であるといはれて居る。

蹉跎の蹉跎

昌泰四年(約一〇三〇年前)菅原道眞が筑紫へ左遷の途此の山に休息せられたので、息女苺屋姫がその後を慕ひ來られたが、己に其の出發の後であつたので之を悲しみ、西方なる父の行手を望み蹉跎して止まなかつたから、人々が之に感じ、その音讀がやがて山の名となりまた土地の名をなしたものであると。

枚方町 大阪府北河内郡

三十石船で盛えた枚方町

北河内郡京阪沿線の一小都市である。日本書記に「邇し流而上。徑至河内國草香邑白肩之津」と見ゆる白肩津は後訛つて「ひらかた」になつたとの説がある。當時に於ける草香邑は其の區域が擴大で、其の一部である白肩の津の遺稱を本地に傳へたものであらうか。又日本書記に仁德天皇北河之滂(大波)を

防がうとして茨田堤を築くとあるのも此所である。

この地は淀川の左岸に沿ひ、伏見・大阪間の中央、有利の地にあり、往時から淀川上下の舟がよりであつたが、天正年間（約三四〇年前）大阪城が出来、枚方以下京橋に至る間の汗澤の地に堤防を築き、河道を制して伏見・大阪間の捷徑を通じ、文祿年中伏見城が築かれてから兩地間の陸上交通また頻繁を加へ、一面豊臣氏が淀川輸送を重視してから漸く樞要の地となつた。降つて徳川の時代になつてこゝに監船所フナバシヨを置いて上下の船を監せしめたから、その大阪から淀川を遡つて伏見に往來した大小の船舶は皆此所に泊るやうになり所謂淀川三十石船によつて繁昌を謳はれ、一面諸侯參觀交代の宿所としても名高い驛であつた。

くらはんか舟

世に聞えた「くらはんか舟」は、傳説によると徳川家康大阪夏の陣に方り淀川べりに追求せられて渡るに舟なく、其の臣大久保彦左衛門と共に死を決したとき、偶々漁舟が來つてこれを救ふた。役定まるの後其の恩賞として漁夫の希望に任せ、淀川上下の船客に飲食品を一手に販賣することを許され、之に幕府御用船の格を與へられたのが其の起源であると。船客の貴賤に拘らず「くらはんか舟」、牛蒡汁、あん餅くらはんか、巻ずしどうじや、酒くらはんかい、錢がないのでようくらはんかい一と言罵りながら三十石船に漕ぎ寄するを常とし、之を茶船と稱へ、又其の賣聲によつて「くらはんか舟」と呼びならはしたのである。而して舟は常に艫を先にして棹さすを例とした、之は家康の危難を救ふたとき舟を向け

なほす暇のなかつたありさまが後に残つたものであるとの事である。宇提町の西端なる旅館かぎ屋の裏は、當時碇泊した船の賑ふた所である。
狂歌 商ひにへつらひもなく言葉まで 實に現金喰はんか舟 一 雑

附近

交野原 北河内郡牧野村大字禁野、枚方東口停留場北東一帯

私獵を禁ぜられた禁野

交野カノノは一に片野に作つてある、是れ桓武天皇以來歴代天皇の遊獵し給ひし所であつて、桓武天皇以前は寶龜二年二月光仁天皇の交野に行幸のこともある。其遊獵し給ひしことが史上に見えたのは、延暦二年十月、桓武天皇の行幸が初めてで、同天皇の遊獵し給ふてから、御狩場となつて同天皇及び嵯峨天皇は最も多く遊獵遊ばされた。其の區域は本地より渚・小倉・坂より山田村の中宮・甲斐田・片鉾・田口を中心として、廣く其の附近に及んだものであらう。御狩場となつたのを以て御狩野の稱が起り、一に御野とも呼んで居た。天子御獵の所なるに依る。其の之を三野と云ふのは御野の借字である。庶民の私獵を禁ぜられたので復た禁野と稱せられたが、其稱残つて本地の村名となつた。此地は今も尙ほ秋冬の候に至れば、鴻雁の族群り來り、獵區は所々に設られて其捕獲は少くないと云ふ。

交野は獨り歴代天皇の御獵場たりしのみでない、惟喬親王もしばく遊び給ひし所で、一千年後の今日に至つて其の名は嘖々として人口に膾炙し、無二の歌枕となつて、其の詠ぜられたもの實に無數に上

つて居る。

後撰 あふ事の交野へとてぞ我は行く 身を同じ名に思ひなしつゝ 藤原爲世

新古今 み狩する交野のみ野に降る雲 あなかまたき鳥もこそ立て 崇徳院

同 またや見ん交野の御野のさくら狩 花の雪ちる春のあけぼの 藤原俊成

同 あふことはかた野の里の篠の庵 しのに露ちる夜半の床かな 同

文治六年女御入内御屏風

和歌 急ぎ立つ日なみの御狩雪ふかし 交野のみ野の冬のあけぼの 藤原定家

一一、淀と八幡

順路

淀停留場——淀城址——八幡——石清水八幡宮——八幡停留場——(行程約五軒)

(附近) 巨椋池、洞が峠

淀城址 京都府久世郡淀町、淀停留場西側

淀町は久世郡に屬し木津・桂・宇治等諸流の相會する所にある。町の北西にある淀城址は東西五百米南北三

百米同字形をなして石壁壕池は今尙舊態を存して居る。永正の頃は細川氏の屬城で京師の要害であつた。天正の末には豊臣秀吉之を修築して寵姫淺井氏を此所に置き、淀殿又は淀君といつたことは人の知る所である。元和九年徳川氏が伏見城を毀ち、其の遺材を以て之に増築して松平越中守定綱を置いた。享保八年に至り稲葉丹後守正知が十萬二千石を領してこゝに居り、子孫代々世襲し以て大政維新に及び廢城となつた。城址中に正知を祀る稻葉神社がある。

淀の城廓の汀には水車があつた。淀君がこゝに住むやうになつてから、城中に其の用水を引いたといふことである。之れ即ち人口に膾炙せられたる淀の川瀬の水車である。

八幡 京都府綴喜郡八幡町

昔は八幡の莊といつたが今は八幡町といふ。其の西を橋本、北を大谷、南を町、木津川の口を川口と云ふ。

天正の末年淀築城のころ木津川を川口より西に轉じて、男山の北崖で淀川と相會することにした。京阪沿線の一都市で、昔は對岸天王山と相對して要害の地であつた。

ほととぎす八幡山崎なきかはす 聲の中ゆくよどの川舟。

橋本の地名

奈良朝の頃僧行基こゝに橋を架し後久しくすたれてゐたが、文祿の役に豊臣秀吉兵を朝鮮に出さうと

したとき、輜重運輸の便をはかり山口玄蕃頭等に命じて橋梁をこゝに架せしめた。其の長さ百八十間、廣さ五間、橋柱百三十八本、柱脚地に入ること丈餘橋銘は藤原惺窩の撰になつたものであつたが、後洪水の爲に流失して、空しく其の地名に名残を止めて居る。今は渡船によつて山崎との連絡をとつて居る。

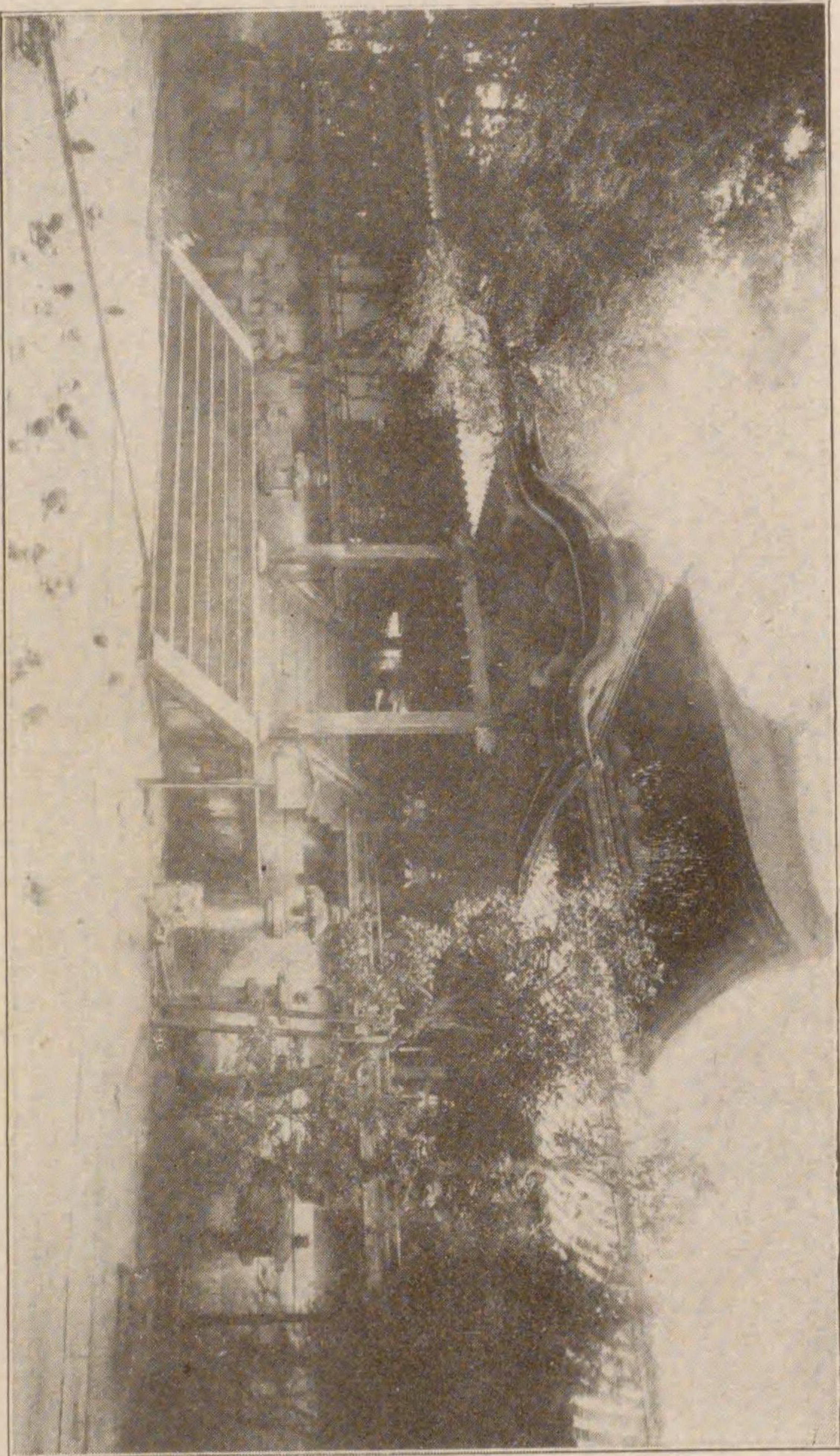
男山 京都府綴喜郡八幡町

男山は一に雄徳、又丈夫、牡にも作る。八幡宮鎮座の處よりして八幡山ともいふ。高頂鳩の峰は八幡町の西に當り海拔一四二米である。南は延びて洞が峠となり、北は斷絶して淀川に臨んでゐる。對岸天王山と淀川を隔て、相對峙し京師南西の關門をなして居る。

天王山と同一地質で古生層の殘壘である。故に此の隘路が溢水の爲に切開かれたことがわかる。地は甚だ眺望に富み、東方に京都盆地の南部を俯瞰し、殊に巨椋池の様子は手にとる様に見える。

古戰場としての男山

要害の地にある男山は度々戰陣の巷と化した。元弘三年官軍赤松則村が男山及び山崎を略して京軍に對陣し、延元三年には官軍北畠顯信が男山に築塞して足利勢を拒いだ。又正平七年には後村上天皇親しく諸軍を督して男山に臨み給ひ北畠顯能・楠木正儀・和田正忠等伊勢・河内・和泉の兵を以て之に従つたが



— 八幡造 — 石清水八幡宮本殿

古は石清水八幡宮といひ、後男山八幡宮と改められたが、現今又石清水八幡宮と改稱された。清和天皇の貞觀元年奈良の大安寺の僧行教が、宇佐八幡を勸請して創建したもので、古來伊勢大廟に次いで朝廷の御尊敬厚く、國家安危にかゝる大事の際は必ず奉告祈願せられた。天元二年（九百五十年前）圓融天皇の行幸ありし以來御歴代幾十度の御幸があらせられ、近くは文久三年孝明天皇が親臨して攘夷のことを奉告し、節刀を將軍家茂に授けんとし給ふた。

社殿は度々火災にあひ、現存のものは寛永二年に徳川將軍家光の造營にかゝり、後元祿年中に將軍綱吉の修理したもので、特別保護建造物である。鍍金の雨樋は長さ約廿四米幅約二米厚さ五十糎天正年中豊臣氏の寄進にかゝり天下無双の名物である。

何れも官軍の不利に終つた。其他山崎合戦・明治戊辰の役等、この地の利用せられたことは人のよく知る所である。

石清水八幡宮

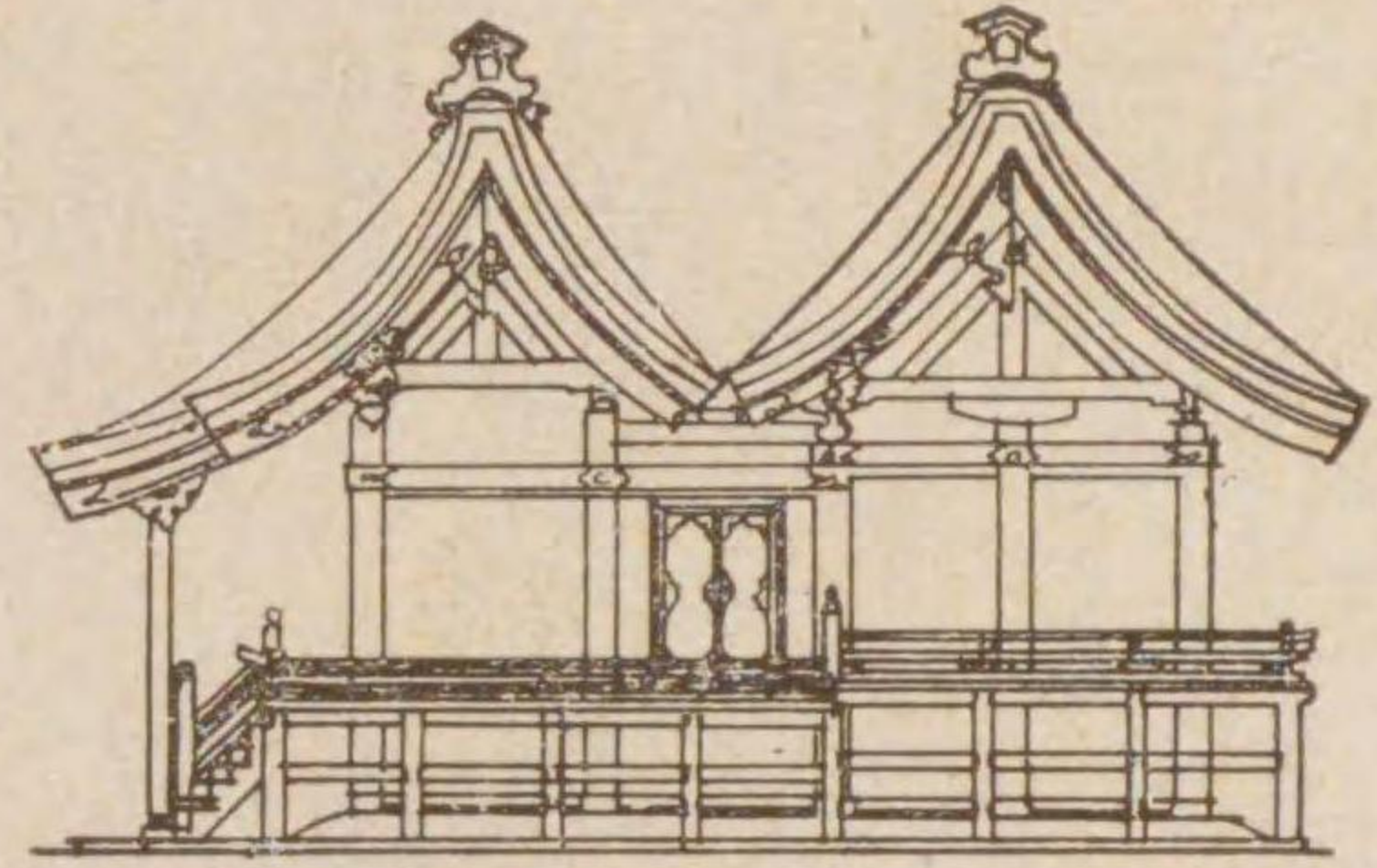
八幡町男山の頂上鳩峰

——社格、官幣大社——祭神、八幡太神（行教は應神天皇なりといふ）。
大帶姫命（神功皇后）・比咩大神——

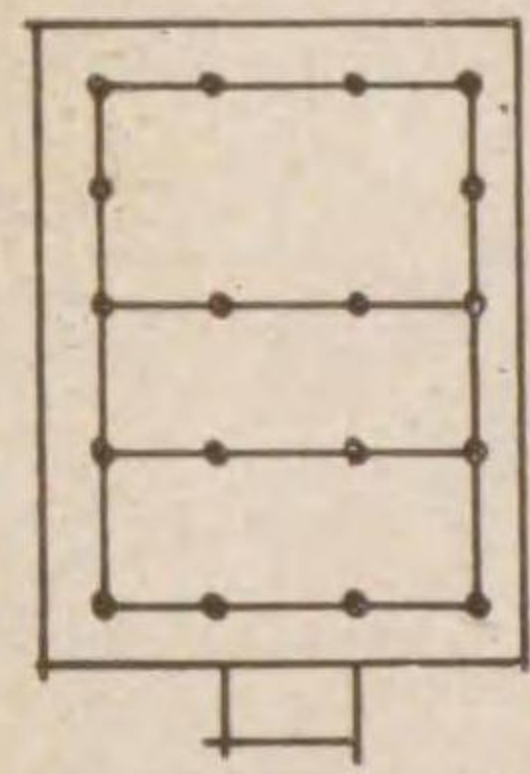
八幡造

神明造の前面に、深さ一間の細殿を設け合ノ間で接続したもので、兩者の接續點に雨樋を架けてある其構造手法から見ても、流造や春日造等と共に平安初期に完成せられた形式であらう。

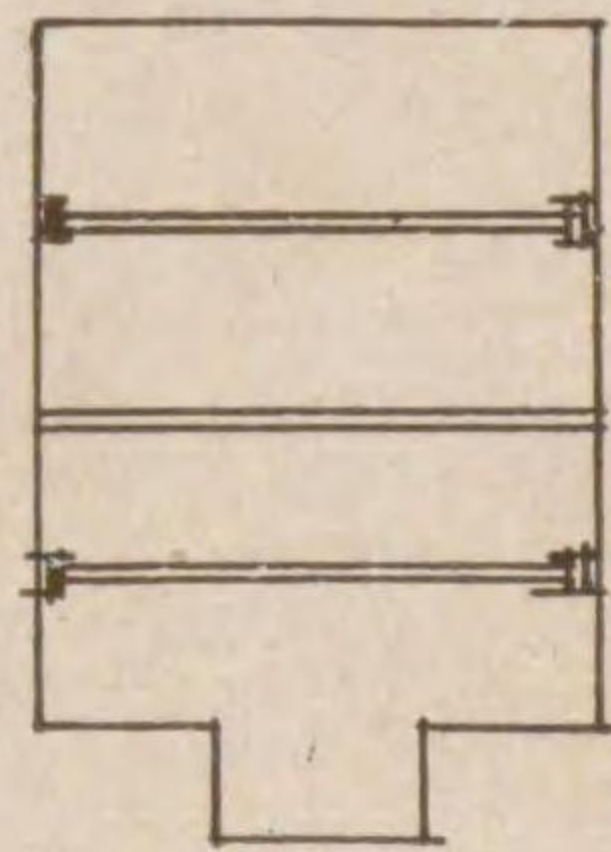
（二九四頁流造、四三四頁春日造、五五二頁神代造参照）



八幡造側面



八幡造平面



八幡造屋根伏

又彼の源義家は此の神を信仰して武勇を輝し、頼朝は天下の權を握るに及んでは厚く崇敬し、諸國に別宮を置いてから源氏の武士皆これを氏神としたので、六十餘州至る所に八幡社を見るに至つた。

太子阪

境内松柏繁茂し其の間又楓樹多く秋景は殊に美しい。二の鳥居の傍に太子阪がある。昔聖徳太子を祀りしより此の名があるといふ。毎年一月十五日から十九日まで厄除祭がある。参詣者多く矢をいたゞいてかへる例がある。九月十五日の男山祭は日本三勅祭の一人で壯嚴を極めて居る。

石清水社

東門を出て坂路を下る八九百米の所にある。天御中主神を祀る。その側に清泉がある。岩石の間から湧出して萬古涸れない。石清水の稱はこゝから起つたものであると。

男山ケーブル

男山ケーブルは京阪電車八幡停留場に隣接してゐる八幡口から、深緑の山腹をきり開いた五分の一の傾斜を昇つて行く。その不動谷の山峽に架けられた高架鐵橋は、高さ四十四米長さ百一十一米、全部鐵材で造り上げたむしろ不氣味なやうな高い橋梁ではあるが、その下は老松古杉鬱蒼として全く清澄そのものである。こゝを登ると第二の隧道を通つて突如カラリと打開けた山頂男山驛に至る。片道所要時間僅に三分、亘長四百米、高低差九十米、約五十萬圓の建設費を要し、其の大正十五年六月開通以來滿一ヶ

年にして約四十五萬の乗客を算して居る。

附近

巨椋池 京都府久世郡小倉村

周圍凡そ十二軒京都盆地の中で最低地に屬する。水深は一・七米に過ぎない。附近一般に土地卑濕で多數の河流が網狀をなして亂走せると共に一大瀦水を見るべく、此の盆地の排水はまだ十分でなくて、過去の化石湖ともいふべきものである。昔は宇治川の流れがこれに注いだもの。豊公桃山城を築く時堤防を以て川を斷ち、大和街道を通じたといふ。池には蓮・蓴菜ジュンサイが多い。

順慶日和見の洞が峠 京都府綴喜郡八幡町

男山の南凡四軒、八幡町の南端で山城・河内の國境をなしてゐる。綴喜郡から北河内郡に通ずる山隘で標高七十米。天正十年六月大和國主筒井順慶が兵を嶺上に屯し、山崎合戦の日和見をした所として人口に膾炙せられてゐる。因に順慶の首塚は京都建仁寺にある。

峠の北西に禪宗の修業所として名高い圓福寺がある、此の寺に日本三達摩の一と稱せられる有名な達摩像が藏せられて居る。

三、伏見、深草

(地圖は宇治の茶どころ参照)

順路

- 一、伏見停留場——伏見町——御香宮——桃山兩御陵——乃木神社——桓武天皇陵——仁明天皇陵——深草十二帝陵——安樂壽院——城南宮——城南宮道停留場——(行程約十二軒)
- 二、伏見停留場——伏見町——御香宮——桃山兩御陵——乃木神社——桓武天皇陵——仁明天皇陵——伏見稻荷——稻荷停留場——(行程約十三軒)
伏見から宇治へ行くには(三)の行程がよい。但黄檗山以下の記事は「宇治の茶所」参照
- 三、伏見桃山停留場——伏見町——御香宮——桓武陵——桃山城趾——桃山兩御陵——乃木神社——御陵前停留場——黄檗停留場——黄檗山萬福寺——御室戸寺——宇治町——宇治橋(附橋小島崎)——橋寺——平等院——縣神社——浮島——宇治停留場——(行程約十二軒)
(附近) 雀の御宿

伏見市

京都府紀伊郡

淀川水路の可航終點

市は京都の正南凡八軒、中古は誠にさびしい村里であつたが、伏見上皇が此處に持明院を經營し仙洞となし給ふてから漸く拓けて、衣冠輻湊の區となつた。後文祿三年豊臣秀吉が桃山城を築き、淀川を利用して大阪に通じ、以て中國・西海の諸侯を控制するやうになつてから、從來淀川水路の可航終點であつた鳥羽の地位は此の地に移り、忽ちにして政事上・軍事上・商業上の中心となつた。爾來徳川氏の時代を通じて西國諸侯參觀交代の要衝となり、物貨集散の巷となつて久しく政治經濟の要地であつた。

維新後東海道線の開通と共に一時衰退の兆を呈したが、水陸の地の利は工業の發展に曙光を與へ、加ふるに京阪電鐵の開通と、明治大帝の御陵を此の地に定められて以來、市況は再び活氣を呈するに至つた。人口三萬一千(昭和五年十月一日)、清酒の産地としてもよく知られて居る。

寺田屋

伏見町南濱に在る。元旅人宿であつて、文久二年四月二十三日薩藩の過激攘夷論者有馬新七外八士が同藩の溫和派と戦ふて死んだ所である。碑を建て、之を彰し薩摩九烈士遺蹟志と題して居る。篆題は有栖川熾仁親王の御染筆、碑文は川田剛の撰である。

御香宮 京都府伏見市、伏見桃山停留場東凡二百米

社格、府社——祭神、神功皇后——

伏見一郷の鎮守

停留場より東凡二百米、延喜式に所謂御諸神社即ち之である。此の社初め舊廳舎兵營の地に在ったが、伏見築城の時之を大龜谷に移した。慶長十年（約三百年前）徳川氏この地に復舊造營して伏見一郷の鎮守とした。清和天皇貞觀四年九月境内に清泉湧出して香四方に薫り、病人がこれを服むと病が忽ち癒つたので御香宮と稱へたといはれてゐる。祭神は神功皇后であるとの事であるが確たる徴證がない。豊太閤征韓の役勝利を祈つた社で社殿は壯麗である。

表大門は徳川宣房公の寄進で伏見城の追手門と傳へ特別保護建造物である。

桓武天皇（五十代）柏原陵 京都府紀伊郡堀内村、伏見桃山停留場北東約千五百米

初め深草山柏原にあつたが、大同元年水害の爲に毀損し伏見山杉原に移した。然るに文祿年間豊臣秀吉伏見築城の時、御陵も全く城中に入つたため、密に延暦寺主に謀つて陵をその寺中に移したが、その後所在不明となり、明治十三年古墟を發見して此の地を制定し修理を加へられた。東西六十間南北五十間。

桃山城址 京都府紀伊郡堀内村

秀吉の築いた桃山城は伏見山に據り、大龜谷を北限として西は伏見町、南は宇治川を帯び水南に向島の一塞を置き、東は木幡山を籠絡する雄大なるものであつた。今の明治天皇御陵附近の地は二十五萬の工夫を費したといはれる本丸・松丸・名古屋丸など豪奢、宏壯、輪奐の美を極めた建物のあつたところで御陵の御寶壙のある邊は本丸千疊敷のあつた所である。

關が原の戦に鳥居強右衛門元忠等が、浮田・毛利・島津・鍋島等數萬の兵を引受けて名譽ある最後を史上に止めたのもこの伏見城である。

豊臣氏滅亡の後徳川氏により全部毀壞され昔の倂を偲ぶことが出来なくなつたが西本願寺の大玄關・客殿・竹生島の都久文須麻神社本殿及觀音堂の堂宇、豊國神社唐門・御香宮表門・大徳寺唐門、其の他諸所に散在して居る建物によつても、雄大絢爛たる當代の片影を認めることが出来る。

其の後墾きて畑となし桃樹を植ゑしより桃山とよばれるに至つた。今も尙金箔を押した瓦が折々發見せられる。

古く藤原時代には、此の地に伏見長者藤原俊綱の山莊があつた。其の後伏見・後伏見・光嚴・光明・崇光帝皆持明院の仙洞として伏見殿に宮居し給ふた事實もある。

地震加藤

加藤清正が秀吉の勘氣を蒙りし際にも關はらず、大地震と知るや諸侯に先んじて出頭し、秀吉を守護

し、其の誠忠を認められたのは、この城に於ける歴史上の美談である。

明治天皇（百二十二代）伏見桃山陵

京都府紀伊郡堀内村、伏見桃山停留場東約千五百米

明治四十五年七月卅日崩御、御壽六十一、大正元年八月六日御陵所を現在の所に御治定、八月十三日殯殿に移御、二十七日明治天皇と御追號、九月十三日青山葬場殿にて御式を行はせられ、十四日夕御寶壙に歛め給ひ十五日早朝了はる。此の日伏見桃山陵と御命名あらせられた。陵域東西七十間南北八十五間、上圓下方三段造り、圓塚の高さ二十一尺、御玉垣は二重、内面御玉垣の正面は石柵他の三面は石垣、此の長さ東西五十間南北五十五間、御陵道を初めとし其の規模の宏大なること他に比を見ざる所である。京阪電車宇治線御陵前停留場より北方約五百米、伏見桃山停留場より東一・五軒の所にある。

昭憲皇太后（伏見桃山東陵）

京都府紀伊郡堀内村

大正三年四月九日沼津御用邸にて御重態に渡らせられ、同四月十一日青山御所還御の上崩御、御壽六十六同五月二日殯殿に移御、九日昭憲皇太后と御追號、二十四日夕代々木にて御式あり、二十五日夕御寶壙に歛め奉る。此の日伏見桃山東陵と御命名あらせらる。明治天皇御陵に並び東方一段低い所にある上圓下方三段の圓塚で、形式は桃山陵と同じであるが規模は稍小さい。

乃木神社

京都府紀伊郡堀内村、伏見桃山停留場東約一軒

伏見桃山東陵より南西四百米の所にある。大正元年九月十三日明治天皇の靈柩青山御發輦の際殉じ奉りし乃木將軍を祀つた社である。西側には共に殉じた將軍の令室を祀つた静魂神社がある。

境内には日露戦役の戦利品を初め、旅順攻撃の際將軍の居住せし茅屋の建物を移築して記念として保存し社の西には偉人の幼時をしのぶ昔のまゝの乃木氏長府舊邸宅を移し、一般に觀覽せしめてゐる。

因みに當神社は神戸の富豪村野山人が私財を投じて建立したものである。

うつし世を神さりましたし大君の、

みあとしたひて我はゆくなり。

乃木大將の辭世

出でましてかへります日となしときく、

今日のみゆきに逢ふぞかなしき。

同 夫人の辭世

仁明天皇（第五十四代）深草陵

紀伊郡深草村大字深草

嘉祥三年崩御、遺詔によつて御大葬は極めて質素に行はれた。陵は今丘の形をなさず、長方形の小さな陸をめぐらしてをる。周圍百三十間。天皇は嵯峨天皇の第三皇子、御母は檀林皇后橘嘉智子である。極めて御聰明で學を好み、書をよくし、兼て音楽に通じ、射藝・醫藥亦ほ々練習し、獄をゆるうし、窮乏をにぎはし

天下大におさまった。御在位十七年、深草山陵に葬り奉ったので、世に深草帝ともよばれてゐる。

深草の法華堂

紀伊郡深草村大字深草、師團前停留場より東へ約一軒

深草の十二帝陵

後深草天皇外十一帝の御遺骨を葬り奉ったもので、法華堂の境内にある。規模狭小、全兆域面積三百四十坪五合四勺、只一基の寶塔があるのみである。

後深草天皇（第八十九代）深草北陵

紀伊郡深草村大字深草

寛元四年御即位、御歳僅に四歳。御在位十三年改元せられること五、正元元年後嵯峨上皇の意により位を皇太弟恒仁王に傳へ院政を聽き給ふた。嘉元二年崩御。

伏見天皇

（第九十二代）深草北陵

同域

正應元年御即位、永仁六年位を後伏見天皇に譲り院中に政を聽き給ふた。延慶元年花園天皇即位し給ふた時再び院中に政を聽き、正和二年十月機務を後伏見上皇にゆだねたまひ、薙髮して伏見殿に移られ後又持明院に移られ、文保元年崩御、約六百餘年前。

天皇和歌をよくし書に巧みであらせられたので、藤原爲兼に命じて萬葉集以後の和歌を撰ばせられた。

玉葉和歌集と名づける。

後伏見天皇（第九十三代）深草北陵

同域

永仁六年御即位。正安三年位を皇太子邦治親王に譲られた。在位僅に三年。それは大覺寺派が皇位を望まれた結果である。天皇は二條富小路殿に移り新院と稱された。延元元年崩御、凡そ六百年前。

天皇の御父伏見天皇は龜山天皇の御系統を措いて、天皇をお立てになつた。後宇多天皇は大いに之を憤り、伏見上皇に對して快からず思召された。

後深草、伏見上皇も止むを得ず、時の北條貞時も亦兩統十年交立の議を奏したので、朝議是に御決定。

後伏見帝の御讓位となつた。當時後深草、龜山、後宇多、伏見、後伏見の五上皇がゐらせられた。

後小松天皇（第百代）深草北陵

同域

北朝第六代、明德三年吉野朝と媾和。父子の禮を以て後龜山天皇から神器をお受けになり、永徳二年十二月御即位。御年六十六。足利義滿將軍であつた。應永十九年位を皇太子に譲り、政を院中で聽かれた。永享五年崩御。五百年前。

稱光天皇（第百一代）深草北陵

同域

應永二十一年御即位。御幼少であらせられたので、萬機は御父後小松上皇によつて決せられてゐた。將軍は義持であつた。當時明の使節屢々來朝、幕府に修交を迫つたが、義持は之に應じなかつた。

應永二十六年高麗の戰艦千六百餘來寇、九州近海を騒がせた。國事漸く多端。政は依然上皇の手にあ

り、足利氏の跋扈其の極に達する。天皇はその間にあつて常に御憂悶あらせられた。正長元年崩御、御壽二十八。

後土御門天皇（第百三代）深草北陵 同域

寛政六年十二月御即位。應仁元年山名宗全・細川勝元に黨合して二十餘萬の大軍相争ふこと十有一年天下麻の如く亂れ、皇室式微最も甚しい時であつた。長くも皇室の御料さへ少かつた。天皇は之を恨みて出家の思召があり、尙又東宮に御讓位されようとしたが、幕府の献上する費用乏しく、それさへ出来なかつた。御在位三十六年。明應九年崩御、四百三十年前。

後柏原天皇（第百四代）深草北陵 同域

明應九年御年三十七で御踐祚、當時應仁亂後朝廷の御衰微その極に達し畏くも即位の大禮を行はせ給ふことが出来なかつたが、大阪本願寺の僧光典その費用を奉つたので永正十八年、御踐祚の後二十二年目に漸く行はれたといふ。大永六年崩御、凡そ四百年前。

後奈良天皇（第百五代）深草北陵 同域

大永六年四月御踐祚、使を四方に派して大禮の費用を募られたが北條氏は五萬疋、今川氏三萬疋、朝倉氏一萬疋、白山は百疋を、次で天文五年大内義隆其の總費用二十萬疋を上納して僅に即位の禮をあげられる事が出来たといふ。誠に畏れ多い話である。此の年天台宗の徒日蓮宗の徒と争ひ京都は火災にかかつて市街の大半は延焼、皇室の式微又極度に達した。紫宸殿の築地破れて三條橋上から内侍所の燈火

を見るべく右近の橋の附近には毎日茶を賣るものがあつたといふのはこの時代の事であつた。

御在位三十一年。弘治三年崩御。凡そ三百七十年前。

正親町天皇（第百六代）深草北陵 同域

弘治三年御歳四十二歳で即位。當時騷亂久しく公武の威令行はず大内の供御渴乏してゐた。毛利元就資を献じて御即位の大禮を挙げさせられた。永祿十二年織田信長、宮闕を御修理して元龜三年に竣つた。御在位二十九年。天正十四年十一月位を皇太孫にゆづつて太上天皇となられた。文祿二年崩御、凡そ三百四十年前。

後陽成天皇（第百七代）深草北陵 同域

天正十四年十一月御即位、御年十六。翌年豊臣秀吉の請によつて聚樂の第に行幸。秀吉簾下に諸大名を盟はせて御料を内裏仙洞に奉つた。皇室の尊嚴漸く復舊の感があつた。文祿元年再び聚樂第に行幸あらせられた。慶長九年には徳川家康御料を献じ一萬石をその額とした。元和三年八月崩御、凡そ三百年前。

後光嚴院（北朝四代）深草北陵 同域

觀應三年八月足利尊氏天皇を迎へ立てた。御年僅に十五。南朝の諸將屢々攻め來つた爲め、所々に御移遷。在位十二年。

後圓融院(北朝第五代) 深草北陵 同域

應安七年十二月御即位、御在位十一年。後光嚴院の第二皇子。位を皇太子^{モトヒト}幹仁親王に御讓になり、院中に於て政をきかれた。明徳四年崩御。

安樂壽院

京都市電伏見線、城南宮道停留場西六百米

奈良電鐵線、城南宮前驛西凡二百米

——宗派、新義眞言宗智山脈——本尊、藥師如來——

鳥羽・近衛兩天皇御陵寺

保延三年(約八百年前)鳥羽上皇の城南宮を淨刹として、覺行法親王を導師たらしめられた寺である。中世以後甚しく衰頽して居た上屢々兵火に罹つて全く昔の佛は無くなつてしまつた。天正年間豊臣秀吉之を嘆き寺領五百石を寄せ、諸堂及兩塔を復舊した。然るに其後又兵燹をうけて今日に至つた。

本御塔はもと五重の塔であつた、今其の中に阿彌陀佛を安置し、其の下に鳥羽法皇宸筆の法華經が藏めてある。

國寶。絹本孔雀明王の像・同普賢薩像・阿彌陀來迎圖・木彫阿彌陀像。

鳥羽天皇(第七十四代)安樂壽院の陵

保元元年七月天皇此所に崩せられた、其夜直に納棺安樂壽院御塔の下に葬り奉つて、之を山陵に擬し

たのである。永仁と天文との兩度に火災を蒙つて焼失し今の御堂は文久の御造營である。高さ三米、方一・八米。

天皇は堀河天皇の第一皇子で、嘉承二年七月五歳で御即位遊ばされた。天皇の御世には源義家・大江匡房等の名臣があつたが、宮内に藤原氏の專横があつて後年御親子間に間隙を生ずるに至つた。

近衛天皇(第七十六代)安樂壽院南陵

鳥羽天皇の第九子、保延五年五月(約七百九十年前)御誕生、永治元年僅に三歳で御即位遊ばされた。在位十五年の間鳥羽上皇政治をみそなはせられた。天皇の崩御が原因の一つになつて後年保元の大亂の起つたことは有名な話である。

久壽二年八月船岡の北西の野で火葬し奉り、二日御骨を拾ひ奉り八年の後美福門院の御塔内に葬り奉つたのが現在の多寶塔で、安樂壽院兩度の火災を免れ豊臣秀頼が修理し奉つたもので、陵としての木造建物中最古のものである。高さ約三十米、礎磐方八米。

白河天皇(第七十二代)菩提院陵 鳥羽天皇陵の西凡そ二百米

大治四年崩御、御火葬の後、金銅の壺におさめて香隆寺^{カウリウジ}に渡し奉つた。後二年鳥羽殿^{トバノミヤ}の三重塔に納め奉つた。陵は今八間半平方の低い塚で周圍に堀があり、字塔の壇又は塔の堀といつてをる。昔の三重塔に因んだものであらう。

天皇は後三條天皇の長子、父天皇の志をついで皇權恢復につとめ藤原氏の勢漸く衰へた。位を堀河天

皇に譲られたのちも尙政を院中に見給ひ、いはゆる院政の基を開かれ、崇徳天皇に至る三代五十年間院宣を以て天下に號令された。嘗て「天下意の如くならぬものはただ鴨川の水、双六の采、山法師の三つのみ」とのたまひ、篤く佛法を信じ給ひ、經を寫し、寺を建て、佛像を作り給ふこと多かつた。

眞幡寸神社

紀伊郡竹田村、京都市電伏見線、城南宮道停留場西凡そ千五百米
奈良電鐵線、城南宮前驛西凡千米

社格、府社——祭神、息長帶日賣命(神功皇后)・八千戈神——

方除けの神、城南宮

御神靈は二神の靈代と、御征韓當時の御靈と傳ふものを鎮祭してある。弘仁年中(約一千百年前)官社に列せられたが、後伊勢以下の七社を合祀されて、世々城南總社或は城南宮とも稱する。後鳥羽天皇の皇居が此の附近にあつたので、承久の亂の起る前に城南宮の流摘矢に事寄せて、官兵をここに集められたことがあつた。鳥羽・伏見の役の際には、幕軍の京都に入らんとしたのを薩長二軍がここで喰止めた。

家相や日取の悪かつた時に住宅を造つた者が此のお宮に詣つて祈ると、之を打消して家内安全に仕向けて下さると云ふので、參詣者が年中絶えない。家を造らんとするものが先づ詣つて良相を占つて貰つて後にすると猶良いさうである。

鳥羽離宮の址は此の附近竹の山にあり、當時は境域百餘町に及んだと傳へられるが、今は悉く田園と化してしまつた。

附近

雀のお宿 深草停留場の東

二百餘年の古い口碑をもつてをる雀のお宿、大小三百にもあまる瓢を、掃除の行き届いた室の内、軒の下、庭の先に處せまきまでにつりさげ、其各々に數羽の雀が巢食ふ。晝は餌を求めて何所へか飛びだすが、夕方になると何十、何百と歸つて来る。一向人をおそれない。

詩趣に富んだ雀のお宿は、宮様方のお成りもあれば、大臣・大將も立ち寄る。それ等の人々の名を記した瓢も見受けられる。久邇宮殿下の賜された瓢も其中にまじつてあるのが見られる。

四、京のみやこ

- (一) 京都市概観——千年の帝都——
- (二) 東山南部——稻荷から豊公廟まで——
- (三) 東山中部——五條大橋から六波羅密寺まで——

- (四) 東山北部——三條大橋から聖護院まで——
- (五) 中央南部——東寺から二條離宮まで——
- (六) 中央北部——仙洞御所から本法寺まで——
- 加茂から北野まで——
- (七) 北部郊外——花園から、お室まで——

(一) 京都市概観

千年の帝都

京都は京都盆地の北部に位し、我國第五の大都會で人口約七十六萬、桓武天皇以來の帝都で今尙京都御所の所在地、御即位式・大嘗會等の大典の舉行せられる所である。

本市はかく久しい間政權の中心地として文化の源泉として存在してゐた上に、秀麗な山は三方に廻り、清らかな川は町を流れ、名勝舊蹟に富むこと海内第一。従つて四時遊覽客の絶えることなく、全く歴史的都市遊覽的都市として立つてゐるかの觀がある。

一、奠都の理由

1 交通の便なること。延暦十三年の詔に「四方の國の百姓の参り出來んことも便にして云々」とある。思ふに此地は邦土の中央にあり、舊京を前に見て道は四方に通じてゐる。また淀川をへて難波津に出で海外に通じるにも利便である。一方政治上天下に號令するにも極めてよい地に當つてゐた。

2 風景の美なること。同じ詔に「葛野の大宮地は山川も麗しく云々」とある。今これを見るに、東方には「蒲團着て寝たる姿」の東山一帯の丘陵があり、北山・西山の緑もこく、しかも其間の地勢の平坦な中を加茂川や桂川が清く流れてゐる。この優美な自然の内には四季時々の眺の秀でたものゝ頗る多いのは當然である。

3 攻守に利あること。同じ詔に「此の國山河襟帶自然に城となる、斯の形勢によつて新號を制すべし、宜しく山背國を改めて山城國となすべし」と。昔は居城を選ぶに軍事上から地の利を占めることに多大の注意を拂つた。平安京は東に逢阪・鈴鹿・不破の關あり、比叡山其北東に聳え、南は舊京へ通ずるに都合よく、西は大江坂をこえて山陰に出られる。正面の關門には山崎や八幡を控へ、北は亂峯であるから其背を固めるによい。まことに天府の地、神州秀氣の鍾まるところ千載不遷の都といつてよい。

4 長岡京の經營難であつたこと。長岡京が宮殿のまだならない間に、その建議者で且つ實行者の藤原種繼が横死した。種繼は鎌足五世の孫であり桓武天皇の寵任された人材であつたため、彼の死によつてこの事業に一大頓挫を來した。加ふるに財資窮乏の折柄として遷都後十年を経ても、遂に完成の見込が立たなかつた。

5 和氣清麿の奏請。延暦十一年に清麿がひそかに葛野の地を相して都を遷されるやう請ふた。當時清麿は桓武天皇の御生母である高野皇太夫人に仕へ中宮大夫として隠然大勢力をもつてゐた。いよゝ遷都の議が定まると造宮大夫となつて萬事をきりもりすることになつた。

二、奠都と秦氏

秦氏は頗る富裕で其一族は山城各地に廣がつてゐた。平安奠都の際功のあつた藤原小黒麻呂父子は秦氏の姻族であり、又平安京の紫宸殿の地は實は秦川勝の邸宅地で、殿前の右近の橋ももとは川勝邸に在つたことなどから考へると、この遷都に關しては何等かの默契があつたのではあるまいか。

三、都の變遷

平安京は加茂・桂兩川の間にあつて、やや南北に長い方形で羅城^{ラシヤウ}で取巻いて京外の地と區別した。そして京區の地は朱雀大路によつて、これを左京・右京に分けた。この朱雀大路は今の京都市のほと西の端になつてゐる。今ここに中心勢力の推移といふ方面から舊都の發展ぶりを見たい。

1 平安時代 奠都後間もなく住民は左京へ集まり、右京は計畫通りに最初から住民を得ることが出来なかつた。放牧を禁じたり、通路に面して稻を植ゑることを止めたりしたのは其證據である。其結果として市は羅城を超えて左京外に擴まつた。殊に藤原氏が寺などを起す時は皆白河の地を選んだ（白河といふのは加茂川から東山の麓までを指すのである）。だから藤原氏の黄金時代には街は加茂川を超えて白河にまで及び、終に京・白河と併稱し白河の繁昌が却つて平安京を凌ぐやうになつた。

2 平氏時代 平氏は居を洛外の六波羅に置いて奢侈を恣にした。承元以後になつてはその同族の北條氏が、南北兩六波羅探題をおいて京畿を抑制するなどから推して洛外の地が却つて政權の中心であつたことが分る。

3 室町時代 足利義滿が幕府をここにおいてからは、左京の北端の室町頭が政治の中心となり、武家屋敷も自然この附近に集つたので、依然東部が繁榮したもの、街は更らに京北に伸びて右京の大部分は依然として田圃であつた。しかし應仁の亂からは洛中洛外共に殆んど焦土と化して、歌人をして「なれや知る都は野邊の夕雲雀」との嘆をなさしめたほど荒れ果てた。

4 織豊時代 織田信長が勅を奉じて入京してからは、大分秩序も回復した。其後をうけた秀吉は更に市街の復舊や整理に手を着け、まづ市中に散在してゐた寺院を東京極の方へ移し、次で市區を正しくした。街路も秀吉の力によつて多く平安京條坊の制に復つたのである。殊に天正十三年に舊宮址へ聚樂第を築いてからは、この内野一帯は繁榮となり、この第の廢止後も商家がここへ集つて市坊をつくつた。

5 徳川時代 徳川家康が二條城を聚樂の南に築いたので、幕府の諸役所も其附近においた。かういふふうであつたから、矢張西北部の地方が賑やかであつたが、一方東漸の勢も亦止まなかつた。

6 明治時代 王政復古になつてからは、幕府の役所も自然すたれたので、二條城附近が俄かに衰へたのみならず、車駕が東幸するやうになつてからは、所謂堂上の邸宅も東京に移つて昔日の觀がなくなつた。併し京都御所の昔ながらなるあり、又皇室典範によつて天皇の即位・大嘗會などの主な儀式はこ

の京都で行はれることに定まつて居り、帝都の面目には何の變りもない。

關西學術の中心地

古來文化の源泉として立つて來た京都市は、今尙嚴として關西學術の一大中心地たる實を有してゐる。即ち京都帝國大學をはじめ、第三高等學校・京都高等工藝學校・府立醫科大學・京都市立繪畫專門學校、私立では同志社・法政・佛教の各大學があり、恩賜博物館等の設備も整つて居る。

美術工藝の都市

一千餘年間の貴族生活、文化の中心地となつて居た京都は、外來の文物を咀嚼し之を日本化し固有日本の藝術を加味して燦然たる光彩を發揮し、美術工藝の都市として世界に重きをなして居る。殊に西陣の精巧なる織物は佛蘭西の「リヨン」と其技を争ふまでに進歩的なものである。

(二) 東山南部——稻荷から豊公廟まで——

順路

稻荷神社——東福寺——泉涌寺——三十三間堂——養源院——法住寺陵——博物館——豊國神社——大佛——智積院——妙法院——豊公廟——高倉天皇陵——六條天皇陵——(行程約六軒)

稻荷神社 京阪線稻荷停留場前、京電伏見線稻荷停留場前

——社格、官幣大社——祭神、倉稻玉神・素戔嗚尊・大市媛命——

伏見の稻荷

社はもと山上三箇所にあつて上の社・中の社・下の社と云つたが、後世田中神と四大神を配祀して總じて伊奈利神と稱した。秦氏が北山城を經營した時に鎮守の神として、嵐山に松尾神社を建て、此の地に伊奈利神を祀つたのが當社の起原で元明天皇和銅四年、今から一千二百餘年の昔である。稻を荷ひ福を授け給ふ食貨の神で、傳説として有名な餅のまとは本社の縁起を物語つたものである。

平安朝時代伊奈利神が老翁老媪となつて現はれ、佛教を守護しやうと弘法大師に誓はれたと云ふので、大師は朝廷から東寺を賜はつた時、伊奈利神を其守護とせられた。後三條天皇以後屢々天皇の行幸があつた。今の地に鎮座したのは後花園天皇の永享十年である。

稻荷神は米を主食とする我國の食貨の神であると共に又次第に擴充せんとする佛教擁護の神として、朝野の厚い尊信を得たまひ、毎年二月の初めの午の日は初午詣と稱して參拜者が群集雜沓する。本殿は五間社流造、明應三年の建築で、特別保護建造物に指定されてゐる。

伊奈利社

神祇志料に曰く「初め伊呂俱家富み餅を以て的とせるに化して白鳥と成り飛翔して三箇峰の平處にあり稲成り生ひき。事甚だ靈異なるをもつて、伊呂俱之を神として祭り名付けて伊奈利社と云ふ」又傳に曰く「稻荷は元秦氏の祖を祀れるに起る、即ち和銅四年二月九日初午の日秦の忌寸の祖秦公伊呂俱初めて之を祀る」と。

お山の鳥居

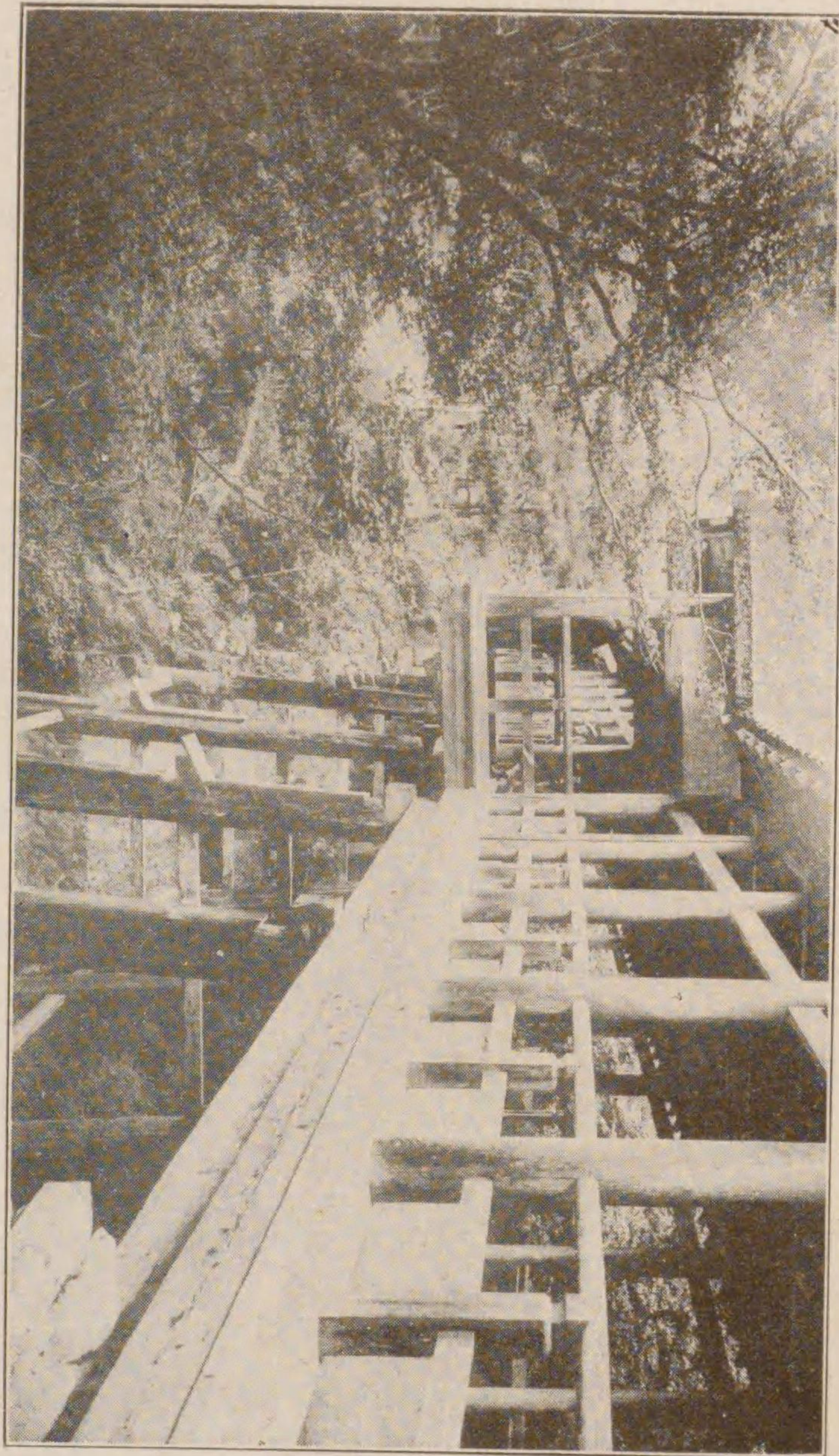
本社の背後から東に登ると上中下のゆはゆる三が峯が並んでゐる。伏見・淀・八幡一帯の眺望がよい。山中には小さい祠が澤山あり、信者の奉納した朱塗の鳥居が道をおほふてゐる。俗に御山めぐりといつて巡拜するものが多い。

神 狐

本社は杉を神木とし狐を神の使としてゐる。狐を稻荷神の使といふには色々の因縁もあるが、支那の諺の社狐と云ふ所から出たものであらう。或はキツは食と古言がよく似てゐるので稻荷神に附會したものであらうか。杉を神木とする所から験の杉といつて、杉の木で吉凶を卜ふ風がある。

荷田春満祠

本社前南方にある。春満は江戸時代の人で秦氏の裔と稱せられ本社の祠官をつとめ、契沖の流を酌んで國學を研鑽し、其弟在麻呂亦國學の造詣深く、其門流に眞淵・宣長・篤胤等の大家を出すに至つた。



——おみぢの通天橋——

東福寺 伏見街道一の橋南（東福寺前停留場の東）

——宗派、臨濟宗東福寺派本山——本尊、釋迦如來——

東大・興福二寺を凌ぐ東福寺

建長七年（凡そ七百年前）藤原道家が頼經・頼嗣等の助を得て物資の限を盡して創立したもので、殿材の一部は支那から輸入されたと傳へられる。殿内安置の釋迦像は五丈に達し之に無數の佛像を配置し、其規模東大・興福二寺を凌ぐと云ふ意味で、其一字づゝを採つて東福寺と名づけられた。當時は武家興起の時代であつたので澹泊を主とする宗風が武士に適して居たゝめ特に尊信を受け、其保護に依つて宗風大いになり堂塔完備して輪奐の美を極めて居た。然るに應仁の大亂に諸堂烏有に歸し秀吉・家康に因つて復舊されたが明治十四年の失火に因つて中心建物を失ひ、未だ舊觀に復することが出来ない。

保護建造物

三。門。鎌倉時代の建立と傳へられるが、其の様式手法は室町時代（應永年間）のものである。何れにしても我國禪刹三門の最も古きものである。全體の格好雄大で釣合も極めてよく、細部の組物も巧妙である上、閣上の中尊釋迦如來・十六羅漢・鏡天井の天女等何れも美術的價値の十分認め得べき作品をもつて充されてゐる。

僧。堂。撰佛場と稱し當寺の假本堂である、貞和二年再建。
月。下。門。四脚門、文永年中此處に移建されたと傳ふ。
浴。室。單層切妻造年代不祥。
東。司。僧衆の便所。
愛。染。堂。八角圓堂で塔頭萬壽院にある。
鐘。樓。重層入母屋造、萬壽院にある。前者と共に室町時代の建造。

什寶

畫家明兆は當寺にあつて殿司の職を勤めて居たので、兆殿司テウヂンシと稱せられ其遺品が澤山ある。涅槃像の大幅は特に貴重せられ、毎年三月十五日之を拜まんと善男善女が殺到する。其外、開山聖一國師の像一幅、東福寺莊園文書七通、無準像一幅、聖一國師度牒戒牒各二幅は何れも國寶に指定されて居る。

陵墓

九。條。道。家。基。當山開基の墓で山門より南東二百米山中茶園の中にある。
九。條。兼。實。墓。佛殿の東二百米にあり内山廟と云つてをる。
仲。恭。皇。天。陵。第八十五代九條陵、山門より南東二百米の山腹。
仲恭天皇陵は一に東福寺山陵ともいふ。周圍百四十五間の圓墳。

海内各寺の上班

空海が此の寺を開いた時は法輪寺と言つたが、文徳天皇の朝に藤原緒嗣が神修上人のために此の寺を修理

天皇は九條廢帝とも申す。順徳天皇の第四皇子、承久三年（約七百十年前）四月即位、御年四歳、後鳥羽上皇北條氏討伐の軍を起したまふや、義時は弟泰時に命じ兵十九萬をもつて京都に迫り、天皇神器を棄て、難を九條院に避けたまふた。在位僅かに七十餘日、文暦元年五月崩去。壽十七。明治三年追諡して仲恭天皇と申し奉る。

皇嘉門院陵 前同所

兆殿司の墓 佛殿の東南二百米、藤原俊成墓と列んでをる。

通天橋の紅葉

橋は法堂と祖堂との間の幽溪に架かつて居る。この溪の兩邊に楓が繁つて通天の紅葉といはれ甚だ幽邃である。通天橋は桁行十三間餘、梁行およそ二間で樓蓋がある。初め谷間があつて祖堂へ參拜するの不便であつたため架けたらしい、今のものは豊臣秀頼の修造したものと傳へられてゐる。

泉 涌 寺 大和大路停留場東千六百米、京阪鹽小路停留場南東千四百米

——宗派、眞言宗——本尊、聖觀世音——

して仙遊寺と改めた。寺内の堂の傍に清泉が湧き出るので、順徳天皇の朝に當寺を再興した俊苻律師は元の寺號を改めて泉涌寺と稱した。

四條天皇が當寺を葬所とせられて、ついで光嚴天皇をここに火葬し奉った。これが泉涌寺帝陵の始めで、其以後殆ど五百年明治の初めに至るまで、數多の天皇の火葬所・御陵墓を此所に置かれた。月輪十二帝陵をはじめ數多の御陵がこれである。

靈妙殿には當寺に葬り奉った天皇の御尊牌が安置され、その扁額靈妙殿は後西天皇の宸筆である。夢の浮橋は源氏物語に依つて世に知られ、近傍の南鳥邊野と共に世の無常を思はしめる。

慶應元年當寺は朝廷から海内各寺の上班に列せらるる旨仰せ渡された。

一、月輪十二帝陵

寺の東方山腹にあり、四條陵又は我禪房陵ともいふ。陵は丘の形をせず、九層以下の石塔があるのみで、十二帝同域に鎮まり給ひ、兆域合して周圍八十間五分、御石塔の前に唐門透廊を設け、その正面は廣庭で、入口に塀重門がある。

四條天皇陵（第八十七代）後堀河天皇の第一皇子、貞永元年十二月（約七百年前）御年二歳にて御即位。天皇の外祖父藏原道家攝政し奉る。仁治三年正月宮廊にて滑走の御遊戯中顛倒して崩御、御年僅に十二。高さ十四尺の九重塔下に葬り奉る。

後水尾天皇陵（第八十八代）陵は九重の石塔を建て周圍に土壘を築き石柵を繞らしてある。後陽成天皇

の第三皇子、慶長十六年十六歳にて御即位、慶・元兩度の東西の大戦争は天皇の御在位中に行はれたが間もなく四海統一に歸し、宸襟を安じたまふ間もなく徳川氏の不臣の行動益々甚しくなり、御憤の結果秀忠の外孫に當らせらるゝ、明正天皇に御位を譲らせられ、政を院中に聽き給ふこと五十一年にして崩御、御年八十五。

明正天皇陵（第九十九代）高さ十六尺の九重塔下に葬り奉る。後水尾天皇の第二皇女、御母東福門院は秀忠の女である。寛永七年（約三百年前）御即位、御年八歳。徳川氏の保護厚く御調度の麗はしいことは前代に其比を見ないと傳へられる。天皇の御在位中は幕府の威權其極に達し、全國の諸侯は其願使に甘んじて慥伏して居た。鳥原の亂、諸侯參觀交替の制確立、煙草の傳來等があつた。在位十四年、元祿九年十一月崩、壽七十四。

後光明天皇陵（第一百代）高さ十七尺の九重塔下に葬り奉る。後水尾天皇第三皇子、寛永二十年（約二百九十年前）御年十一歳にて御即位、天資英明常に幕府の專權を惡ませられた。幕府も亦ひそかに御父帝と共に之を恐れ且つ忌み奉つてゐた。正保二年十一月幕府の強請に因り家康の祠に東照宮の號を賜はつた。同時に久しく中絶してゐた伊勢の奉幣使を復興せられた。慶安四年家光薨じ、由井正雪・丸橋忠彌の陰謀があつた。天皇が克己の心に富ませられ、常に恐れられた雷鳴下に玉座を移され其癖を矯められたのは有名な話である。承應三年崩御壽二十二。

後西天皇陵（第一百一代）陵は高さ十七尺の九重の御石塔。後水尾天皇の第六皇子。承應三年十一月

(約二百八十年前)踐祚、明暦二年御即位の典を擧げたまふ。在位八年貞享二年二月崩御、御即位の翌明暦三年江戸大火死者十萬八千人を出す。續いて内裏炎上、大地震、水害等の頻出、幕府の奏請に因り寛文三年本意なく御讓位。壽四十九。

靈元天皇陵(第百十二代) 陵は十七尺の石塔婆である。後水尾天皇の第十五皇子、寛文三年(約二百七十年前)御年九歳にて即位、資性温厚にましまし、幕府との御間柄も至極圓滿であつた。従つて公武疎隔のため地方に流離して居た公卿達は漸次召還され、應仁以後荒れ果てたまま容易に恢復しなかつた京都が民家をもつて充さるるに至つた。御在位二十四年、享保十七年八月崩御、御壽七十九。

東山天皇陵(第百十三代) 陵は高さ十八尺の九重石塔である。靈元天皇の第四皇子、貞享四年四月(約二百四十年前)御年十三歳にて御即位、御在位中は元祿奢侈の風、國中に漲り、武人は武を忘れて遊び暮して居た中に、國民の惰眠を醒したものは赤穂義士の復讐であつた。併し一面に狩野常信・土佐光起(ハナフサイツテウ)・尾形光琳等の畫家を出し、林信篤・荻生徂徠・伊藤仁齋・新井白石・室鳩巢等の學者の出現を見た。寶永六年崩御、壽三十七。

中御門天皇陵(第百十四代) 陵は十九尺の九重の塔、東山天皇の第五皇子、寶永七年(約二百二十年)前)御即位、八代徳川吉宗民政に意を用ひ國內よく治つた。之を享保の治と云ふ。水戸の大日本史は一部此の時代に完成した。洋書を讀む禁令が解かれたため、國民は漢文に因らずして直接外國の事情を知ることが出來た。在位二十六年、元文二年四月崩御、壽三十七。

櫻町天皇陵(第百十五代) 陵は十八尺の九重の塔。中御門天皇の第一皇子、享保二十年十一月(約二百年前)御即位。同年貨幣を改鑄され舊惡貨は影を潜むるに至つた。九代家重天皇の英明を忌み御讓位を迫り奉つたので、延享四年御退位遊ばされた、寶延三年四月崩御、壽三十一。

桃園天皇陵(第百十六代) 陵は高さ十八尺五寸の九重御石塔。櫻町天皇の第一皇子、延享四年九月(約百八十年前)御年七歳にて御即位、大岡忠相(オウダケ)江戶町奉行をつとめてゐた。寶曆七年より尊王論を唱へ、皇權恢復を叫ぶもの出でて其先鋒となつた者は丹波の人武内式部であつた。式部は此の思想を公卿の間に鼓吹した咎で、幕府から罰せられた。御在位十六年、寶曆十二年七月崩御、壽二十二。

後櫻町天皇陵(第百十七代) 陵は高さ十八尺の九重の御石塔。櫻町天皇の第二皇女、皇長子御年少に付明正天皇の例に倣ひ寶曆十二年十一月(約百七十年前)即位、御年二十四歳、田沼意次(オキツグ)父子政權を恣にしてゐるので、國政は亂脈を極めて居たが、國學の研究者續々輩出し尊王思想は國民の頭に浸み込み其結果過激なる論者として山縣大貳・藤井右門の處罰を見るに至つた。御在位八年、文化十年十一月崩御、壽七十四。

後桃園天皇陵(第百十八代) 陵は高さ二十尺九重の石塔。桃園天皇の第一皇子、明和八年四月(約百六十年前)即位。田沼の惡政甚しく翌九年を時人「めいわくの年」と呼んだ。天明の凶饑、櫻島の噴火等人の禍、自然の變等相續いて起つた。在位九年、安永八年十月崩御、壽二十二。

二、後月輪陵

光格・仁孝二帝陵は十二帝陵の後方にあつて後月輪陵と申し、陵の形式は十二帝陵と變らない。

光格天皇陵（第百十九代） 陵は高さ十七尺の九重石塔。東山天皇の御曾孫、閑院宮典仁親王の第六王子、安永九年御即位、松平定信善政を施し、天皇賢明にましませしより、時の人之を謳歌して「東に賢臣出で、西に聖天子が出でましたので、之より天下は大いに治まるであらう」と。在位三十七年、天保十一年十一月崩御、壽七十。

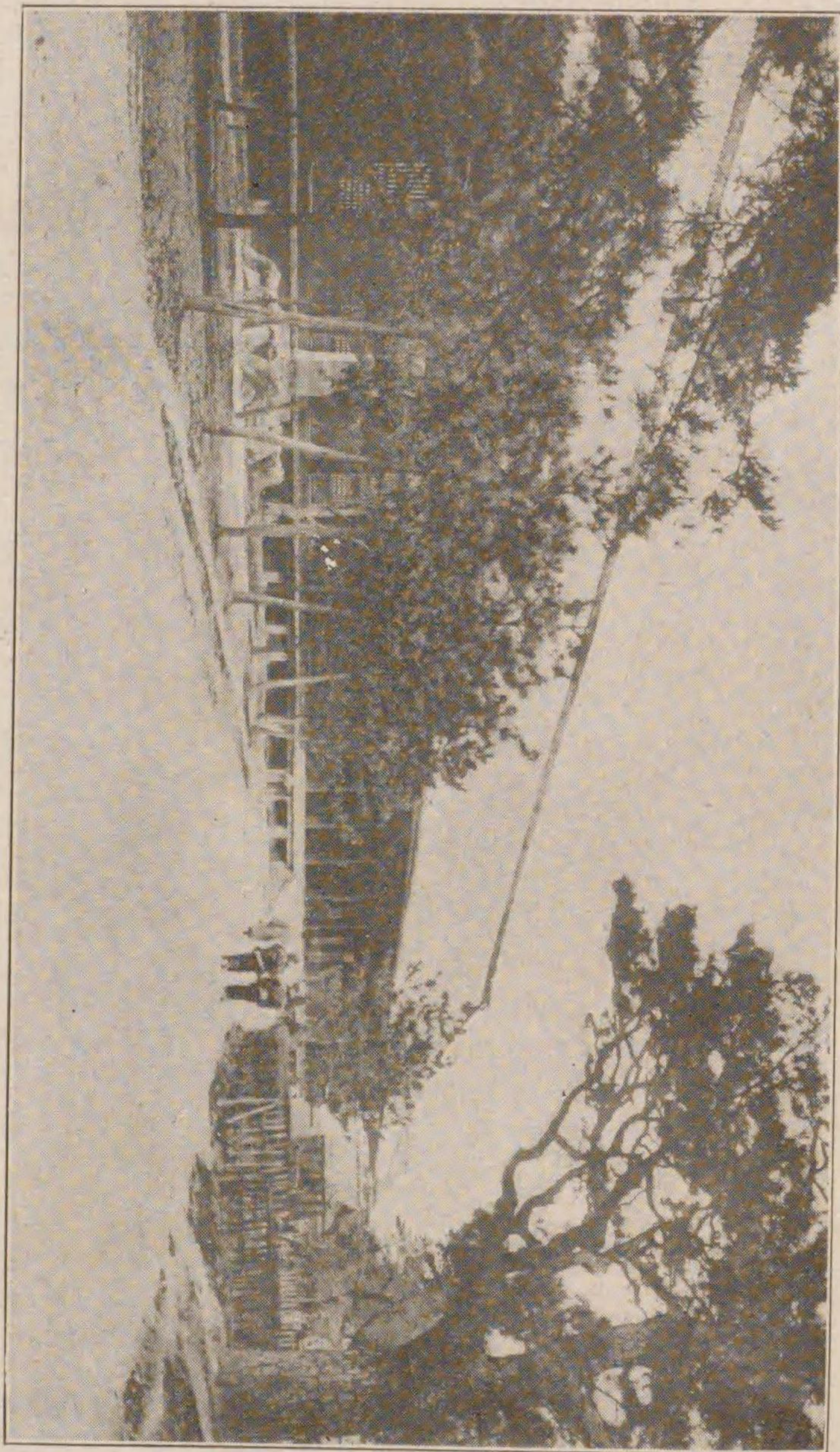
仁孝天皇陵（第百二十代） 陵は高さ二十一尺の九重の石塔。光格天皇第四皇子、文化十四年九月（約百二十年前）即位、御年十八歳、幕府衰亡の徴益々甚しく、國論沸騰し、訴獄當を得ず、外國關係多端を極め、最早時局を收むることが出来なくなつてしまつた。在位二十九年、弘化三年正月崩御、壽四十七。

三、孝明天皇（第百二十一代）月輪東山陵

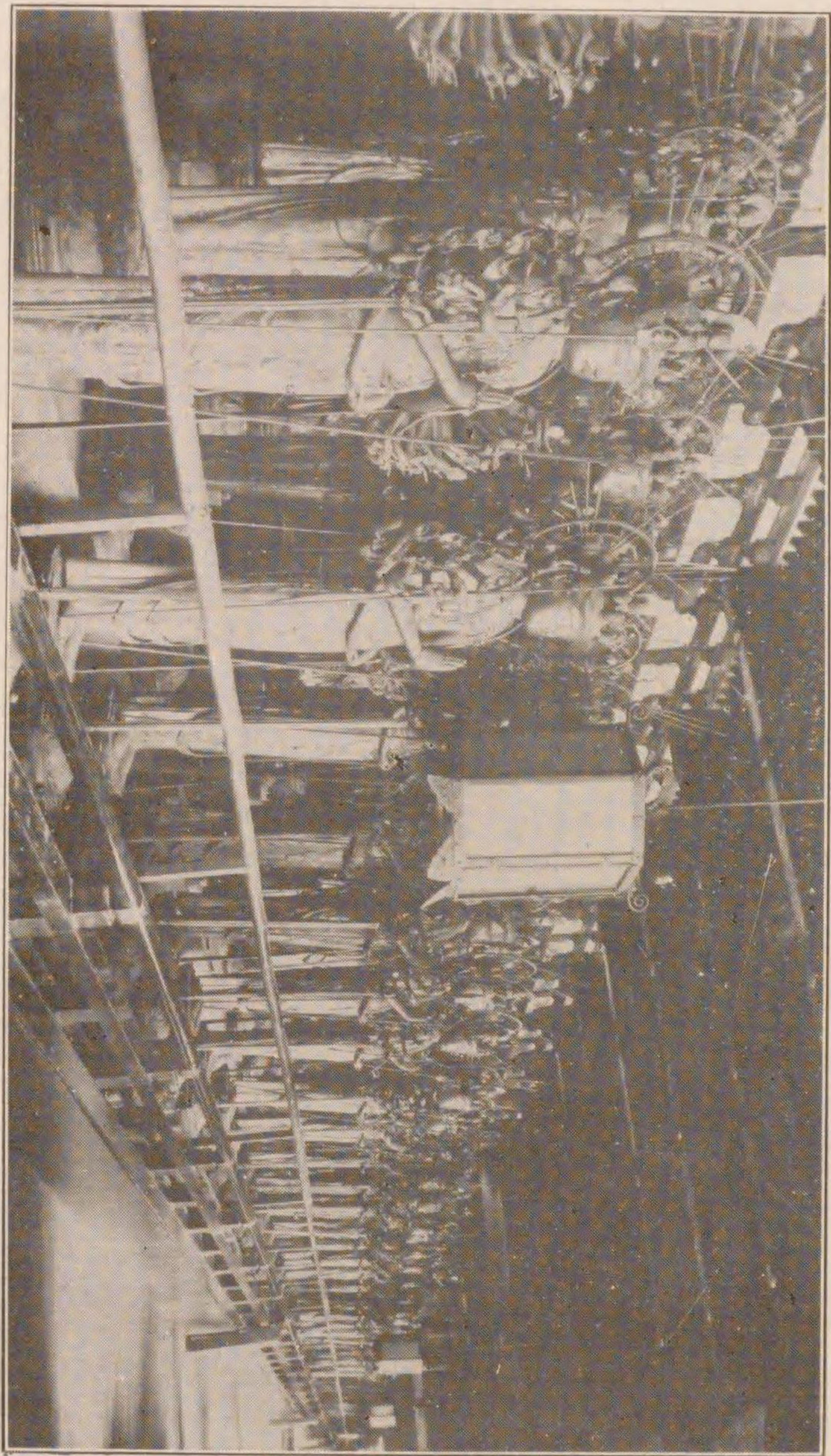
山陵は古制に準據して御築造、御塚は三段に石垣を繞らし、高さ二十四尺、直徑二十六間の圓墳で、後月輪東山陵といふ、獨立の一山を有し塀重門及手洗水場がある。

仁孝天皇の第四皇子、弘化三年正月約九十年前御年十六歳で御即位、御在位中は内外多事、幕府は其處置に窮し、諸問題は天皇を中心として渦を巻き、實力のない幕府はどうすることも出来なかつただけ天皇の宸襟を悩ましたまふことが甚しかつた。外船の渡來、攘夷と修交條約、開港・討幕・尊王の諸問題が國を擧げて紛糾して居る中に崩御、慶應三年十二月二十五日、在位二十一年、壽三十六。

四、後堀河天皇（第八十六代）觀音寺陵



—長虹一室—三十三間堂（鎌倉時代）



——一千一十の観音像——三十三間堂（鎌倉時代）

泉涌寺陵の一つで、泉涌寺から孝明天皇の陵へまゐる道の左側山上にある。

陵は直徑十餘尺、高さ十八尺ばかりの圓墳で、周圍百十六間三分。

天皇は高倉天皇の御孫。承久三年北條義時仲恭天皇を廢し奉り、後迎へて位につかせ奉つた。御年僅に十歳。御在位十一年。天皇、資性寛仁大量、喜怒色に見せ給はず、政治に苛酷カコウでなく、頗る文藻に富ませ給ひ、學を好み、常に儒臣を召して論談あらせられたと傳へる。

五、魚屋八兵衛

抑々御火葬は、佛教渡來以後盛に皇室に行はれたが、武家跋扈バツコ以前は其御儀式もいと鄭重で、御火葬後は其の位置に山陵を起し、皇室の尊嚴を保たれた。然るに足利時代より以後は皇室の式微甚しく御火葬の費用にさへ事缺きたまひ、後土御門天皇の御遺骸の如きは御棺と稱して桶に容れ奉りしさへ悲惨なるに御火葬の御模様及御遺骨を葬り奉つた有様は實に言語道斷であつた。

後光明天皇の御葬儀に當り幕府を恐れて誰一人嘴を容れる者の無い中に、一匹夫たる京の町人魚屋八兵衛が、高貴の御いたはしい御葬儀を嘆き、百方遊説して、御火葬を止められん事を建議してから、以後歴代の天皇は御火葬を止められ、土葬し奉る事になり、忌はしき御灰所なるものは全くなくなつて、各帝別々に御埋葬申上げることになつた。

この御火葬の止んだ事はやがて後年尊王思想の勃興する端緒となつて、王政復古に尠からぬ影響を及ぼした。之がため魚屋八兵衛は、明治になつて贈位の恩命に浴した。

蓮華王院 大和路停留場南東

——宗派、天台宗——本尊、千手觀音——

三十三間堂

堂長六十四間五尺、二間毎に柱があつて柱間が三十三あるので三十三間堂と稱せられる。蓮華王院と言ふのが本名で後白河法皇が其御所法住寺殿内に一千一體の觀音像と二十八部衆を安置する堂を營まれたのが其起源であるが、其後元暦二年七月地震のために破損し、又建長元年には火災があつて、佛像も建物もすっかり無くなつてしまつたのを、同三年に再建されて今日に至るまで七百年を經過して居る。平安朝末期・鎌倉初期に於ける我國有数の建物及美術工藝品である。

特別保護建造物

本堂。建長年間の建築で支那及朝鮮からの輸入形式を日本化した、いはゆる和様建築の標本である。南大門。桃山時代の建築、切妻本瓦葺の八脚門で、其結構の雄大なこと、梁間に於ける刻彫の巧なことが特色である。

什寶

本尊千手觀音は滿慶の作と傳へ、又本尊の裏手の風神・雷神以下二十八部衆は運慶と其子湛慶が六年間

の日子を要して仕上げた。剛健なる姿勢と巧妙で精緻な彩色とは此の時代を超越した逸品と稱せられ何れも國寶である。

三十三間堂の通矢

堂の裏手六十六間の椽に沿ふて矢を射通ふしたものを通し矢と稱し、其矢数を競ふて武技を誇つたのは江戸時代が最も盛であつた。今もなほ柱や梁や垂木に栗のいがのやうになつた矢の痕が幾百となく見られる。

堂前に掲げられた額面を見るとそゞろに當時を追想することが出来る。中でも次のものは特に目立つて居る。

寛文九年尾州藩士星野勘左衛門 一晝夜にて 總矢數 一萬五百四十二本内通矢八千〇八本。
貞享三年紀州藩士和佐大八郎 同 同 一萬三千五十三本内通矢八千百三十三本

右は當時御三家の三勇士としてやかましく言はれた人々である。
棟木の由來

淨瑠璃に出た「三十三間堂棟木の由來」は柳の精が人に化けて色々な所作事を演ずる物語で、寶曆十年此の堂の建立に事寄せて假作したものである。

養源院 三十三間堂東向ひ

——宗派、天台宗——本尊、阿彌陀如來——

血天井

豊臣秀吉の側室淀君が父淺井長政の菩提のために建立した寺で、養源院は長政の法名である。其後火災に罹つて焼失したのを淀君の妹である徳川秀忠夫人が桃山城の舊材を用ひて再建した。此の寺の椽側の天井に血痕があるので俗に血天井といはれてをる。これは慶長五年關が原戦役の際、桃山城の主將鳥居元忠が西軍の重圍を受けて奮戦力闘、力竭きて自盡した時に、將士と共に血を流した板の間を用ひたものと稱せられてゐる。

什寶

依屋宗達の筆と傳ふる杉戸四枚あり、筆力勇健、構圖偉大にして模様畫の逸品である。

後白河天皇（第七十七代）法住寺陵 京都市下京區三十三間堂廻町、養源院南隣

建久三年三月崩御、法住寺内法華堂の下を掘つて、石の唐櫃に藏めて安置した後、堂内に天皇の尊像を祀つた。

天皇は鳥羽天皇の第四皇子、保元の亂に崇徳上皇讃岐に遷御後御即位、平治の亂後平清盛の權勢をおさへんとし給ひ、清盛かへつて天皇を幽閉し奉つた。後源氏の蜂起によつて平氏は西海の藻屑と消えたが、頼朝の乞ひによつて義經追討のために諸國に守護地頭を置くことを許され、遂に兵馬の權が武門に移る因をなした。

大正天皇の御下賜

明治二十八年竣工、同三十年より一般公衆の觀覽を許された。東京・奈良と共に帝室の御有で宮内省に屬して居たが、大正天皇の御思召に依つて同天皇の末年、京都市へ御下賜になつた。廣々としに綠滴る樹の間に聳え立つ洋館の中には、我國古代からの美術工藝品・書畫・古文書等の優秀な而して珍奇な物が處狭しと陳列されて、我國の歴史・風俗其他の研究をなす者のために多大の便益を與へて居る。

猶時々は一時代を代表した人物其他のために遺品・遺墨をひとまとめとして蒐集陳列し、考古家・學者・研究家に其資料を提供して居る。尙庭園林泉の中には支那・西藏等の佛像を各所に配置し、外國美術の一斑を示して居る。

恩賜博物館

電車妙法院前 三十三間堂東北隣

豊國神社

大和大路停留場北、博物館北隣

社格、別格官幣社——祭神、豊臣秀吉——

慶長三年八月十八日六十三歳で此の世を去つた豊臣秀吉は、當時征明二十萬の軍勢が異域に戦つて居た時

なので喪を秘して本社後方の阿彌陀が峯に密葬され、翌慶長四年社殿成つて其靈を此處に祀られ朝廷より勅使の差遣があつて、正一位を贈られ豊國大明神の號を賜はつた。千古の英雄の靈を鎮め祀つた壯嚴華麗な建物も豊國廟同様徳川氏の政策で跡方もなく破壊し盡され、後方の妙法院に家光の建てた哀れな一碑を止むるのみとなつた。

明治天皇深く秀吉の遺烈を思召され京都府に命じて豊公と因縁の深い大佛殿趾に社殿を營造せしめたまひ明治十三年其完成と共に豊國神社の號を賜はつたものが現在の社殿である。

特別保護造物

唐門はもと桃山城にあつたもので入母屋造の前後に唐破風をつけた形式の四脚門で、全體に彫刻多く金具も多く用ひられてゐる。同じ桃山城の遺物たる西本願寺の唐門に比べて規模や、小さく裝飾も簡單だが却つて奇抜な點がある。正面の虹梁の上に大きな蓑股をつけ中に桐唐草を充したのや、側面頭貫カシスギの上に菊唐草を彫刻してゐるのがそれである。

耳塚 豊國神社前

高さ六米ばかりで上に大きな五輪の石塔がおいてある。朝鮮征伐の際諸將士が敵の鼻や、耳を樽詰にして送つて來たのを豊太閤の實檢に供して後彼等の冥福を祈るため此處に埋めたものであると。

豊臣家運命を呪ひの寺

天正十四年豊臣秀吉が、高野山木食モクシキ上人に命じて高さ十六丈の大佛を造らしめて之を本尊とした。其工の早きを望んだので木像とし之に金漆を塗りこめた。之が京の大佛で秀吉の好を現はし、所謂日本一で遙かに奈良の大佛を凌駕して居た。然るに慶長十年の震災でもろくもこはれてしまつた。秀吉に再興の意志があつたが内外多事の際であつたために果さずして死んだ。かねて豊臣家の財寶を盡さうと計畫して秀頼にすゝめて近畿に無数の社寺を修覆せしめてゐた家康は、最後の大事業として當寺の改築を命じ且つ佛體を金銅に改めしめた。

方廣寺

大和大路停留場北、豊國神社の北つき

——宗派、天台宗——本尊、盧舍那佛——

豊臣家の運命を呪ひの寺・佛像、二つ揃つて完全に然かも森嚴に京都の全市を壓して東山の一角に現はれたのは慶長十七年であつた。翌々慶長十九年に出來上つた鐘は家康が待ちもうけて居た口實を生み、豊臣家は間もなく滅亡の悲運に陥つてしまつた。四代將軍家綱の代になつて、老中松平信綱は此の佛像を熔かして寛永通寶を鑄た、之が今日残つて居る文錢である。今同寺の本尊として祀つてある半身木像は天保時代に尾

張の國から獻納したものである。

豊臣家を滅ぼした呪ひの鐘

醍醐の花見に贅を盡した後の英雄秀吉は、其の頭に人知れず淋しさと不安とを宿して居た。征韓の壯舉と秀頼の誕生とに因つて幾分の賑はひを感じたが、前途の豫感はその處に喜びの材料を見出し得なかつた。彼は秀頼の將來を案じつゝ死んだ。秀吉死後の大阪は執拗な家康に因つてぢり／＼窮迫の境地に追ひ詰められて居た。呪ひの鐘、方廣寺の其の鐘に表はれた「國家安康云々」の文字が最後の毒矢となつて、豊臣家は過去のものとなつてしまつた。

清韓長老と金地院崇傳

學者と野心家、清僧と怪僧、それは清韓と崇傳との半面である。豊臣家のため、救世のために大佛鐘銘を書いた清韓。此の鐘銘の中から豊家覆滅の怪文字を見付け出した崇傳。前者は放逐の憂目に逢ひ、後者は國內の僧寺總取締、僧録司の榮譽を擔ふた。此の二僧の浮沈にも時代相があり／＼と現はれて居る。然も此の二僧が同じ臨濟禪を南禪寺に學んだ事は、餘りと言へば餘りの皮肉である。

阿彌陀峯、豊臣秀吉の廟

豊臣家が存在を失つてから三百年、此の永い間世界的英雄秀吉の遺骸は、夏は野菊秋は尾花を自然の手向けとして雑草の中に目標もなく見捨てられて居た。其阿彌陀峯は石階さへも取こぼされて有志の訪ふことも許されなかつた。自家擁護に急であつた徳川氏は何處までも豊臣家に對して慘酷であつたが、

明治の大御代になると皇室の保護と國民の渴仰とに依つて、五輪の大寶塔高く聳え、廣々とした參道新たに成り、數百の石階は山顛に達して四季の花其間に笑ひ、昔の威容を再び見ることが出来るようになった。墓域修理の際高さ三尺許の壺が発見されて、其中にあつた遺骸は手を交叉し蹲踞つて、北西の方を向いて居たと傳へられてゐる。御所を拜してゐたらうか。はた二條城を見つめてゐたらうか。

六條天皇（第七十九代）清閑寺陵

下京區清閑寺町歌の中山、市電妙法院前より阿彌陀が峯東へ。陵は周圍二百十五間。域内に高倉天皇と二陵があり、後方が六條天皇の陵で、今は法華堂がなく、其址に土塀をめぐらしてゐる。

天皇は二條天皇の第二皇子、二條天皇の後を受けて御即位、御年僅に二歳。後白河法皇院政、清盛太政大臣、五歳にして讓位、上皇となられ、安元二年崩御、御年十三。

高倉天皇（第八十代）後清閑寺陵

前同所
陵は六條天皇陵と同域にある。

天皇は後白河天皇の第七皇子、御年八歳にて御即位、後白河法皇院政、平清盛太政大臣。「平氏にあらざれば人にあらず」といつた時代で、天皇は虚器を擁せられるに過ぎなかつた。後鳥羽殿に幽されたまひ、止むなく位を安徳天皇にゆづり給ふた。

智積院

電車妙法院停留場前

——宗派、眞言宗新義派總本山——本尊、不動明王——

寺は紀州根來寺の末寺である。秀吉が其全盛時代根來寺の僧徒の横暴を惡み、討伐軍を差向けて之を懲らしたので、根來の衆徒等はひそかに秀吉の所置を怨んで居た。秀吉の薨後其遺族を滅盡した家康は更らに秀吉のために造られた建築物を片端から破壊し始めた。併し自分が手を下すことは外様大名並に秀吉恩顧の人々の多い此時代に面白からぬことを考へ、秀吉と犬猿の間柄である根來寺の僧徒を招き寄せ、豊臣の眼睛とも稱すべき阿彌陀峯と方廣寺との中間に根來寺の子院智積院を移して、殆ど完膚なきまでに廟及神社を破壊させた。此寺がこゝに出來たのは全く徳川家康が、豊臣家の遺蹟を破壊せんとした計畫によるものである。但し寺の方は直接の關係が薄いので之は其まゝに捨て置いたものである。

妙法院

電車妙法院前停留場

——宗派、天台宗——本尊、普賢菩薩——

延暦年中に創立された叡山三千坊の中であつたのを、平安朝の末年京内綾小路に移し、慶長年中大佛殿及

豊國神社を管理せしむるため現在の所に移轉せしめたものである。妙法院門跡と稱し維新前は皇族の入寺せらるる例になつて居た。徳川氏が豊國廟を破壊するや當寺に命じて秀吉の靈を祀らしめた。

什寶

朝鮮王より秀吉に贈つた衣服、ポルトガルの印度總督が秀吉に送つた羊皮の書翰等豊臣秀吉に關係ある寶物が澤山所藏されて居る。

七卿落

文久三年薩長議合はず、長州藩は之がために京都守備の任を解かれた。攘夷の主張を托げなかつた公卿、三條實美・三條西季知・四條隆調・東久世通禧・壬生基修・錦小路頼徳・澤宣嘉の七卿は朝廷を退き妙法院に會し其進退を議し遂に夜陰に乗じて京都を發し中國に向ひ、毛利敬親の下に一時身を托することになつた。

順路

(三) 東山中部——五條大橋から六波羅密寺まで——

- 五條大橋——西大谷——清水寺——八坂法觀寺——高臺寺——東大谷——圓山
- 公園——將軍塚——長樂寺——智恩院——青蓮院——花園天皇陵——八坂神社
- 誓願寺——建仁寺——六波羅密寺——(行程凡そ十軒)

五條大橋

牛若・辨慶の五條橋

五條橋といへば牛若丸と辨慶とが果し合ひをした繪のやうな姿が思ひ出される程、兒童・走卒にも知れ渡つた名高い橋で、橋辨慶といへば謠曲の勇ましい聲音が口角を洩れて來るやうに思へる程、都鄙の人々を引きつける魅力魅力を持つて居る。此の橋は古代清水橋又は勸進橋と稱して居たが、天正年間秀吉に依つて改造され江戸時代正保年間石橋となり、寛文二年元の木橋となつた。擬寶珠ギホウシユの一部に正保の銘あるは石橋當時の遺物である。

此の橋はもと松原通賀茂川に架けてあつたのを大佛建立後、天正年間六條坊門通に移しもので、今は其橋筋を五條通と云つて居る。古への五條通は今松原通りである。

西大谷

五條坂停留場、妙法院の北凡三百米

西本願寺廟所——大谷本廟——

本願寺の開祖親鸞上人の廟所で、西本願寺に屬して居る。もと智恩院の境内北大谷にあつたのを、徳川家康がこゝに移したものである。左右の石垣内に顯如上人以下歴代の墓がある。華麗な堂前には蓮池があつて

西國十六番の札所

寶龜年間大和國小島寺の僧延鎮が、山城の木津川上に草庵を結んで觀世音を祀つたのが起り。坂上田村麿が之に歸依し觀音寺を建てたが、延暦三年都を奈良から長岡に遷された時、延鎮も亦山城に移り田村麿の援助を得て此處に觀音寺を建立し、之を北觀音寺と號したが、大同二年（約一一二〇年前）清水寺と改め、其後田村麿が蝦夷征伐の戦勝を祈つたので、延暦廿四年勅願寺となつた。

當寺は南都興福寺に屬して居たので屢々延暦寺衆徒と衝突して諸堂燒失の厄を蒙つた。文明・永正の頃願阿上人が實權を成就院のものとした。之が本坊で其までは清水寺は一山の總稱で別に本坊と云ふものがなかつた。明治以前は眞言と法相の兼學であつたが以後之れは廢せられて、現今は法相宗のみを奉ずることにな

清水寺

東山松原停留場東八百米、西大谷から鳥邊野を過ぎて北東凡そ二百米

——宗派、法相宗——本尊、十一面觀世音——

池畔の松楓が之にまぎつて風趣が良い。見眞大師親鸞の茶毘所チヒは東方百米の山間にある。今の堂は慶長三年の火災後、明治三年に再建したもので中央に阿彌陀如來を祀り、其東に親鸞上人、其左右に顯如以下の歴世を祀つてある。

つた。西國順禮第十六番の札所である。

松風やおとばのたきの清水のむすぶところはすすしかるらん。

境内は京都市を大観するのに大變都合がよい。

特別保護建造物

本堂 寛永十年の造營、單層四注造、本尊十一面觀音像を安置。

舞臺 南方に掛け出したる高閣で、谷間には櫻や楓が多く、四時杖を曳く人が多い。

西門 寛永年代の建造、三間一戸八脚門。

鐘樓 慶長十二年の造營、單層切妻造。

三層塔 年代不詳、大日如來を安置。

什寶

木造十一面觀世音立像（國寶）其他什寶頗る多いが、中でも最も貴重なるは

末吉船及角倉船額面（國寶）で徳川幕府初期の海外交通及貿易の實績を證すると共に當時の船舶及

關係人物を知る好資料である。

成就院

清水寺の本坊即ち清水寺住職の住院で、忠僕茶屋の北にある。後柏原天皇の勅願寺で、勤王の傑僧月

照上人は當院に住して居た。

月照上人

成就院主で幕末に當り天下の志士にくみして討幕を圖つた。之がため幕府の搜索ソウソク厳しく遂に西郷隆盛と共に鹿兒島に落ち延び、海に投じて死んだ。重助は月照上人の下僕であつたが、よく上人に仕へて其の志を助けた。鹿兒島落ちの時も、隆盛及び上人に従つたが、夜知らぬ間に兩人が身投をしたので泣く泣く獨り京都に歸へつて上人の菩提を弔つた。因に月照の碑は成就院門前にある。

忠僕茶屋

境内見晴しのよいところにある。僧月照シモベの僕が明治維新の際開いた茶店である。

音羽の瀧

境内が音羽山腹にあつて、水源が此の山から出て居るので此の名がある。附近は東山一帯の中で最風光の勝れた處と稱せられ、遊覽客、參拜者四時雜沓するほどである。

八坂法觀寺

東山安井前停留場北東、清水寺の北西凡五百米

——宗派、臨濟宗——本尊、五智如來像——

八坂の塔

聖德太子の草創と傳へ先年此の地より飛鳥時代の古瓦を發掘した。現在の五重塔は永享十二年（約四九〇

年前) 足利義教の再建したもので、室町時代の様式を傳へた優秀な建物である。當寺は延喜七寺の中に數へられた大寺であつたが幾度かの火災に逢つて、今の此の塔を残すのみとなつた。塔の高さ十六間、方三間で特別保護建造物に指定されて居る。

八坂法觀寺古圖一輻は足利末期に於ける法觀寺の規模と時代の風俗を知る好史料である。足利義教畫像とともに國寶。

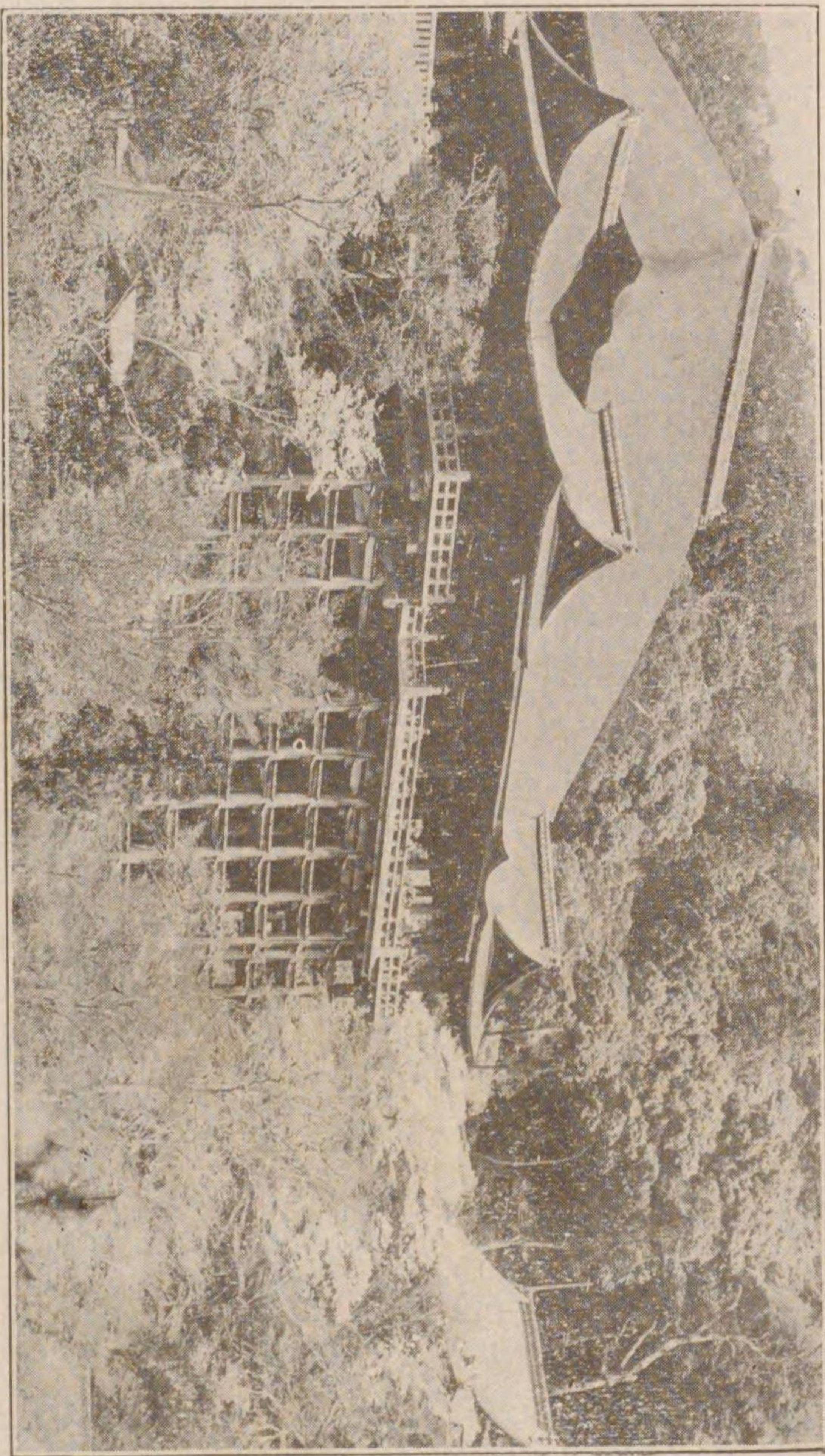
高臺寺 安井北門前停留場東百米、八坂塔の北東二百米

——宗派、臨濟宗建仁寺派——本尊、釋迦如來——

豊臣北政所の建立

豊臣秀吉の夫人湖月尼高臺院が、秀吉の菩提を弔ふためにこの寺を興した。

徳川氏も淀君とは反對に北政所には同情を持つてゐたものか、慶長十一年酒井忠世・土井利勝等を修造奉行として、伏見城の殿舎を移して結構善美の寺院が出来上つた。其後寛政三年焼失し、直ちに再建したが文久三年浪士のために焼打されて烏有に歸した。併し開山堂と靈屋・表門のみが此の災厄からまぬがれて、華麗な桃山時代の倣をのこして居る。



——洛東の名藍——清水寺本堂 (江戸時代)

保護建造物

開山堂 單層入母屋造、慶長十年の建築、漆を施し其裝飾頗華麗を極め天井の繪畫は征韓役の船戸の繪であると云はれてゐる。開山三江和尚の像を安置。

靈屋 開山堂より石階の上る百米の處にあり、慶長十年の建造、寶形造、裝飾の絢爛たる、能く桃山時代の特色を表はして居る。中央本尊隨求菩薩、左壇秀吉座像、右壇北政所座像を安置してをる。

什寶

秀吉自筆の書狀 小田原攻の軍中より夫人に送つたもの及び永祿三年吉野觀櫻の時の和歌等がある。

高臺院

秀吉の夫人、所謂糟糠の妻でのちの北政所、尾張の杉原助左衛門（木下肥後守定利）の女で、同村淺野長政の父彌兵衛の養女となつた。秀吉がまだ顯はれない時に嫁したもので頗る内助に力めた。秀吉が關白になつた時北政所の尊稱を受け従一位に叙せられた。公の薨後髪を切つて高臺院湖月尼といひ、此の寺で終つた。年七十六。靈屋の下に其墓がある。

高臺寺蒔繪

秀吉及高臺院の靈屋・厨子及壇等にある竹・松・紅葉其他の艷麗なる蒔繪は本邦蒔繪および裝飾意匠の標本として世にもてはやされ、之を高臺寺蒔繪と云つてをる。

庭園と萩

庭は小堀遠州の意匠で木石の配置巧妙を極め、境内の萩は高臺寺萩と言つて京都名物の一に數へられてをる。

東大谷 高臺寺の北二百米

東本願寺廟所

本願寺の開祖親鸞上人の廟所で、開祖以下東本願寺の歴代の廟もある。寛文十年の創立で本尊として阿彌陀如來が祀られてゐる。堂は元祿年間の建立である。

長樂寺 圓山公園南

賴山陽の墓

東山にあつて西に洛水を望み展望が良いので、昔からここに遊ぶ者多く、今は全く遊び場所になつて居る。境内の北の山上に、日本外史の著者として有名な賴山陽の墓がある。墓碑は諸名家の銘文を刻んでゐる。

圓山公園 祇園石段下停留場東、高臺寺北凡五百米

祇園の夜櫻

此の地は元比叡別院である安養寺六坊の境域であつたが、六坊が廢れて維新後官有地に編入せられ、明治十九年公園となつたものである。總面積二萬九千坪、公園の正面に見えるのが所謂圓山であつて、左右一帯は翠滴る遊覽地である。智恩院・安養寺・長樂寺・雙林寺等が木の間に隠見し、園内の泉は水晶のやうな水を流し、流に添ふて咲く花は紅・紫・黄・白四季共に人の眼を樂ませ、眞に古都に適はしい仙境である。

園の中央に小高い丘があつて其處に根を下して居る老櫻は、祇園の枝垂櫻として異彩を放ち、滿都の子女風流韻士の憧憬の的となつてゐる。夜櫻の美觀は到底筆紙に盡すことは出来ない。

將軍塚 圓山公園より登り凡一軒

王城守護の神

延暦奠都の時丈八尺の土偶に甲冑を装はし、且つ弓箭を持たしてこゝへ埋めて王城守護の神とした。それからは兵亂のある度毎に此の塚が鳴動したと傳へられてをる。世俗之を阪上田村磨の墓と稱するのは間違ひで、田村磨の墓は山科にある。

智恩院 祇園石段下停留場東三百米、圓山公園北隣

——宗派、淨土宗——本尊、阿彌陀如來——

淨土宗總本山

當寺はもと比叡山の別院であつた。僧源空（法然上人）が淨土念佛宗を唱導して起つや、忽ち天台宗の反感を買ひ異端者として建永二年二月（約七三〇年前）遠流せられた。其後免されて歸つた時、天台座主慈鎮和尚大谷山上の地を源空に提供して庵室を營ましめた。之が大谷寺即ち現在の智恩院で、初は大谷禪室・吉水禪房とも云つた。叡山の衆徒が堂宇を破壊した後一時荒廢に歸したが、文曆四年四條天皇の勅に依つて堂宇は再建され、永世の勅願所とせられた。其より二百年後の永享二年火災に罹り足利義政に因つて再興されたが間もなく應仁の兵火に逢つて焼失した。其後後柏原天皇再建の勅を下され一宗の本山となしたまひ、後奈良天皇は更に華頂山の勅額を賜はつた。

後陽成天皇の第八皇子良純親王入つて法親王となり華頂宮を創立せられてより、明治に至るまで歴代法親王をもつて門主とせられた。

現在の堂宇は寛永十年焼失後、徳川家光が造營したもので、規模宏壯、恰も城郭の如く、京都市中これに及ぶものがない。寺は東海道の要路を占め、東に山を負ひ、西に京都を見下し、其形勝は二條城に勝り戰略上の要地にある。幕府がその構造に力を盡したのは深く慮る所ありしによると傳へてゐる。

保護建造物

本堂。圓光大師の影像を安置。單層入母屋造の大殿である。表東椽の極クニキの間の傘は防火の呪である。

と稱せられてをる。本堂から衆會堂、方丈に至る間は歩む度毎にキユツ／＼と好い音がする。之を驚張といつてをる。

大方丈・小方丈。寛永十年の建造、單層入母屋造の結構善美を盡したもので、各室の襖畫は狩野派の名手が畢生の腕を振つたものである。

經藏。重層寶形造、元和二年の建立で、宋版一切經を藏して居る。

勢至堂。足利初期の建築、單層入母屋造、本堂の東稍々高所に在る。慈鎮和尚が法然上人の住房として與へた南禪院で、もとの智恩院である。本尊に勢至菩薩が安置されて居る。此堂後に法然上人の廟がある。

三門。本堂の西にあり、五間三戸の樓門、元和五年徳川秀忠の建立。我國の三門中で最壯大なものである。桁行十四間、梁間六間。

唐門。四脚唐門で寛永十年の建築である。

什寶

法然上人行狀繪卷三十八卷（國寶）は本寺及本宗第一の什寶で勅修御傳と稱するものである。繪は土佐吉光の筆で、傳記は伏見・後伏見・後二條の三帝及尊圓親王・三條家重・世尊寺行尹ユキタダ・姉小路濟氏ナリウジ等の筆である。其の繼目には足利尊氏の花押がある。

法然上人

本名源空、美作の人、十五歳の時叡山の僧に従つて薙髮し、後奈良に遊んで八宗の教義をきはめた。

晩年其所習をすて、専ら専修念佛を唱へて浄土宗を開いた。丁度此の時は平氏滅び現世の榮華について世人が疑をもつた時であつたが、法然上人は「慈悲によつてのみ、現世より救はれて來世は極樂浄土に往生して利福が求められる」との教へを立てたので、全く時宜に適したと見えて浄土宗は廣く信じられるやうになつた。しかし南都・北嶺のものからは宗敵として惡まれ土佐に流された。後ゆるされて京都にかへり八十で入寂した。圓光大師といふのは法然坊に賜はつた諡である。

境内と史蹟

徳川氏が勤王派に對する政策上此の寺を經營したと稱せられ、境内は後方に山を負ひ前面には堅牢な石垣が施されて其間に宏壯なる建物为天を摩するやうに建つて居る。境内と東山へ通ずる道筋は櫻の名所である。崇泰院には親鸞の遺蹟があり、其所にある小塔は慶長八年上人の遺骨を大谷廟所に遷した遺蹟である。

青蓮院

智恩院北隣、古川町停留場南東五百米

——宗派、天台宗——本尊、阿彌陀如來——

叡山にあつた青蓮院を此處に移したのが當寺の創りで、近衛天皇の天養元年關白藤原師實の子大僧正行玄の開基である。鳥羽天皇の皇子覺快法親王が入寺せられ院の御所に准ぜられてから、歴代皇族の入寺が例となつて明治維新に及んだ。粟田御所・東山御所・青蓮院門跡などと稱せられ、歴代皇室の御尊信厚く寺門は頗る隆昌であつた。

創立當時の寺域は將軍塚や、智恩院までを含んだ尨大なものであつたが、法然上人が智恩院を創立するに當つて寺域を割譲し現在の如く縮少されてしまつた。應仁の兵火に建物の全部が烏有に歸したが、徳川氏の世になつて改築されて昔にまさる宏壯な建物を見るに至つた。天明八年皇居炎上の際には、光格天皇の假御所となり、嘉永年間には孝明天皇の假の皇居となつた。現在の建物は明治二十六年の炎上後同二十八年再建されたものである。有名な慈鎮上人は當寺の三世で、御家流書道の元祖尊圓法親王は當寺の門跡であらせられた。

殿舎は新らしいが寶物には貴重なものが多いが、數多所藏されて居る。嵯峨天皇宸翰、光格天皇御筆光明經・後櫻町天皇御遺品・狩野永徳・山樂・元信の襖繪等。

御家流

御家流は代々書道に精しかつた。伏見天皇第六子尊圓法親王は殊に傑出されて居た。世に其法を傳へて御家流・栗田様・尊圓様といつた。徳川時代には此の流が専ら用ひられ、朝廷も幕府も此流によつたので此流以外には書道がないといふ風であつた。

御家流(青蓮院流)

花園天皇（第九十五代）十樂院上陵

上京區粟田口町青蓮院裏

周圍二十間の小圓墳で、古い玉垣があり、拜所は其前にある。

伏見天皇の第三の皇子、延慶元年御即位、在位十一年元弘。建武の騷亂の際にも、常に學問に勉め親しく風雅集を撰したまひ、また延慶より元弘まで二十年間の御日記あり、花園院宸記といふ。深く佛法を信じ妙心寺内玉鳳院に居られた。壽五十三。

八坂神社

祇園石段下停留場

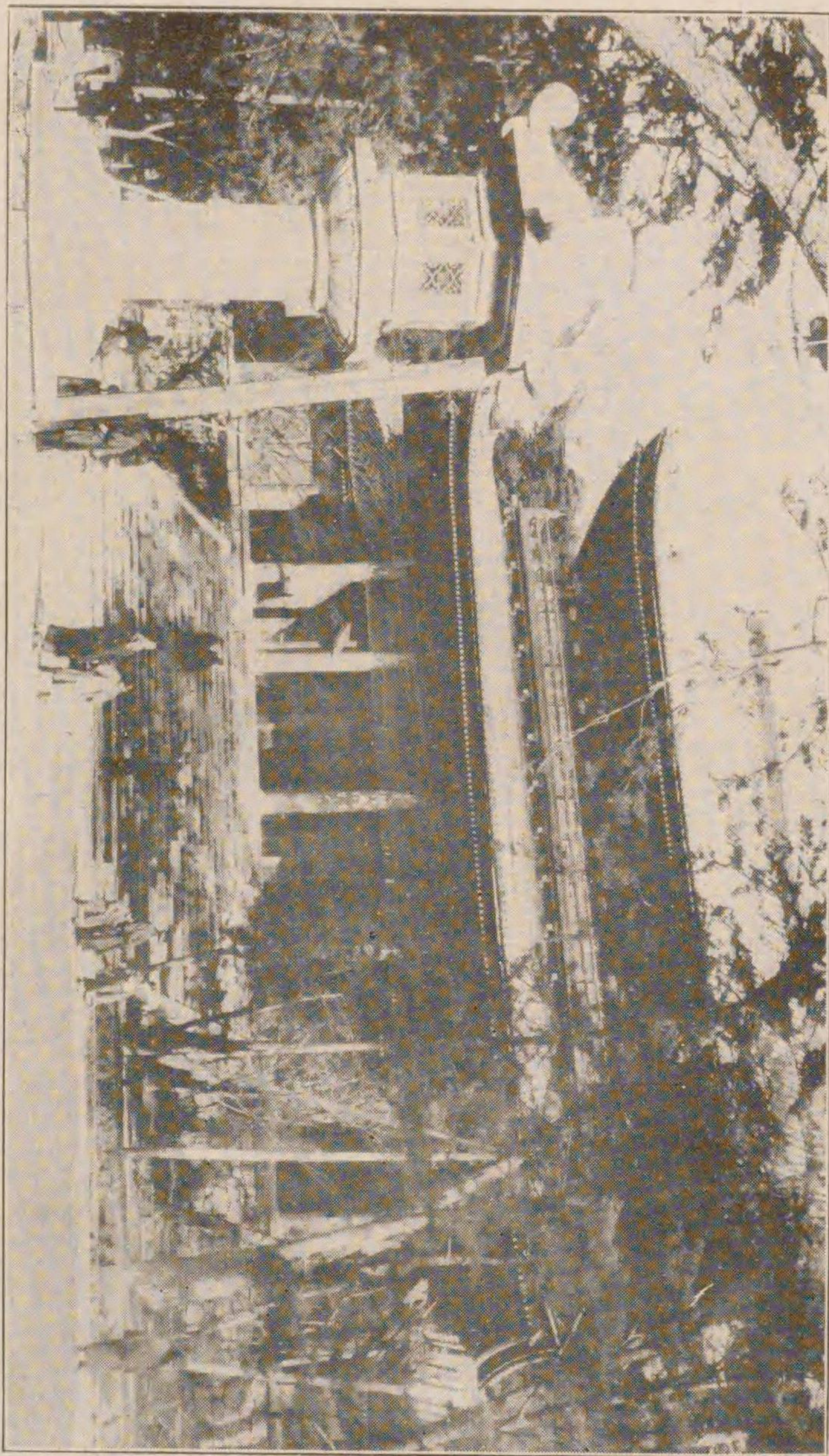
——社格官幣大社——祭神、素盞鳴尊・稻田比賣命・八柱御子神——

華やかな祇園會

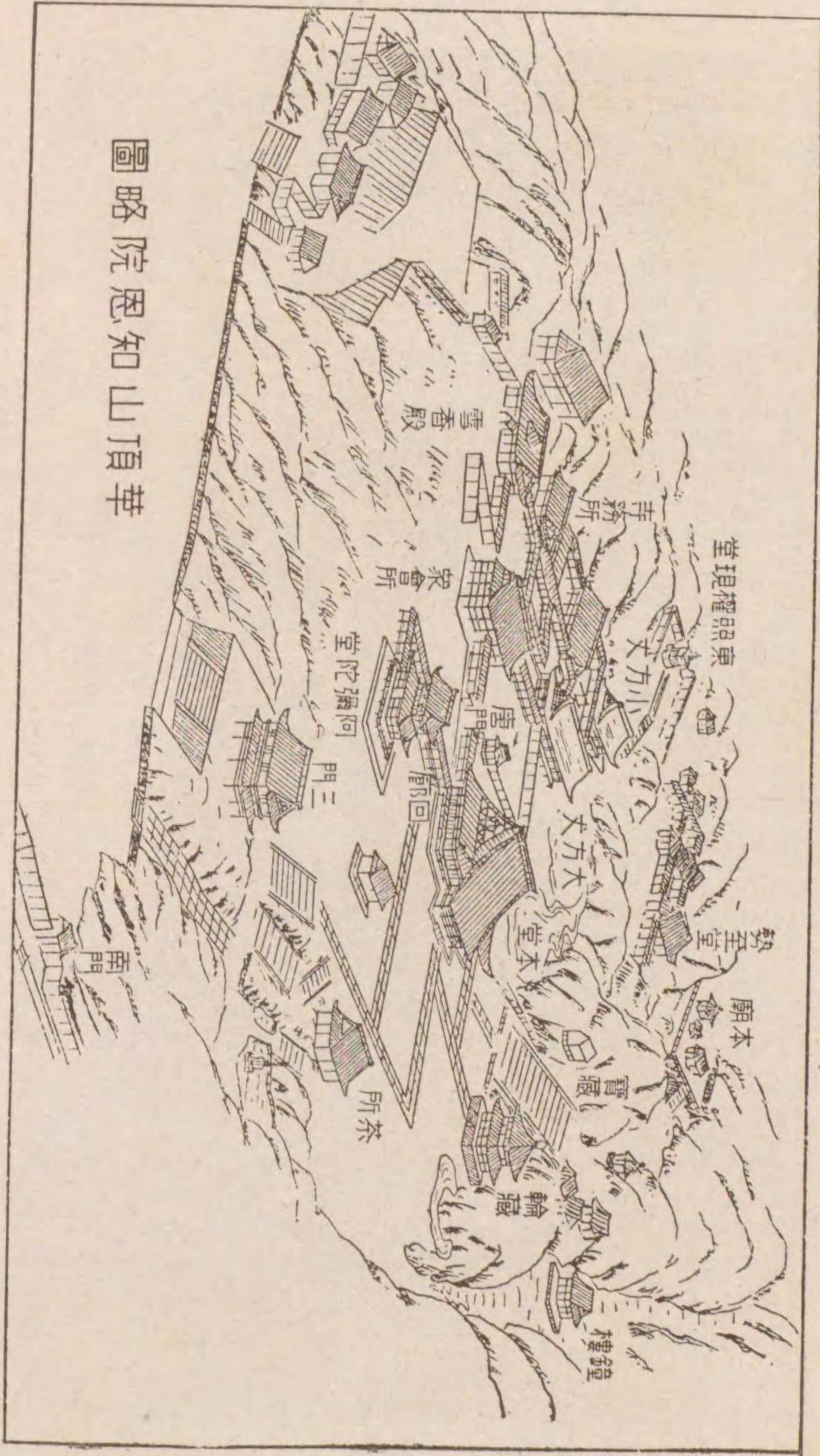
貞觀十八年播磨廣峯より移し祀つたと傳へられ、もと祇園感神院と云つたが、明治元年八坂神社と改められ大正五年官幣大社に列せられた。

祭神は中央に素盞鳴尊、東座に崇道天皇・藤原廣嗣・吉備眞備・橘逸勢・伊豫親王・藤原吉子・宮田磨外一人を祀り、西座に稻田比賣命を祀つてゐる。

本社はもと南都興福寺に屬し春日神社の末社であつたが、後延曆寺に轉じて日吉神社の末社となつた。元慶年間（約千五十年前）藤原基經今の地に精舎を建て、後三條天皇の行幸があつた。其から祇園社行幸の事が屢々あつた。鳥羽天皇の永久年間（約八百年前）園城寺の僧徒が舊の如く春日神社の所屬にしようと思つ



——華やかな祇園會——智恵院の山門（江戸時代）



たが、延暦寺の強訴に依つて其目的を果すことが出来なかつた。

當社は朝廷及武家の崇敬が厚かつたため、其恩に慣れて神人の横暴をなしたことも屢々あつた。

祇園祭(天王祭)

毎年七月十七日から行はれる祇園會は貞觀十八年疫病流行の時、神輿を神泉苑に奉じて疫神を祀つたのが起りで、江戸の神田祭、浪花の天神祭とともに日本の三大祭に數へられ、殊に祇園祭は其隨一といはれてゐる。

町々から山鉦サンを飾つて市中をめぐり四條に集つて来る。昔は御輿迎へや神幸の日には、上皇や皇后が御覽になつた。また主上は紫宸殿で御覽になり、攝政大臣や將軍は棧敷を設けて見物したほどで、華やかな年中行事の一つとして今もなほ昔の面影をのこしてをる。

祇園女御の跡

鳥羽上皇の寵姫祇園女御の御館は本社の本社の南東にあつた。上皇が御館に行幸遊ばされた時、暗夜社前に怪物が現はれたが其形相の物憎さに誰一人近寄らうとするものが無かつた。當夜警固の任を仰せ付けられた平忠盛が矢庭に躍り出でて此の怪物を取押へた。天皇は其沈勇を深く嘆賞せられたと傳へられる。

削掛神事

削掛神事は一におけら詣ともいはれ、毎年元旦の夜明け前に行はれる、参拜者は神殿に置かれる火のついた削り掛の木から、火繩に火を移し家に持ち歸つて元旦の雑煮を焚く、之れは當年の疫病を免れる

ためだといふ。
特別保護建造物

本殿 所謂祇園造と稱する建築形式、正保三年（約八五〇年前）の建造で單層入母屋造になつて居る。

南樓門 三間一戸の樓門で足利時代の建築である。

石鳥居 南樓門の南にあつて正保三年の建立である。俗に日本三鳥居の一と稱せられてゐる。嚴島の

木の鳥居、靖國神社の銅の鳥居、祇園の石の鳥居は何れも大きい方の代表である。

北向蛭子社（末社）單層流造で他に類の稀な形式である。

什寶

傳運慶作木造狗犬（國寶）の外什器、古文書類が頗多い。

誓願寺 新京極停留場北

——宗派、淨土宗西山派本山——本尊、阿彌陀如來——

蛸薬師

法然上人の開基、今の建物は元治の兵火後の再興である、寺内の林泉はよい。豊臣秀頼の子國松、江戸時代の平民文學者井原西鶴の墓は當寺境内にある。豊臣秀吉が市中の寺院を京極に集めた頃は甚だ淋しい所で

今日寺町通の名を留むる程であつたが、今は各種の興行物をもつて充たされた繁華の巷となつた。蛸薬師・圓福寺・安養寺・錦天神・歡喜光寺・金蓮寺・染殿地藏など其一劃内にある。

豊臣國松

秀頼の子で伏見に匿れ其乳母の家に居た。徳川家康のために、六條河原に於て乳母の夫田中六右衛門と共に頸を刎ねられて此の世を去つた。其が漸やく物心づいた八歳の幼童であつたゞけ、哀れさがひときわ深刻である。

建仁寺 下京區建仁寺町四條南、四條繩手停留場南四〇〇米

——宗派、臨濟宗建仁寺派本山——本尊、釋迦如來——

我國最初の禪利

我が國に於ける最初の禪利で、千光國師榮西の開創した寺である。榮西は初め叡山に入つて密教を修して居たが宋より歸ると、建仁六年博多に聖徳寺を建て、京都に入るや鎌倉に於ける將軍源頼家の歸依を得て、禪利を建立し年號を採つて建仁寺と號した。

榮西が天台を棄て、禪を唱へ且つ延暦寺の特權だと心得て居た年號を寺に命じた處より、衆徒の反感甚し

く之を新教の徒として流竄せんとした。榮西爲に興禪護國論を著はして之に對抗し且つ朝廷に奏して布教のゆるしをうけた。源氏滅びて北條氏其後を承けて禪に歸依し、臨濟禪は各派に擴まり益々隆昌に赴いた。伽藍は創立以來幾度かの火災に逢ふて焼失し矢の根門以外は後世の再建である。

特別保護建造物

中。門。門扉に矢疵と思はしい痕が残つて居るので矢の根門とも云つてをる。鎌倉時代六波羅府の門を此處に移したと傳へてをる。

方。丈。安國寺惠瓊が安藝國安國寺から此處に移したと傳へ、單層入母屋造で、天井・欄間等に桃山時代の特色を存して居る。

塔頭

興禪護國院。開祖榮西の住つたところで像は其影堂にある。榮西興禪護國論を著はして他宗を論破したので此の名を附けたのであらう。庭前の菩提樹は開祖が宋より持つて來たと傳へられる。

禪居庵。宋の人僧清拙此處に住んだ。清拙は大鑑禪師と云ひ南禪・建仁兩寺の住職であつた。

什寶

國。寶。竹林七賢の圖の外明畫十六羅漢像十六幅、明惠上人消息禪僧の筆蹟其他五山版と稱する書籍

等甚だ多い。

墓

安國寺惠瓊の首塚。三輪執齊(京都の儒者)の墓。

榮西

岡山縣の人、十四歳の時剃髮して永らく比叡山に學んだが、仁安三年と文治三年の兩度宋に入つて臨濟禪を學び、印度に行かうとしたが其目的は達し得なかつた。我國に臨濟宗を傳へ七十五歳で入寂した。從來天台・眞言等は大部の佛典を讀破しないと宗義を會得することがむつかしかつたが、榮西の傳へた臨濟禪は不立文字の教へで文字に依らないで悟入することが出来るため、死生の間を行く鎌倉武士の生活に適し忽ち彼等の信仰を博し、諸國殊に關東には目立つて擴まるやうになつた。

榮西と茶

茶を用ふることは遠く奈良朝時代にあつたが其後絶えて記録に登らなかつた。榮西が入宋すると多くの佛書と共に茶の種子を持ち販り之が明惠上人に依つて榎尾に試植され、後宇治に栽培されたのが本邦に茶を常用する初めである。當初は之を藥用として用ひ嗜好品とするに至らなかつた。榮西の著はした喫茶養生記は此の事を詳記したものである。(三七五頁宇治の茶參照)

安國寺惠瓊

安國寺惠瓊は安藝國安國寺の僧で、天正年間秀吉が毛利氏に對して居た時其間に立つて熾和の周旋を

した人である。關が原の戦争が起つた時には西軍に加はつて活動した。西軍が敗れると京都の隠れ家から捕へられて、三條河原に梟せられた。彼が建仁寺と關係があつたので、其首は寺内に葬られた。其遺跡が久しく分らなかつたが、明治の中年方丈の左側の叢の中から發見された。

六波羅密寺

東山松原停留場西三百米

——宗派、眞言宗——本尊、十一面觀世音——

西國十七番の札所

應和年中僧空也の創立した寺で初め西光寺と云つたが、六波羅第址にあるので六波羅密寺と改められた。平清盛の邸宅も寺の附近にあつた。本尊は空也上人が天曆年間疫癘に悩む京都の人々を救はんと、自ら刀を採つて刻んだものである。壽永以來屢々火災に罹り、本堂のみは貞治の昔から存して居て特別保護建造物である。山號を普陀落山と稱し、西國三十三ヶ所十七番の札所である。

おもくとも五つの罪はよもあらじ。ろくはら堂へまゐる身なれば

寺に運慶及び湛慶自作の同人の木像がある。外に四天王像一軀、董其昌筆青綠桃源圖一幅亦有名である。

(四) 東山北部——三條大橋から聖護院まで——

順路

三條停留場——三條大橋——岡崎公園(動物園)——平安神宮——インクライン
(疏水)——南禪寺——永觀堂——若王子——鹿ヶ谷——安樂寺——冷泉天皇陵
——法然院——大文字山——銀閣寺——後二條天皇陵——百萬遍智恩寺——帝
國大學——吉田神社——後一條天皇陵——陽成天皇陵——眞如堂——黒谷——
聖護院——三條停留場——(行程約十三軒)

三條大橋

三條小橋停留場前、京阪線三條終點

上下兩京の界

橋は三條通にかゝり、上京・下京の界である。橋側に驛路里程標がある。この制は文祿・慶長のころ諸國驛路を定めた時におこつた。又古くは東海道五十三次の起點で膝栗毛を思ひ出させる。橋はいつ頃初まつたものか足利時代にはや架せられてあつた。天正の時石柱で築いて一町餘あつた。明治に之を修築したが欄干

に紫銅の擬寶珠を残してゐる。之は豊臣秀吉が増田長盛に命じて造らしめた遺物で銘文がある。
四條大橋・五條大橋とを合はして舊くから鴨川の三大橋といはれた。橋の東詰には御大典記念事業として昭和三年十一月大日本國士高山彦九郎先生銅像建設會の手で完成された銅像がある。彦九郎が「草莽の臣高山彦九郎」と叫んでこの橋上から皇居を拜したことは皆人の知る處である。

加茂の河原

京極以東、上は一條河崎町から竹田口に至る一帯の地を指し、今の河原町・木屋町・新京極などがそれで天正の頃まではすべて磔であつた。加茂の河原は昔より合戦があり、後には刑場にもあてられた。

岡崎公園

大極殿前停留場北

明治二十八年第四回内國勸業博覽會がこの地に開設せられた時買収せられたもので、同三十七年公園地に編入し、後大正三年および五年の兩度に地域擴張せられて現在參萬坪。園内には各種の體育施設・勸業館・商品陳列所・府立圖書館・公會堂等の設備がある。
動物園は殊に大規模で各種の珍鳥・奇獸をあつめ、都鄙の人々に一日の慰安をあたふるに十分の設備がある。

平安神宮

大極殿停留場北三百米

——社格、官幣大社——祭神、桓武天皇——

平安京の昔を偲ぶ大極殿

明治二十八年平安奠都一千一百年を記念するために創祀したものである。社殿は南面で昔の大極殿に模し碧い瓦、金色の鑑が丹朱の垂木や梁・柱に映じあひ、清い疏水が其宮域をめぐつて一大偉觀である。

應天門は二層の樓門で、全部を朱塗にして屋根に鸚尾を擧げて居る。

大極殿は中央を身舎とし化粧垂木を用ひ、左右に延長したる歩廊の端に高樓があり、東を蒼龍、西を白虎といふ。本殿は大極殿の北にあつて桓武天皇を祀り、宮後にある御苑は頗る大規模で、林泉の布置雅趣に富み鬱蒼たる老樹が晝尙暗きまでに枝を交へ、其影を宿して居る池水が又言ひ知れぬ眺めである。

時代祭

官祭は毎年四月十五日に行はれ、時代祭即ち私祭は十月二十二日に行はれる。平安朝の初期より明治初年まで一千餘年間の各時代の服装をした、十數町の行列が京の町を練り行く有様は誠に奇觀であると共に京名物の一として遠近より拜觀者が群集雑踏する。

大極殿と其址

平安京大内裏中の朝堂院即ち八省院の正殿である。天皇が親しく臨御して政を見られ、又賀正・即位等の國儀・大禮を行はれる所で、門牆の設け樓閣の構へ最莊嚴を極めて居る。此平安京の大極殿は其荒廢に至るまで、三十代三百二十年餘の久しきに及び、其間正賀・即位の大禮は、大抵此處で擧げられた殿址は今の二條離宮の北西、聚樂廻の瓢箪と字する地にあり、一大石碑を起て、記念してゐる。

武德殿

平安神宮の西隣にあり、桓武天皇平安奠都の時、大内裏に武德殿を建て給ひし故事に基いて、明治二十八年創立し、大日本武德會本部と稱し、武術の練習場である。

蹴上インクライン

市電及京津線蹴上停留場前

船が陸を走るインクライン

栗田口の東日岡の坂路、爪先上りの街道は所謂蹴上であつて、こゝにインクラインがある。インクラインとは傾斜といふ意味で「インクラインブレイク」の略、即ち斜面に鐵軌を敷設し、鐵鎖によつて船を載せた臺架を上下してゐる。長さ三百二十間、勾配十五分の一で、上下する艇船(三十石積)は年凡一萬六千を算するといふ。

疏水運河

琵琶湖の水を京に引く

疏水運河は琵琶湖の水を京都に導き、交通運輸の便を計り、且つ其の水力を利用して工業の原動力を得んが爲に開鑿したもので、明治年間に於ける我國土木工事の著名なものゝ一つである。

第一疏水運河は京都府知事北垣國道氏の計畫に係り、京都帝國大學教授田邊工學博士が工事主任となり、工費約二百萬圓を投じて、明治十八年八月工を起し二十三年四月幹線の工を了へ、二十七年九月支線其他の工を完成した。大津三保崎から蹴上に出づるまで延長六千七百七間で一秒時の流量は三百立方尺である。第二疏水運河は京都市に於て需用する電力の缺乏を補はんが爲め京都市會水利委員の調査に基き計畫された工事で、明治四十一年十月起工し、同四十五年六月竣工した。工費約四百五十萬圓、大津三保崎から第一疏水運河の北に沿ひ、十五間の間隔を以て長等山下を貫き、それから第一疏水と或は離れ或は近づき三條蹴上に走り第一疏水に合併。延長四千七十九間(約二里)水量一秒時五百五十三立方尺である。(三二五頁疏水運河の利用参照)

南禪寺

南禪寺前停留場東二百米

宗派、臨濟宗南禪寺派本山——本尊、釋迦如來——

(三二五頁疏水運河の利用参照)

弘安年間（六四〇年前）龜山上皇が秀麗な山水を愛し、此の地に離宮を営まれたが屢々妖怪が出没すると云ふ噂が立ち、宿直の者や侍臣等が恐怖するので、東福寺の大明國師普門和尚を召され怪異鎮撫の修法を命ぜられた。國師の禪徳と丹誠に依つて怪異の噂は止んでしまった。上皇叡感斜ならず宮の上部の地を割いて精舎を建て之を國師に賜はつた。之が南禪寺の起りで其以後上皇は下宮に居られ、時々國師を召されて禪學にいそしまれた。塔頭の南禪院は上皇の御座所で其後之をも寺へ御寄進遊ばされた。

後宇多天皇は宸筆の勅額を賜ひ、後醍醐・後小松の兩天皇は各々禪宗京都五山の首班に列する旨の御沙汰を賜はつた。室町時代延暦寺衆徒の焼打に逢ひ、應仁の兵火に諸堂を失し甚しく衰微して居たが、秀吉や家康が世に出てからはその保護に依つて、次第に舊觀に復するやうになつた。

塔頭

金地院 黒衣の宰相、僧録司（佛徒・寺院總取締）たる僧崇傳の住んだ所で、崇傳が徳川家に媚る餘り皇室を抑制し、豊臣家を滅亡に導いたことは有名な話である。

天授庵 戰國時代の亂離に荒廢したが、慶長七年細川幽齋資を投じて復舊し己が菩提寺とした。境内には傑僧虎關の建てた開山大明國師の塔がある。

南禪院 龜山上皇、離宮の跡で、現在の建物は徳川綱吉の母桂昌院の再建である。院の右方に龜山上皇御分骨の陵がある。陵下の庭園は上皇御遺愛の庭で、心月の池は今も昔の佛を止めて居る。

什寶

山水樓閣圖―狩野元信筆。山水圖―傳徽宗皇帝筆（以上國寶）龜山法皇、大明國師畫像、龜山法皇御願文、本光國師（崇傳）日記（豊臣、徳川兩時代の貴重なる資料）異國日記（玄人筆外國關係重要文書）

陵と墓

龜山上皇御分骨所 南禪院内にある。後嵯峨皇后陵、細川幽齋の墓（歌人）

梁川星巖の墓（美濃の人、詩人、勤王家）

尊良親王と御首塚（當寺の北）足利氏の大軍に包圍されて糧食つき延元二年三月、越前の金崎城陥る

や、後醍醐天皇の皇子尊良親王は義貞の子新田義顯と共に自害せられ、皇太子恒良親王は京都に入つて御他界遊ばされた。足利高經が皇子の御首を京都に送つたので、夢想國師は此處に厚く葬り奉つた。

特別保護建造物

大方丈 慶長十六年禁裡御造營の時、舊清涼殿を賜つたものである。

小方丈 伏見桃山城内にあつた舊殿を移したものである。

三門 寛永五年藤堂高虎の建造したもので五間三戸の雄大な樓門である。樓上に家康・高虎・崇傳の像が安置されて居る。昔石川五右衛門が住んだとの傳説のあるのは今の門ではない。

永観堂

南禪寺北二百米東側

——宗派、淨土宗西山派本山——本尊、阿彌陀如來——

紅葉の永観堂

弘法大師の弟子眞紹シシヒョウの開基で眞言宗、禪林寺といった。承暦年間（凡そ八五〇年前）永観律師が住んだので永観堂の名が起つた。其後高倉天皇の時、靜邊上人が淨土宗に歸したので改めて、西山派となつた。

境内は楓の名所で、池・瀧其他泉石の配置何れも雅趣に富み、風流人の杖を曳くものが多い。

諸堂宇は近代の建築であるが、寶物類には恵心僧都二十五菩薩來迎圖、同山越阿彌陀像、淨土曼陀羅等古代の優秀なるものが多く藏せられて居る。

若王子神社

市電南禪寺前停留場北東凡一軒

——社格、無格社——祭神、伊弉諾命・伊弉册命——

紀州熊野の御分靈

後白河法皇永暦年間、紀州熊野の御分靈を勧請されたものであると傳へられ平安朝の末頃は白河熊野と稱

した。背後の山は楓樹をもつて滿され、京都に於ける楓葉の名所である。山中にある三ヶ所の小瀑布は夏時遊覽客を引きつけて水に親ましまして居る。寛正六年足利義政此所で花見の會を催した。

鹿が谷

淨土寺町山麓の地名

今談合谷と云ふ。法性寺入道俊寛が治承元年（約七六〇年前）大納言成親ナリチカ・平判官康親ヤスチカらと此の附近の山莊に會して、平家滅亡の謀を廻らした所である。（平家物語）

安樂寺

鹿が谷町法然院南

——宗派、淨土宗——本尊、阿彌陀如來——

法然上人の舊跡

法然上人の念佛修業の舊跡である。

上人の專修念佛の弘法に感化せられて、上人を慕ひ道を求むるもの多く、殊に女人の薙髮するものが上下共目立つて多くなつた。仁和寺道助法親王御母坊門局、後鳥羽院女房松虫・鈴虫の如きそれである。

宮女松虫・鈴虫は私に脱れ出で、法然の弟子住蓮・安樂の二人に従つて尼になつた。上皇の御憤り甚しく承元元年（七二〇年前）兩僧は斬に處せられ、法然上人は土佐に流されてしまった。

紫宸殿にて御即位

冷泉天皇(第六十三代) 櫻本陵 上京區鹿ヶ谷町、法然院の前方田圃中
寛弘八年崩御、櫻本寺の前の野に火葬し奉り、此山のかたはらに埋め奉った。御陵は小さな圓墳で周圍百二十餘間。

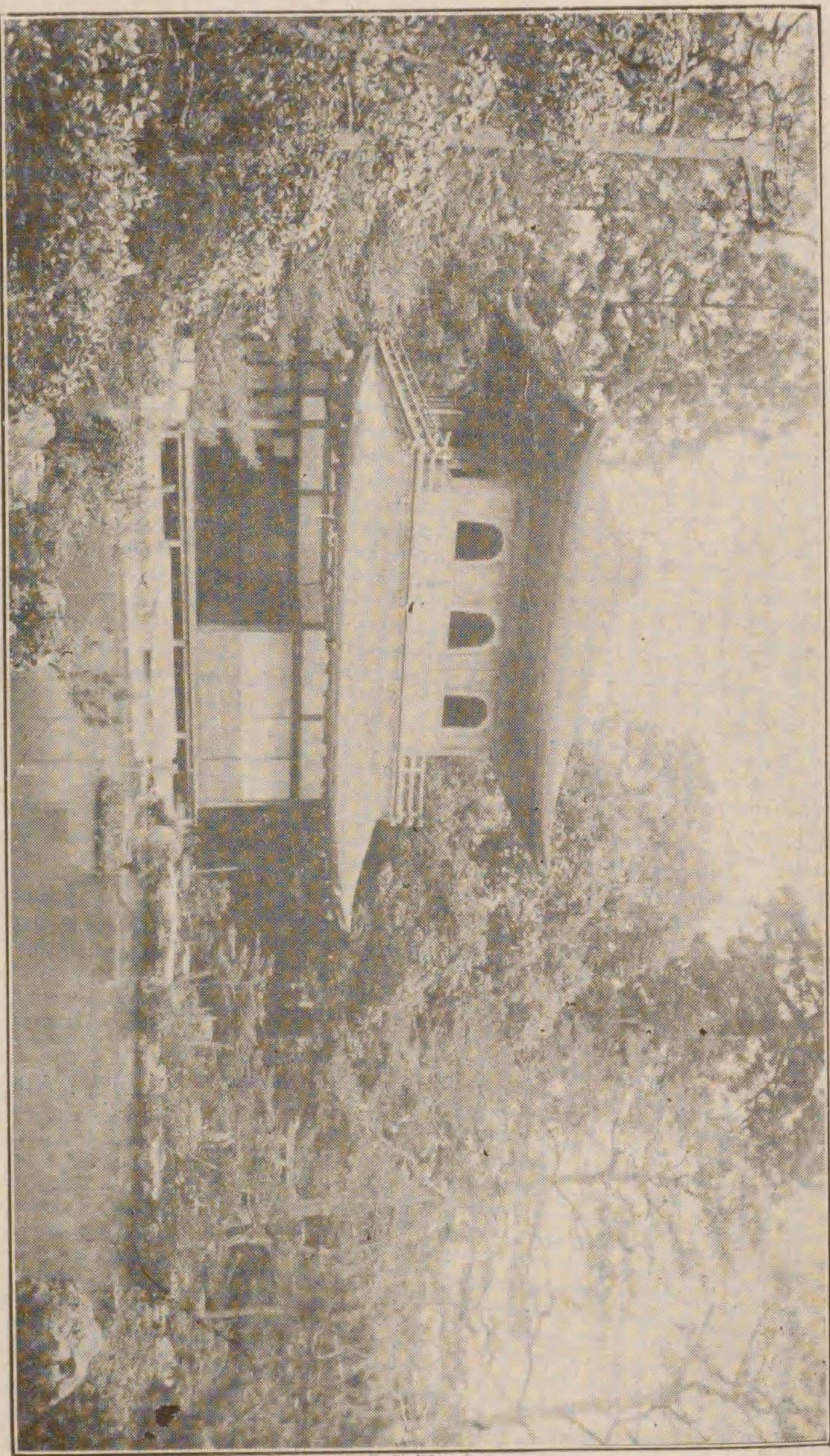
天皇は村上天皇の第二皇子、康和四年紫宸殿に御即位、紫宸殿にて御即位遊ばされたのは天皇が初めてである。——從來は大極殿で行はれた——天皇は御多病、即位後も朝に出でられることがなかつた。御在位二年壽六十二。

法然院

鹿ヶ谷町、銀閣寺前を南二百米

宗派、淨土宗——本尊、阿彌陀如來——

法然上人其弟子住蓮及安樂と共に六方禮讃を修せしところと傳へてをる。都門士女の參拜甚だ多かつたが後類廢してしまつた。延寶年間(約二五〇年前)智恩院主萬無之を嘆き、幕府に請願して大に興隆に力め、唐の廬山白蓮社の風に模し、寺運大いにあがつた。其後幾多の變遷を経て今日に至つた。



——東山將軍の風流を思はず——銀閣(室町時代)

足利義政の建立

慈照寺と云ふ。足利義政が政務に飽きて、應仁・文明の大亂をよそに、この工を起して文明十五年（約四

銀閣寺

南禪寺前停留場北東凡そ二軒

——宗派、臨濟宗——本尊、釋迦如來——

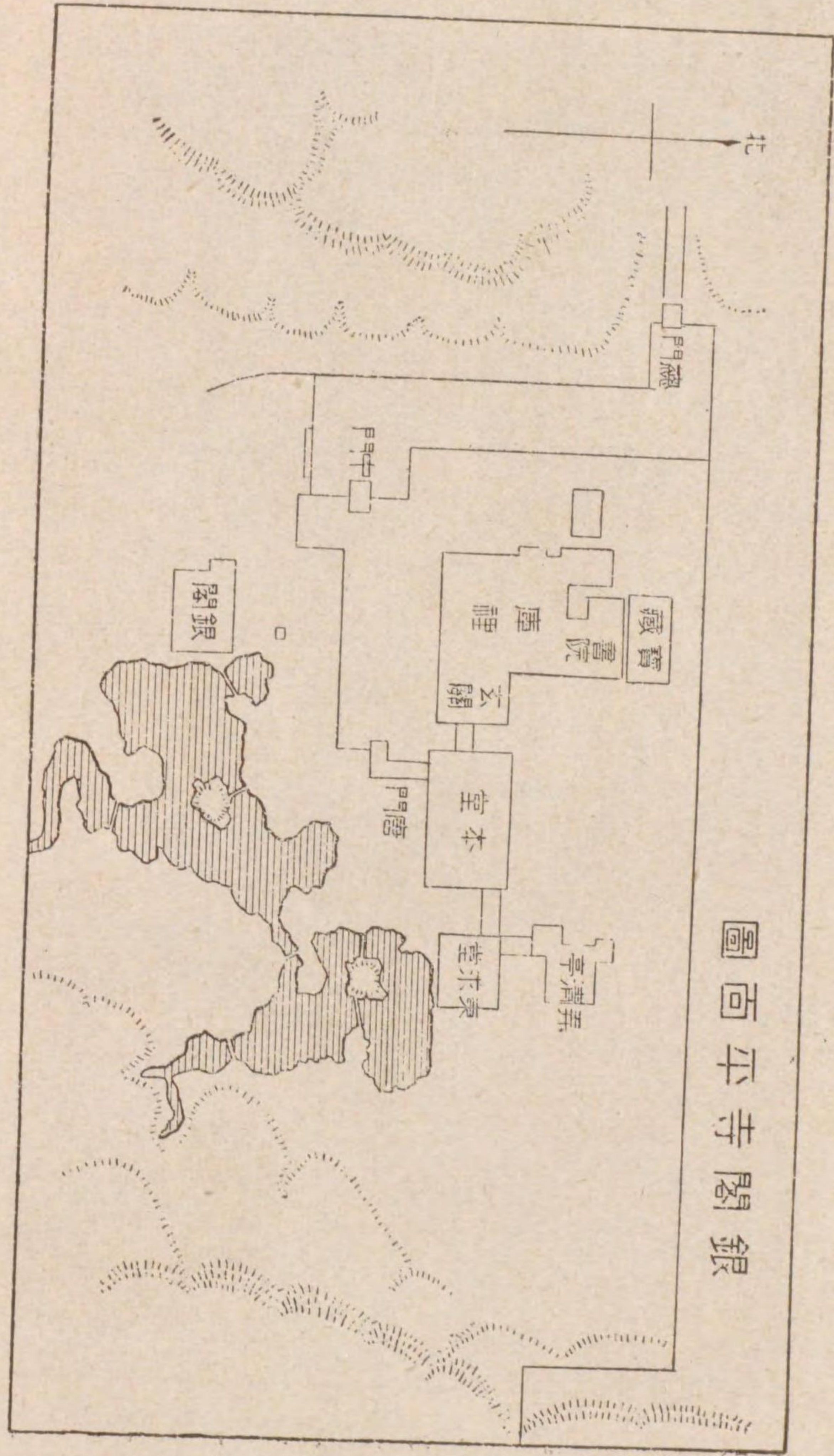
昔山中に如意寺があつて其廢址が今も残つて居る。
なかつた維新前の人々には一年中の最も偉大な眺の一であつたに違ひない。
つけると大字形の光と焰が薄黒い空に浮き出て其壯觀は言葉に盡し難い。昨今のやうに強い電燭が眼に觸れ
大文字、第一畫長さ四十間、第二畫八十間、第三畫六十八間。毎年八月十六日の夜、之に薪を積んで火を
の代に復興したものである。

大文字山

如意ヶ嶽

電車出町停留場東凡四軒

點火の起源は弘法大師から始まつたと傳へられて居るが詳でない。其後久しく廢絶して居たのを足利義政



銀閣寺平面圖

五〇年前)に成った。此の地にはもと天台宗浄土寺があつた。義政こゝで佛教に思ひをこめるかたはら、圖書・珍器を集めて詩歌を樂しんだり、香合・喫茶を弄んで居た。併し諸建築の内部裝飾が十分整はない内にこゝで薨じ、遺命で此の別業を寺として、義政の諡號を取つて慈照院といつた。東山殿の盛時には十數字あつて宏壯の構であつたが、世の移りかはりと共に廢れて現存するものは少い。其中銀閣と東求堂とは特別保護建造物で、東求堂にある義政の像は國寶である。

金閣にまねた銀閣

園中二層の建物で北山の金閣に模したもの、寶形造で露盤に銅の鳳凰がある。下層を潮音閣といひ上層を心空殿と呼んで居る。庭の林泉と相應じて中々配合がよい。水石の舗設は茶道の祖、相阿彌の手になつたもので、後世築園の手本である。義政は初め金を此閣に押し金閣と莊嚴を競はんとしたが資力が足りないで銀に改めた、しかし其銀箔さへ飾ることが出来なかつたが其志を汲んで銀閣と云つた。こゝにある奇木怪石は洛中の寺社や人民から取つたものである。

銀閣は寛永年中の修理にかゝり、金閣と同じく佛殿と住宅とを結合し、更らに庭園とも調和せしめたものであるが、同じく住宅でも金閣は尙寢殿造の風を存してゐるが、銀閣は書院造となつてゐる。建築としての格好は金閣に劣るけれども猶瀟洒淡泊な一佳作たるを失はない。

東求堂

東求堂は義政の東山の山莊の遺物の一つで書院造として、室町時代の住宅建築の唯一のものである。

寄棟造、單層、柿葺の建物で組物は舟肘木、軒は二軒疎垂木となり、すべて木割が細い。中央を佛間とし、其天井は折上小組格天井であるが、他の間は棹縁天井である、間仕切には襖・腰高障子を用ひ、細棧の窓もつけてゐる。又書院構・違棚のある四疊半があり、それには爐を切つて四疊半茶室の起源をなしてゐる。(日本美術史講話)

後二條天皇(第九十四代) 北白河陵 上京區白河追分町

五上皇院中にあらせらる

陵は高さ八尺、周圍四十間の圓墳で、上に二大松樹があり、周圍に障がある。

天皇は宇多天皇の第一皇子、後伏見天皇の後を受けて御即位。御年十七。時に後深草・龜山・後宇多・伏見・後伏見の五上皇院中にあらせられ、政務は龜山・後宇多兩上皇が決められるといふ有様で、御在位六年徳治三年崩御、壽二十四。

智恩寺 出町停留場より東一軒、帝裏門前

——宗派、浄土宗鎮西派本山——本尊、釋迦如來——